

MediaNet ^{NO.7}

慶應義塾大学メディアネット

1999



<特集> 新システムへの移行：3つのコンセプトを掲げて

「KOSMOS II」リプレースの経過とその意味

図書発注・受入システムについて

「KOSMOS II」の図書目録システム

雑誌システム「KOHEI」の現在

新閲覧システムの開発

新OPACについて

Mita Media Center

Hiyoshi Media Center

Medical Information and Media Center

Information and Media Center for Science / Technology

Shonan Fujisawa Media Center

ビュフォン『博物誌』パリ 1749-1808 44v.

[Buffon, Georges-Louis Leclerc. *Histoire naturelle generale et particulière*. Paris :L'imprimerie Royale, 1749-1808]



博物誌は、古代ローマのプリニウス、そして時代を経てイスのゲスナー、オランダのヨンストン、フランスのビュフォンへと引き継がれた。現代日本では荒俣宏氏によって博物誌が再認識された。内外の古書市場においてもカタログには必ずと言ってよいほど博物誌が掲載されており、人気の高いジャンルでもある。そして古今東西を問わず、奇麗なもの代表として描かれる花鳥、珍しい動物などが博物誌の中で取り上げられてきた。

本塾図書館では荒俣宏旧蔵博物誌図書を核に幾つかの博物誌を収集してきた。その中からビュフォンの「一般および個別の博物誌」に目を向けてみよう。ジョルジュ＝ルイ・ルクレール・ビュフォン(1707-88)はイエズス会の教育を受け、さらに物理学、数学、博物誌を学び、1739年にパリ王立植物園園長に就任した。その当時、海外の植民地から運ばれてくる動植物と鉱物の標本や情報をもとに、ルイ・ドーバントン(1715-1800)の協力を得て「博物誌」の刊行に至った。

1749年に初版の第1巻が刊行されるや、初版千部は6週間で完売になったという程好評であった。全44巻からなる本書は、ビュフォンの生前には第36巻まで刊行され、没後残り8巻が出版された。その構成は、四足獣類、鳥類、鉱物、博物誌補遺、そして没後であるフランス革命以降刊行された、両生・爬虫類、魚類、そして鯨類からなる膨大なものであった。

博物誌の挿絵というと、ゲスナーの「動物誌」(1551-1606)に掲載され、デュラーの描いた銅版画を模した「サイ」が想起されるが、ここでは今や人間のコンパニオンである身近なイ

ヌ、とりわけ頭が極端に大きく、下顎を出してローリングして歩く「ブルドック」を取り上げてみよう。ブルドックの歴史は古く、12世紀にはイギリスにいたとされる。見世物の一つである"Bull Baiting", 「牛いじめ」や「熊いじめ」にブルドックは使われていた。当時のブルドックを探すには絵画や一般書の挿絵に求めなければならないが、ビュフォンの「博物誌」第5巻(1755)には、フランスのジャック・ド・セベ(1742-70)によって描かれた銅版画が掲載されている。この銅版画は、「ブリタニカ百科事典」の初版(1771)において、イヌのラテン語名である"CANIS"という項目の挿絵として、イギリスの銅版画家であるアンドリュー・ベル(1726-1809)によって流用されており、その当時の体型を忠実に再現していると思われる。

その挿絵により、18世紀後半の牛いじめ当時のブルドックを見る事ができる。現代のブルドックと比べると別な犬種に見え、ボクサーやマスチフのようである。鎖に繋がれている牛を複数のイヌで追いかけて噛み付くために、俊敏さと獰猛さが要求された。1835年、残酷さのあまり牛いじめが禁止されると、ブルドックの人気は一時衰えるが、すぐに犬種保存の動きが見られた。牛いじめ時代の特有な性質は失われ、「醜悪美」(Beauty in Ugliness)の極致を求め、極めたのが現在のブルドックである。

ビュフォン以降、博物誌はダーウィンらの進化生物学にとって代わられた。欧米の百科事典で「博物誌」という項目を容易に見つけることのできない現在、このような形で学問的使命を終えた博物誌を見ていくことができるのである。

いちこけんじ
市古健次(三田メディアセンター課長代理)



MediaNet No.7

目 次

巻頭言

メディアセンター、来し方行末 松下 智之 1

特 集 新システムへの移行:3つのコンセプトを掲げて

KOSMOSⅡ リプレースの経過とその意味 入江 伸 4

図書発注・受入システムについて 沢田 純子 10

KOSMOSⅡの図書目録システム 原 直美 14

雑誌システム「KOHEI」の現在 竹内 美樹 16

新閲覧システムの開発：閲覧ワーキンググループの活動を中心にして 和田 幸一 19

新OPACについて 金子 康樹 24

集中処理機構の発足とその意味 入江 伸 30

白楽サテライト・ライブラリー 宮崎 貞治 32

三田メディアセンターの雑誌再配置について 村田優美子 36

ILLサービスの拡充について 平野 真紀 40

日吉メディアセンターにおけるインターネット・エリアの開設 酒井由紀子、木下 和彦 45

医学メディアセンターにおける電子ジャーナル導入実験 市古みどり 50

「政策・メディア研究科学位論文検索システム」のWWW公開について 吉沢亜季子 54

死と無常の寓意とエンブレム 木下 和彦 56

慶應義塾図書館所蔵品より 松田 隆美 56

メディアネットレポート データベース検索システムの新しい展開

三田メディアセンター 上岡真紀子 62

日吉メディアセンター 木下 和彦 64

理工学メディアセンター 清野 早苗、三谷三恵子 66

湘南藤沢メディアセンター 三瓶美和子 68

海外レポート

カリフォルニア大学サンディエゴ校との交換協定について 加藤 好郎 71

五十住さんを迎えて 大橋 史子 72

英国電子図書館事情 松本 和子 74

ティールーム

奇怪な機械のお話	荻野 安奈	29
早朝の図書室	マイケル・エインジ	60
国境を越えたある日本人の手紙から	野見山哲生	70

スタッフルーム

システムエンジニア(SE) 残酷物語	田邊 稔	44
本屋巡りの楽しみ	片桐 裕恵	53
小さな美術書との出会い	山田 摩耶	77

資料

メディアネット・メディアセンターに関する書誌	78
スタッフによる論文発表・研究発表	78
年次統計資料	80

ピュフォン『博物館』パリ 1749-1808 44v. 表Ⅱ

メディアネットニュース	52
三田メディアセンターニュース	35
日吉メディアセンターニュース	61
湘南藤沢メディアセンターニュース	61

小展示ニュース(三田メディアセンター)	76
(日吉メディアセンター)	35
(医学メディアセンター)	76

三田図書館・情報学会月例研究会	18
-----------------	----

展示会予告	表Ⅲ
-------	----

編集後記	86
------	----

巻頭言

メディアセンター、来し方行末

まつした ともゆき
松下 智之

(メディアセンター本部事務長
兼 ITC 本部事務長
兼 三田メディアセンター事務長)

冒頭から個人的な話題で甚だ恐縮であるが、振り返れば、私は学生時代を含めると既に40年近くにわたって慶應義塾にお世話になっていることになる。また、その期間は同時に、慶應義塾図書館にお世話になった時間ということにもなる。池田真朗先生の域には到底達しないが(池田真朗「少しだけ疎遠になった恋人へ」『MediaNet』No.6, p45), 私も図書館は結構利用するほうで、学生時代には入り浸っていたといって差し支えない時期があった。

図書館にしょっちゅう行っていたなどと言うと、「真面目ぶっている」ふうに、厭味に取られやしないかといったそこはかとない不安感が、「若年」の頃から常に心の隅を占めていて、どういうわけか今まで口の端に乗せるのをためらう心情に陥っていた。しかし、このたびメディアセンターの職務を仰せつかってようやくそのしがらみが解け、晴れて公言できることとなつたことに喜びを感じている。

私の師は日本法制史の権威であるが、常々当研究を「流行らない学問」とプライド高く(時に苦笑混じりに)おっしゃっており、私は師のゼミでやはりこれもあまり流行っていなかった日本古代史を選択した。現在は「ブーム的」に注目を浴びることが多いが、当時は(法学部でもあったせいか)周りを見ても関心を持つものなど誰もいないという状況であった。私は一人いろいろと思いを巡らせて、文学部の考古学の講座に密かに潜り込んだりと工夫を凝らしはしたが、進め方としては基本的には図書館にこもって文献をあさるしか方法がないと悟り、図書館通いが一時は日常化してしまったという次第であった。勿論当時は旧館で、現在の大会議室の奥の、確かレファレンスのあった辺りの一つの椅子を、かなりの時日独占していた記憶がある。当然まだカードの時代で、検索には大変な労力が必要であったが、探し当てた本を手にして必死になつて

ページを繰って目的を達したときの思いは、一種独特的の言葉にし難い喜びのようなものがあって、陶酔感に似た熱い感覚を覚えたものであった。

当時を回顧すると、環境に関して言えば今の状況は、月並みな言葉ではあるがやはり隔世の感を覚える。個人的な印象で言えば、証券取引所で場立ちがいなくなって、ずらりと並べられたコンピュータ端末の前で黙々とキーボードがたたかれている光景から受ける感覚に似た思いである。しかし、「メディアセンター」と呼称が変わり、「カード箱」から「電子箱」に検索手段が変わっても、図書館に勤務する者の胸底に流れなければならない基本理念は、あの「感激的な熱い思い」と称し得る情念への理解と共有であるべきなのではないかと、最近とみに考えるようになってきている。

さて私が最初に出会った慶應義塾図書館は、文字どおりの「図書館」であった。建物や組織、それらすべてを含んだ存在そのものが、図書館と呼称されていた時代だった。その後時の流れは急となり、短期間に幾度かの変貌を重ねる展開となって現在に至っているが、そもそも慶應義塾において「図書館」は、いかなる経緯を経て存在が確立されてきたのか、少しその来し方を振り返ってみたい。

起源については、いろいろな捉え方ができるようである。慶應義塾創立当初から存在したとみられる図書部屋にルーツを求める事もできるが、鎌田栄吉塾長(明治42年当時)が起源とされたという、明治23年設立の「大学部書館」を嚆矢とする考え方が妥当かと思われる。明治32年に「書籍館」として書庫と閲覧室を分離、明治38年に正式名称を「慶應義塾図書館」とするなどの変遷を経て、明治45年5月、慶應義塾創立50年記念図書館(現在の図書館旧館)が設立された。その時が慶應義塾図書館の公式設立年月とされている。(伊東弥之助『慶應義塾

図書館史』慶應義塾大学三田情報センター 昭和47年)

その後、震災を受け、また今次大戦によって大被害を蒙る等々の転変があって、時代は巡り、私が出会ったのは、復旧の目処が立ち、増築が成った昭和30年代末頃の「図書館」であった。

私が慶應義塾に職を得て間もなく、図書館と研究室図書室を集約して発展させる構想が進展し、昭和45年4月1日、慶應義塾大学研究・教育情報センターが開設された。その目的とするところは、「従来の慶應義塾図書館…を中心にして各地区に情報センターを設け、義塾の図書館運営を一元化し、学術資料の充実、目録の整備と効果的な利用者サービスの実施、さらに図書館運営の効率化をもくろむ」ものであった。(瀧川雅俊「研究・教育情報センターの発足」『塾監局小史Ⅱ』昭和62年 p118)

義塾の歴史にとってこれはまさに画期的な出来事であったといえよう。義塾創立110有余年にして「図書館」は、「時代」というものの強い光を真向から浴びて、大きくその姿を変えることとなった。法的な問題との関連から「慶應義塾大学図書館規程」が新たに制定されて図書館の形体は残ったが、その組織はいなくなれば「バーチャル」なものとなり、実態運営組織からは「図書館」の名称が消滅することとなった。

そして、昭和57年4月、三田情報センターとして図書館新館が開館し、慶應義塾図書館の歴史に新たなページを加えることとなったのである。

一方、コンピュータ関連技術の進歩は急速で、義塾も情報化社会への動きに対応すべく組織の整備を進めた。昭和44年にそれまでの「三田電子計算室」等を統合して情報科学研究所を設立、昭和54年にはさらにそれを発展させて「慶應義塾大学計算センター」を発足させており、「図書館」が「研究・教育情報センター」へと組織変更されてから四半世紀を経た平成5年4月、図書館機能と計算センター機能が統合されて新たにメディアネットが設立された。

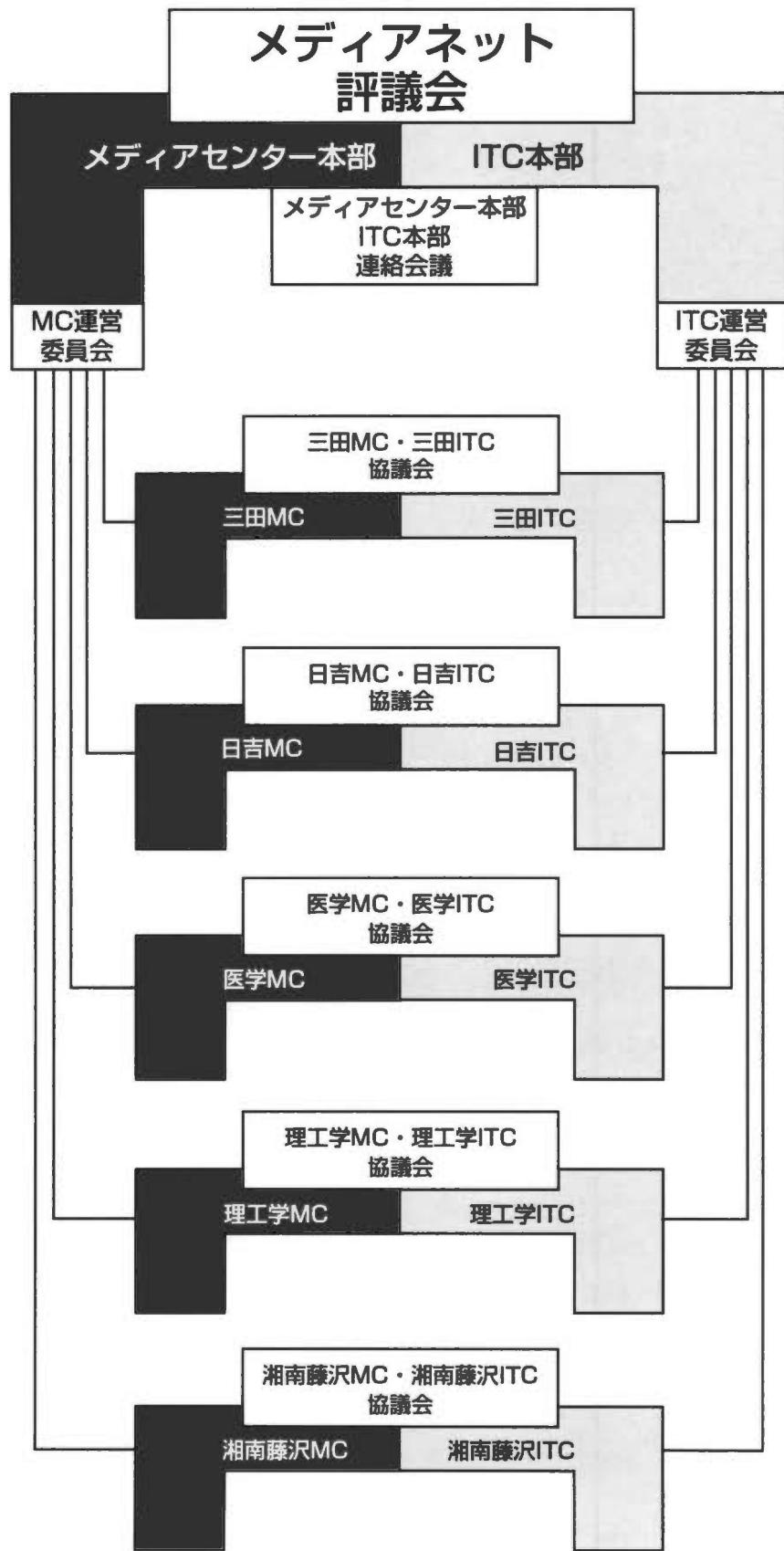
が、本年2月、計算センター機能をメディアセンターから再び分離することとなり、インフォメーションテクノロジーセンター(ITC)として独立させることとなった(組織図参照)。

こうして見ると、慶應義塾140年の歴史のうち

110年の間、図書館は、名称・組織ともども「図書館」としてゆるぎのない存在であったが、ここ30年足らずの間に3回もの改組が行われたことがわかる。これは、日本社会そのものの移り変わりと歩調を揃えているといって差し支えないようである。それだけ技術革新は急であり、社会そのものが変革に追われて来たといって良いのであろう。

情報化社会というものが、この先どのように展開するのか予想がつかない状況の中で、「図書館」の将来を語るのは難しいことである。先日訪問する機会を得た大英図書館やケンブリッジ大学図書館では、電子媒体によるものについてはまだ長期保管に関する評価を確認し得ないところから、当分の間、紙媒体との併行対応を考慮することであった。このような技術的な課題とともに、基本的に考えなければならない問題として、本というものに対する恋愛感情にも似た「情念」は、多くの人の心からこれから先も消えることはないのではないかということがある。つまり、いかに情報技術が発達し、文献等の存在情報が瞬時に把握される状況となっても、さらにその内容が画面上で即時に検索可能な状況となっても、「現物」に触れたいという欲求は、研究遂行にかけると同様の情熱的な思いとして残っていくのではないかということである。

図書館は「古本を埋葬する死せる墳墓にあらず」(前掲『慶應義塾図書館史』p70)、単なる本の博物館と化す方向とはならないと思われる。おそらく図書館は、人間の頭脳にすべての情報が機械的に瞬時にインプットされるような時代が来るまでは、人類の叡智を蓄積し埋蔵する大地の役割を担うのは間違いないところであると思う。ゆえに、メディアセンターには、鉱脈の情報を示す道標としての能力を備え高めるだけでなく、掘り進むことによって金銀あるいはダイヤモンドそのものに行き当たり、それを自らの手で磨き上げることのできる工房としての役割を担わせなければならないとも思う。その任に堪えるには相応の物理的な環境が必要となるのは言うまでもなく、メディアセンター管理を職務とする者は、近未来の具体的な対応について緊切の課題を負わされているということになるであろう。



メディアネット組織図

KOSMOS II リプレースの経過とその意味

いわえ
入江 伸

(メディアセンター本部課長代理)

1. はじめに

この『MediaNet』が出るころは「KOSMOS II」(Keio university System of Multimedia Online Services II)の稼動から1年以上が経過している。そのころまでにはKOSMOS IIの客観的な評価を行いたいと思っている。それは今後のメディアセンターの方向を決定するためにもきわめて重要なことだからである。

本稿ではシステムリプレースや、それに関連する集中処理機構(全地区の収書・目録業務を集中して処理するための組織)立ち上げについての事情を整理する。

システムリプレースに向けて、システム担当が状況をどのように評価し、計画立案を行い、実施してきたかについてもできるだけ整理したいと思う。

なお、新図書館システムについての一般的な解説は、早慶の交流会や『熟監局紀要』で行っているのでそれを参考にしていただきたい。

2. 1997年<データ改修とKOSMOS延命策>

私が職員としてKOSMOS運用グループに参加したのが1997年であった。その時点では運用グループといつても明確な組織体制があったわけではなく、個人的な誠意と技量、常駐しているオペレータ組織の業務範囲に委ねられたものだった。

運用グループではこの時点でKOSMOSに有効な手を打たなければシステム的限界まで1年しかないと判断していたが、意思決定機構が不明確だったこともあり、有効な手法を確立できない状態でした。

2.1. KOSMOSの状況

KOSMOSはサービス当初から続いている障害が収束せず、稼動後5年以上を経ても安定した品質を実現できていた。開発メーカーと運用グループの間で棚上げ状態になっている問題が多くあった。

このような状況の中、利用部門ではKOSMOSの機能の中で利用可能な部分をそれぞれの判断で使用していたため、システム運用グループでもその実態を細部まで把握することはできず、システム全体としては不均質なデータベースとなっていた。

一方で、遡及や滞貨事業の進展によりデータ件数は増大を続け、特に書誌インデックスは抜本的な手当を行わない限り、カレント分だけの運用でも1年でパンクする状況にあった。しかし、このインデックスの再構成は、少なくとも3ヶ月かかる計算だったため、簡単に実施できるものではなかった。また、データベースの再構成も5年以上行っていたため、各データベース容量にもばらつきがあり、再配置が必要になっていた。

それにもかかわらず、洋書遡及やデータ改修の事業が予定されており、数十万規模でデータを登録しなければならなかつた。

このまま意思決定を放置すれば、1年後にはシステム停止・事業計画断念は必至の状態だった。

2.2. 洋書データ改修と遡及

KOSMOS書誌データベースの大きな特徴のひとつに、書誌階層があった。この書誌階層はシリーズ図書の目録管理などを効率よく行えるという利点があるものの、データ構造が複雑になってしまいういう問題点があった。このデータ構造がシステム構造やプログラムを複雑にし、システムのパフォーマンスや保守作業を難しくしていた。

書誌のデータ遡及で必要となる一括登録では、複雑なリンク関係を持つデータを作成することが難しく、そのための作業に登録時間が数倍に膨れることがあった。

当時、メディアセンターの最大の政策課題であった、三田地区の数万の滞貨解消のため、複雑なデータ構造とKOSMOSによる作業効率の低下に対する抜本的な解決策として、書誌階層データ維持の停止

を決定した。

階層データの維持の停止は目録業務の効率化を実現したが、一方でKOSMOSの書誌データベース内に階層を持つデータと持たないデータが混在することとなった。しかも、このリンク関係の複雑なデータをオンラインで修正することは、システム負荷がきわめて高くなるため、修正さえもできない状態が発生していた。

そのような八方塞がり状態を突破しようとして計画されたのがデータ改修であった。

この改修作業は、以下のように計画された。

- (1) KOSMOSから書誌・所蔵・著者名典拠および各種リンクデータを吸い上げ、UTLASへ送付
- (2) UTLAS側はKOSMOSデータをUSMARC形式に編集し、ISBN等の同定条件に基づいてUTLASのデータへ置き換える
- (3) アップグレードしたKOSMOSデータ(USMARC形式)を納品
- (4) (3)の納品データでKOSMOSデータベースを置き換える
- (5) (2)のUTLASデータベース(KOSMOSデータベースのサブセット)を利用して洋書遡及を行う
- (6) (5)終了時点で遡及データをKOSMOSへ登録する

この作業手順は、はじめ、遡及作業で行うKOSMOS書誌データの検索と外部書誌ユーティリティの検索を一度で行うために、外部書誌ユーティリティ上に仮想のKOSMOSデータベースを作り、検索回数を削減し、遡及費用を押さえようとした手法であった。

改修作業はその手順を拡張し、仮想のデータベースを既存データのアップグレードにも使えるという考えを元にしたものだった。

しかし、KOSMOSデータベースは日々更新が行われ、1年経過した時点ではまったく別のデータ内容やリンク関係になっている。オペレーション制限を依頼してもシステム的にチェックできないため、リンク関係の維持はできない。

つまり、置き換え時点で1年前のリンク関係をチェックし、問題のあるデータを復旧しなければならない。実際の置き換えでは時間の制限やチェック

項目が複雑なため、完全な修復は困難であった。登録後の復旧作業には数ヶ月を要し、まだ修復できていないデータもある。

では多くの問題が予想された改修をなぜ行う必要があったのだろうか。その理由は、KOSMOSのデータ特性では新システムへのデータ移行が難しくなり、システム選定の幅を狭めてしまうためである。

2.3. 方針の設定

システム運用グループは1997年の状況を踏まえ、以下のように方針をまとめた。

- (1) KOSMOSを2年延命させる
- (2) 2年を目標にシステムリプレースを終了させる
- (3) その間に可能な限りデータ整備を行う

1997年1月時点では洋書改修データをKOSMOSに戻すことについて明確でなく、必要があるなら戻してもいいという判断であった。

ただ、短期間にシステム移行を完了させる場合は、KOSMOSから吸い上げたデータのみを対象にしないと対応できないだろうという気持ちがあったため、置き換えることにした。

この意思決定を受け、次のような作業方針を決めた。

- (1) KOSMOS延命のため書誌インデックスの再構成を行う
 - 書誌検索インデックスの再構成を通常業務運用中でも行えるように新規にプログラムを開発し、作業スケジュールを確立する(業務停止は3日を目標とする)。
 - インデックス容量を少なくすると同時にタイトル前方一致検索用インデックスを追加し、OPACのレスポンスの改善およびシステム負荷の削減を目標とする。それ以外のデータベースの再構築は抜本的な対策を行わない。
- (2) 洋書改修データをKOSMOSデータベースへ戻す手法の確立とプログラムの開発
 - 改修データをKOSMOSへ戻すための手法を確立した上で、UTLASへのコンバート仕様を作成したが、それはKOSMOSのリンク関係が正しいという前提で作成されていた。しかし実際の作業ではこの前提を大きく逸脱するデータがあり、そのたびにKOSMOSの修正を行う必要があった。

(3) (1)(2)のスケジュール調整と関連業者との会合

- インデックス再構成と遡及データの置き換えは、同時に行ったほうが効率的である。作業を確實に行うためには、KOSMOS開発業者である富士通の協力は必須であった。富士通とは月例の連絡会議を設定し、トラブル対応とインデックスの再構築計画を共同で作成した。

3. 1998年<システムリプレース・集中処理機構とデータ移行>

1998年はKOSMOSのリプレースと集中処理機構の立ち上げを行う中で、業務への影響を最小限に抑えたデータ移行を実施しなければならない年であった。

3.1. システムリプレース

2000年までに汎用コンピュータを撤去するという課題は政策的なものであった。と同時に、それまでKOSMOSは維持できないというシステム的な限界でもあった。

その中で、1999年1月にシステムリプレースを終了させることを目標として、1998年4月、新システムの納入業者が丸善に決まった

業者選定について、個人的には次の2点に注目していた。

(1) 短期間にシステム稼動を実現できるか選定から10ヶ月間足らずでシステムを稼動させることは大変難しいことである。システム要件を整理し、デザインを行うだけでも短い期間なのに、200万の書誌データも移行しなければならない。

システムを短期間に完成するために一番大事なことは業務知識と類似システムの開発経験である。この時点で、富士通はKOSMOSの開発経験と、京都大学に納入したばかりの新しいパッケージとを持っていた。一方、丸善は国内最大の導入実績と立命館での実績があった。

(2) OracleをDBMS(DataBass Management System)に選定すると高くなる

今回の業者選定は、国内の図書館システムを開発している主要な4社の中から選定することになっていた。その4社のうち3社まではDBMSにOracleを採用していた。確かにOracleは世界でもっとも利用されているDBMSであるが、図書館システムのよう

なものに最適なDBMSであるということには異論があった。また、Oracleは高価なため、それを採用することによりシステム費用が大幅に増えてしまう。そこまでしてOracleにこだわる気持ちはなかった。

以上のような状況で、丸善が選定されたことは、1999年1月の稼動を実現させるには最良の選択であったと思っている。しかし通常の業務システム開発行程を進めたのでは間違いなく短すぎる期間であり、受注した業者の経験を十分に生かし、工期を短縮できるような図書館側の対応が要請されていた。

3.2. 集中処理機構とKOSMOS

1998年初めまでは、集中処理機構の構想はシステムリプレースとは別々に論議されていた。6月くらいからKOSMOSリプレースと集中処理機構の立ち上げをリンクしながら効率的に立ち上げるために、スケジュール上まとめて論議されるようになった。

KOSMOSでは地区や担当ごとに利用方法やデータ作成基準が異なることがあり、1つのシステムで複数のデータ構造を管理するが多く、運用が複雑になることがあったためである。

KOSMOSIIは集中処理機構を業務モデルとして設計されているため、作成するデータのコントロールとシステム利用の均質化を維持できるように計画する必要があった。

3.3. データ移行

データ移行を計画する場合の制限事項は以下の2点であった。

(1) データ移行期間は3ヶ月

(2) データ移行期間でもカレント業務は止めない

これらをシステムリプレース・集中処理機構立ち上げのスケジュールの中にどのように収めていくかが最大のポイントになった。加えて4月から始めた和書の書誌階層の疊み込み作業を抱えており、それとの調整も必要であった。

3.4. パソコンの入れ替えと図書館ネットワークの敷設

KOSMOS用のパソコンは富士通のFMRという古い機種であったため、今回のシステムリプレースで新しい機種にする必要があった。

図書館内のパソコンは、三田だけでも300台、全地区合わせると600台近い数になる。また、図書館内のネットワークも各地区ばらばらであった。ネットワークについては、システム担当のスタンスが

はっきりしなかったり、図書館の主体性について誤解があったため、12月末に設定作業を依頼するなど、各方面に迷惑をかけてしまった。

3.5. 作業方針の作成

1998年は以下のそれぞれの作業を効率的に実施することが要求されていた

- (1) 和書を含めたデータ改修作業
- (2) システムリプレース
- (3) 集中処理機構の立ちあげ
- (4) データ移行
- (5) パソコン・ネットワークの入れ替え

これらを踏まえ、1998年5月時点で以下の作業手順と概略スケジュールを確定した。

- (1) システムの基本構造の決定
- (2) 集中処理機構展開スケジュールの決定

6月 正式な展開スケジュールを決定

10月 全地区の図書整理業務を統合

10月以降 雑誌業務の統合

- (3) システム稼動スケジュールの決定

10月 目録システム稼動開始

1999年1月 全システムの稼動

- (4) データ移行スケジュールの決定

10月 図書データ移行開始

12月 雑誌データ移行開始

12月末 移行終了

- (5) 移行期間の業務運用方法の決定

10月に目録システムを稼動、図書集中処理機構も立ち上げ、10月からのカレント分はKOSMOSへ登録することとした。10月から12月の間の貸出は依然KOSMOSを利用するため、KOSMOSIIに登録する新規所蔵データはKOSMOSにも登録することとした。

- (6) パソコンリプレーススケジュールの決定

パソコン導入は集中処理機構立ち上げ前の9月、全システム稼動前の12月、一人1台の環境整備のための2月と計3回に分けて調達することとした。このスケジュールはサービス開始の1999年1月という稼動ターゲットから引いたものであった。これは通常の開発工程から考えるとかなり無謀なものであったことには間違いなかった。

3.6. KOSMOSIIのコンセプト

KOSMOSIIのコンセプトは、『塾監局紀要』に解

説した。ここでは、それを少し補足する。

KOSMOSIIの目的は、KOSMOSの機能を整理して、安定した業務基盤を作ることにあった。KOSMOSIIのコンセプトも集中処理機構の業務モデルも、三田地区の滞貨一掃プロジェクトの中で練られ、実践によって検証してきた。KOSMOSIIのコンセプトはこの成果を発展させたものである。

3.6.1. 3つのS

システム担当では、KOSMOSIIのコンセプトを次のように決定した。

- simple(単純)
- speed(レスポンスが早い)
- standard(標準に準拠する)

「3つのS」の意味を簡単に説明する。

(1) simple

これには2つの目的があった。ひとつは単純にしないと8ヶ月でのシステム開発は不可能であり、もうひとつはシステムの機能を単純化し、性能・保守性を確保することである。そのため、KOSMOSIIは以下の複数のシステムで構成されている。

ちょいす君 (KOSKOS II 図書受入システム)

CALIS (KOSKOS II 目録・貸出システム)

OPAC (KOSKOS II OPACシステム)

KOHEI (KOSKOS II 雑誌受入システム)

マリエール (KOSKOS II 請求記号管理システム)

るい (KOSKOS II 予算管理システム)

(機能構成図参照)

分散した複数のシステムで構成することにより、それぞれのシステムを単機能かつ単純化する。

(2) speed

KOSMOS IIでは新しいことを追求せず、KOSMOSの機能を整理、簡素化することでレスポンスを早くすることを最大目標とする。

(3) standard

作成するデータは徹底的に標準形式とし、高い互換性を持つものとする。

3.6.2. 書誌データベースの構造

書誌データベースの構造は、KOSMOSと比較した場合、以下の2つの特徴を持つ。

- (1) 和書・洋書ともUSMARCフォーマットを基本とする
- (2) 著者名典拠を持たない

3.6.2.1. 書誌基本フォーマット

KOSMOS IIでは、以下の理由で書誌基本フォーマットをUSMARCフォーマットとした。

- (1) 書誌データの標準フォーマットとしてUSMARCフォーマットを選定する
- (2) 学術情報センターのフォーマットではUSMARCフォーマットに変換することが難しい
- (3) JPフォーマットとUSMARCフォーマットの2つを維持するのは、システム的にも作業的にも無駄が多い
- (4) 拡張するUSMARCフォーマットからJPフォーマットへの変換は可能である

その上でUSMARCフォーマットの日本語拡張については以下のように考えた。

- (1) 日本語文字コードを標準に考えること
- (2) すでに標準化されている日本語をタグ880へ追い込む形式へ変換可能のこと
- (3) わかり易い形式であること

また、KOSMOSの複雑なリンク関係が一括処理を困難にさせた反省により、1レコードで情報が完結し、他のレコードと密なリンク関係を持たないこととした。その結果、タグを4バイトに拡張し、W(分かち) R(ローマ字) K(カナ)タグを追加した(表1)。

3.6.2.2. 著者名典拠を持たない

これは著者名典拠が必要かどうかを論議したわけではなく、限られた労力の中で均質な著者名典拠を作れるかという問題に対し、結論を出したものである。この結論には以下ののような前提条件がある

- (1) 研究機能を有する機関が収集する年間8万冊を超える図書に対して著者名典拠を作成できるのか
- (2) それは1大学にとって目標とするものか
- (3) KOSMOSでそれができていたのか
- (4) 書誌データをどのようにして作成するのか
- (5) 著者名典拠データは、データ作成のために必要なのか、検索の補助手段として維持するのかということである。

次のような視点も検討した。

例えば、新聞社のデータベースは記事データベースと人名データベースは別々に作成し、維持される。それぞれは、データベースとして独立し、記述されている氏名を統一することによって関係を維持

表1 書誌フォーマット

001	..	001	TT00043424				
005	..	001	19990820134632.00				
008	..	001	990715s1999	ja	00	jpn	d
020	..	001	\$a4894341387\$c¥8800				
040	..	001	\$aTRC\$bjpn				
041	0.	001	\$ajpn				
044	..	001	\$aja				
084	..	001	\$2NDC9\$a135.56				
099	..	001	\$aCA1				
100	1.	001	\$aAlthusser, Louis	\$d1918-1990			
245	10	001	\$a 哲学・政治著作集 /\$c ルイ・アルチュセール[著]				
			; 市田良彦 [ほか] 訳				
W245	10	001	\$a 哲学・政治 著作集 /\$c ルイ・アルチュセール [著]				
			; 市田 良彦 [ほか] 訳				
K245	10	001	\$a テツガク・セイジ チョサクシウ /\$c ルイ・アル				
			チュセール [チョ] ; イチダ ヨシヒコ [ホカ] ヤク				
R245	10	001	\$aTetsugaku · seiji chosakushu /\$cRui · Aruchuser				
			u [cho] ; Ichida Yoshihiko [hoka] yaku				
260	..	001	\$a 東京 :\$b 藤原書店 , \$c1999.6-1999.7				
W260	..	001	\$a 東京 :\$b 藤原 書店 , \$c1999.6 1999.7				
K260	..	001	\$a トウキョウ :\$b フジワラ ショテン , \$c1999.6 199				
			9.7				
R260	..	001	\$aTokyo :\$bFujiwara shoten , \$c1999.6-1999.7				
300	..	001	\$a2 冊 ;\$c22 cm.				
W300	..	001	\$a2 冊 ;\$c22 cm.				
K300	..	001	\$a2 サツ ;\$c22 cm.				
R300	..	001	\$a2satsu ;\$c22 cm.				
534	..	001	\$n 原著 c1994(I), c1995(II)の翻訳				
700	1.	001	\$a 市田, 良彦\$d(1957-)				
W700	1.	001	\$a 市田, 良彦\$d(1957-)				
K700	1.	001	\$a Ichida, Yoshihiko,\$d(1957-)				
R700	1.	001	\$aIchida, Yoshihiko,\$d1957-				
765	0.	001	\$t ¥2 ¥Ecrits philosophiques et politiques				
949	..	001	\$aHT1692755.001				
990	..	001	\$sM100065143\$v1				
990	..	002	\$sM100072277\$v2				

している。図書システムでもこの関係が維持できれば人名データベースは外部のデータベースに期待してもいいのではないか。また、登録する書誌データは外部から著者コントロールしているものを調達しているため(和書はTRC洋書はRLIN)その可能性は高い。これからは人名データベースと書誌データベースの疎結合による検索サービスの仕組みを検討していく必要があると思っている。

3.6.3. システム運用体制

KOSMOSIIではシステム運用人員の削減と業務支援の確保を計画した

KOSMOS運用時に3人いたオペレータを1人にし、その役割も変えた。KOSMOS時には計算機端末の監視・オペレーションが主業務であったが、システムが落ち着くことにより、配置場所コードの変更など、業務的な作業も分担できるようにした。

4. 1999年の課題

1999年の課題は、KOSMOS IIと集中処理機構の整備を進めながら今後の展開の準備を進めることである。KOSMOS IIは、10年前から始めた、全盤的に図書を均質で効率的に管理するための安定したシステム基盤作りの過程に過ぎない。図書館システムとしてはこれからが本格的な展開である。

4.1. 安定運用と付加価値の創生

KOSMOS IIと集中処理機構は、基本部分が稼動した状態である。1999年はその安定運用の確立と付加価値の創生が課題となってくる。

集中処理機構によって各地区で作り上げてきた目録作成の基準が整備され、共通のマニュアルが作成された。これで個人的な技量や人事異動などによつても均一な品質を保てる条件が整った。

条件が整ったことで目録データへどのような付加価値をつけていくのか論議する基盤ができたと思う。図書館間での目録作成の分担や、業者へのアウトソーシングも含めて、今後の方針を検討する必要がある。

4.2. 図書レベルから論文レベル、均質から特性へ

全盤レベルで図書を均質に管理するための基盤システムはこれで一応落ち着いたこととして、論文単位や電子媒体単位、さらには地区の特性も考慮に入れたサービス・管理へとシステムを発展させる必要がある。そのためには、論文レベルやデジタルデータのサービス・管理の概念を明確にしていく必要がある。

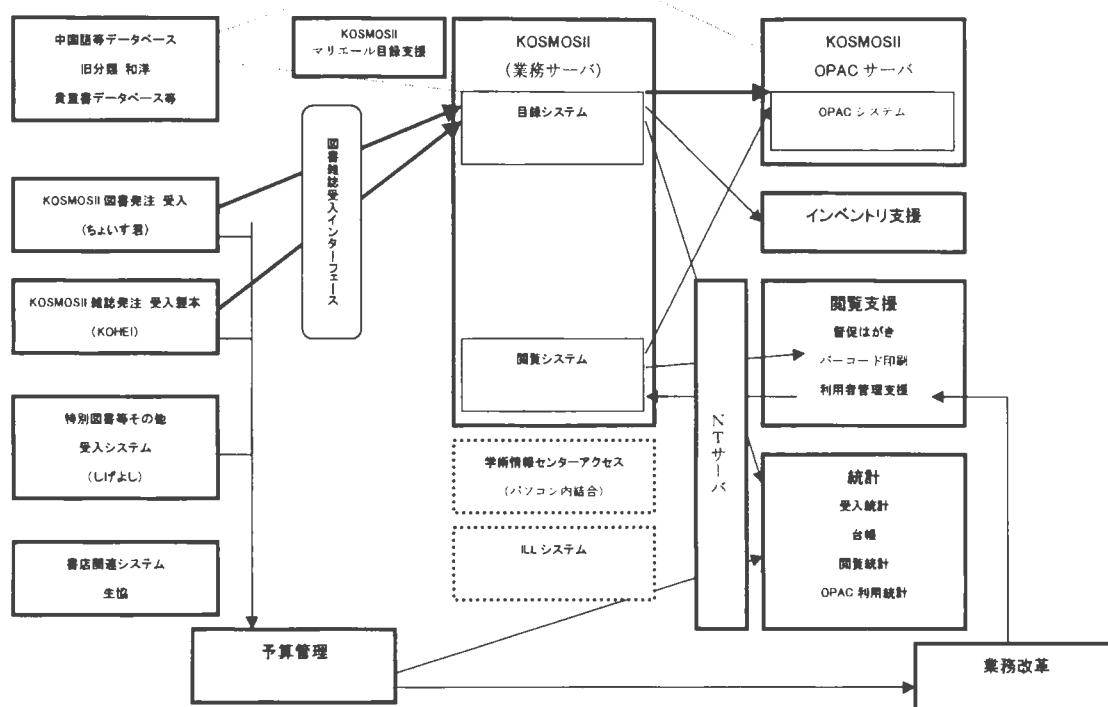
4.3. 相互協力と分担収集への基盤

今後、それぞれの図書館の特性や役割を明確にしながら、図書館間でも国内外の相互協力や分担収集を進めることが必要になってくる。そのために相互に共通なシステム基盤を用意することは重要になる。

その一環として、ILL(Inter Library loan)やDDS(Document Delivery System)のシステム、Z39.50のような相互協力のための標準インターフェースを搭載したシステムを用意することが必要である。

注

- 1)入江伸。“新図書館システムのコンセプト”。塾監局紀要。No.26, 1999, p.20-22.



KOSMOS II 概念図

図書発注・受入システムについて

さわだ じゅんこ
沢田 純子

(メディアセンター本部)

1998年10月、テクニカルサービスの業務統合にともない、全塾のメディアセンターの図書業務は発注から受入支払までを集中処理機構で行うこととなった。

集中処理機構で使用している丸善の受発注システム「ちょいす君」を中心に業務の流れに添って紹介する。

1. 発注

発注にはリスト発注、継続発注、見計らい発注の3種類がある(図1)。リスト発注は、各地区の選書担当者から集中処理機構に送られてくる発注のリストをもとにちょいす君にデータ入力し、書店に発注を出すものである。継続発注は、シリーズものなどを継続して購入する際の発注形態で、雑誌担当でも利用している継続図書管理システムKOHEIを使って発注を出す。見計らい発注は、各地区で選定された見計らい図書が送られてくるので、書店に発注票を出す必要はないが、その後の処理のためにリスト発注と同じように見計らいの発注データを入力する。継続図書も、納品されKOHEIにチェックインした後、見計らいと同様の扱いとなり、ちょいす君で発注データが入力される。

ちょいす君の発注画面でISBNを入力すると、商品マスターにデータが存在した場合には、その商品情報が画面に表示される(図2)。それに、管理区分、予算、書誌調達の要不要、発注業者など発注に必要な項目を入力する(図3)と、12桁の発注番号が付与される(図4)。

このとき入力したデータと、過去の発注履歴に同一ISBN、類似タイトル、同一フルタイトルのものがあるかどうか、自動的に重複チェックが行われる。この重複チェック機能によって、重複発注を防ぐことができるが、2つ以上の異なるISBNを持つ場

合や、ISBNを持たないものでタイトルの入力方法に少しでも差がある場合はもれてしまうため、現状ではまだ完全な重複チェックとは言えない。

2. 紀伊國屋書店へのオンライン発注

できるだけ速やかに書店に発注が届くようにと、今までオンラインで発注できるのは丸善一社のみだったところを、「98年10月より紀伊國屋書店を加えることとなった。その日の20時までにちょいす君に入力した紀伊國屋書店への発注データが、夜間にちょいす君から書店へデータ転送される。転送の事故を発見できるように、毎日、両社から転送レポートのメールが送信されてくる。今のところ、ほとんど事故はないが、転送データにはISBN、もしくは集中処理機構で入力したタイトルしか含まれないため、紀伊國屋書店の受発注マスターにそのデータがない場合には、後日FAXで問い合わせが届く。このような問い合わせが一ヶ月で10点ほどある。

3. BOOK-IDの貼付

図書が納品されると収書メモを挟み、BOOK-IDのバーコードラベルを貼る。収書メモには、B5サイズの半分の色紙を使用している。色から一目で地区や予算が分かるほか、処理上必要な指示が書き込まれる。見計らい納品の図書では、地区からの指示や希望を書き込み、集中処理機構に伝えるためのメモにもなっている。

重複納品や事故本返本の可能性を考えると、バーコードラベルを貼る行程はもっと後の方がよいのかかもしれないが、効率を優先し、納品後すぐに貼付作業を行う。

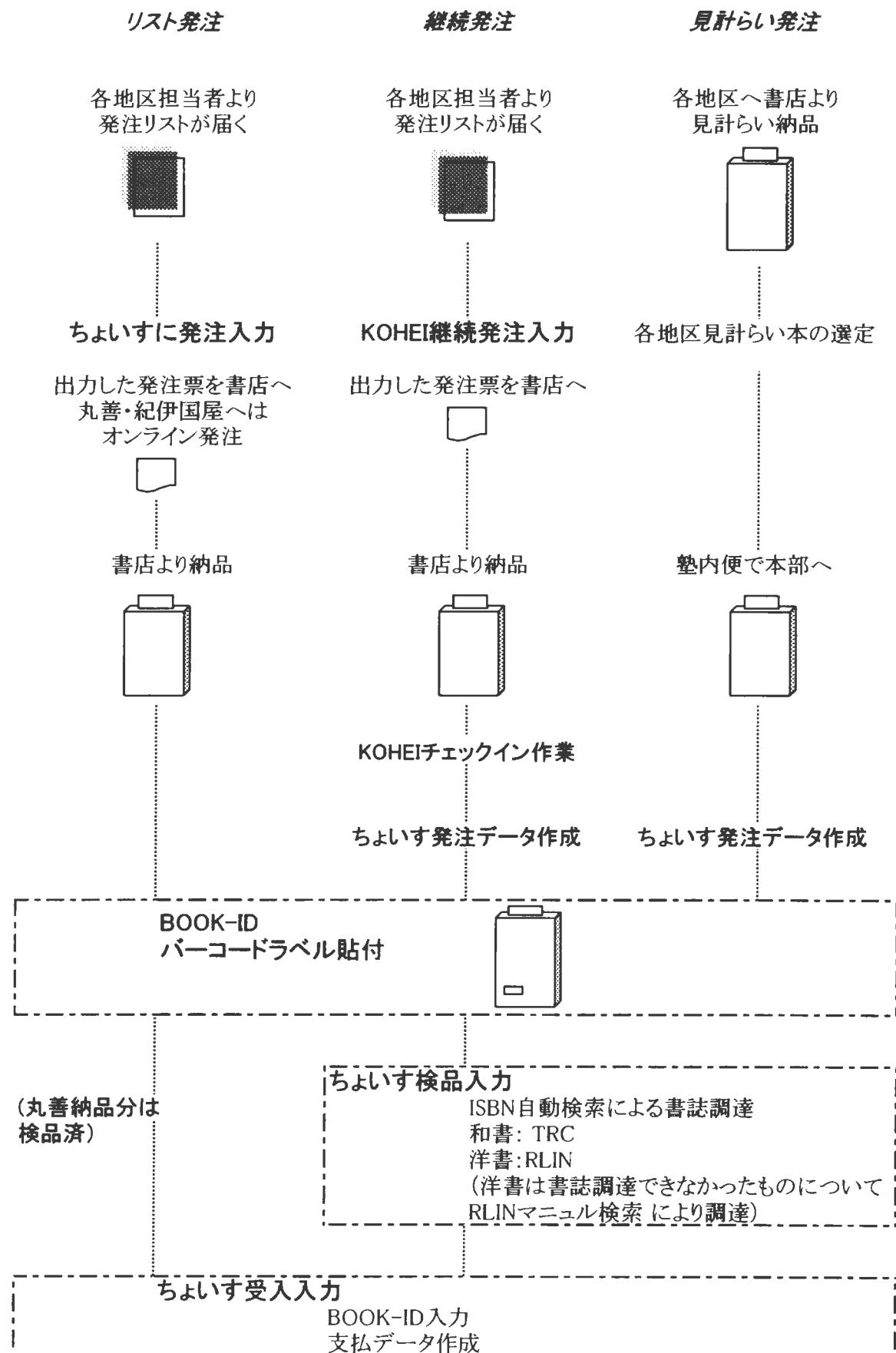


図1 収書処理の流れ

<特集>新システムへの移行:3つのコンセプトを掲げて

4. 検品処理と書誌調達

発注票にある発注番号(見計らい扱いで発注したものは収書メモに記入された発注番号)で検品データ入力画面(図5)を呼び出し、納品されたものが同じ物であることを確認する。その際、発注時にISBNが不明だったものや、間違っていた場合には、現物に付されているISBNを入力する。このISBNによって、検品作業した日の夜間に和書はTRC-MARC、洋書はRLINのデータベースをシス

ムが自動検索し、ヒットした場合は、洋書は翌日、和書は翌々日に書誌がKOSMOS IIに取り込まれる。

検品処理で入力されたISBNは、入力後ちょいす君発注時の重複チェック対象となる。

自動検索時に、ちょいす君上で過去に書誌調達履歴があるものについては調達しないようになっているが、ハードカバーとペーパーバックなどISBNが異なる場合には同じ書誌を2度調達してしまう(これ

< 三田 > 和書・単行本／発注データ登録 [1999. 7.31]

MBN	: MJ99029841
ISBN	: 4-333-01878-1
タイトル	: 生きる意味への問い
副書名	: V. E. フランクルをめぐって
巻次／年次	:
著編者名	: 山田邦男
出版社名	: 佼成出版社
刊行年月 等	: 1999.04 / 20cm
参考価格(¥)	: 2,300
ご注文冊数	[1]
取り寄せ条件	[] 未指定:通常 1:取次在庫に限る
送り先CD	[010] 三田メディアセンター
管理区分	[] 予算CD []
継続一括配架	[]
重複購入	[] 寄贈者 []
発注業者CD	[] []
特別扱いCD	[] []
備考	[]
予算年度 [1999] 受入区分 []	
] 発注か? [] 1:出力 2:出力せず 見計発注 [] 1:見計扱い 2:継続	

登録実行:End 機能選択:Home
半角項目 上書

図2

< 三田 > 和書・単行本／発注データ登録 [1999. 7.31]

MBN	: MJ99029841
ISBN	: 4-333-01878-1
タイトル	: 生きる意味への問い
副書名	: V. E. フランクルをめぐって
巻次／年次	:
著編者名	: 山田邦男
出版社名	: 佼成出版社
刊行年月 等	: 1999.04 / 20cm
参考価格(¥)	: 2,300
ご注文冊数	[1]
取り寄せ条件	[] 未指定:通常 1:取次在庫に限る
送り先CD	[010] 三田メディアセンター
管理区分	[A1] 予算CD [10100] 図書館・単行書
継続一括配架	[]
重複購入	[] 寄贈者 []
発注業者CD	[ZZ] [寄贈]
特別扱いCD	[] []
備考	[]
予算年度 [1999] 受入区分 [3] 寄贈	
] 発注か? [2] 1:出力 2:出力せず 見計発注 [] 1:見計扱い 2:継続	

表示確認:1 入力画面:1 登録実行:R
過去に同一ISBN商品のご注文が存在します。表示して確認しますか?
半角項目 上書

図3

< 三田 > 和書・単行本／発注データ登録 [1999. 7.31]

MBN	:
ISBN	:
タイトル	[]
副書名	[]
巻次／年次	[]
著編者名	[]
出版社名	[]
刊行年月 等	[]
参考価格(¥)	[]
ご注文冊数	[]
取り寄せ条件	[] 未指定:通常 1:取次在庫に限る
送り先CD	[]
管理区分	[] 予算CD []
継続一括配架	[]
重複購入	[] 寄贈者 []
発注業者CD	[] []
特別扱いCD	[] []
備考	[]
予算年度 [] 受入区分 []	
] 発注か? [] 1:出力 2:出力せず 見計発注 [] 1:見計扱い 2:継続	

登録実行:End 機能選択:Home
ご指定の内容で発注を承りました。発注受付No.: 9145984-00003
半角項目 上書

図4

〈特集〉新システムへの移行:3つのコンセプトを掲げて

については改善を予定している)

洋書については、ISBN自動検索で書誌がヒットしなかったものをマニュアル検索してKOSMOS IIに書誌を取り込む作業を業務委託している。自動検索でヒットしなかった和書と、マニュアル検索でも書誌がヒットしなかった洋書の書誌オリジナル作成も業務委託することで、受入の翌日には書誌がKOSMOS IIに入る流れになっている。

検品が終了すると簡単な検品データと検品番号が付与された検品カードが出力され、現物に挟まれる。丸善オンライン登注分については、検品処理まで済んだ状態で納品されるため、BOOK-ID貼付後、受入処理へとまわる。

5. 受入処理

検品カードにある検品番号で受け入れデータ入力画面(図6)を呼び出し、受入データを入力する。入力項目はBOOK-ID、納品書番号、受入金額などである。ここで入力されたデータをもとに、後日、支払明細書が出力される。

6. 処理冊数

図書が集中処理機構に届いてから受入処理までは4日を想定している。現在は1日1行程平均350冊を流すことによって、年間受入冊数およそ78,000冊の処理を目指している。

発注受付No. 9142688-00104 発注日付 99.07.14
注文業者名 ○○書房 備考:
ISBN/ISSN [4-326-30127-9]
著者 高齋昇三
書名 [阪神大震災と生活復興]
[]

Publisher 効率書房
注文部数/小計数 [] 検品範囲はありません
上記の商品につき分割入力をする場合は、右の項目に'DIV'を入力して下さい。 []

金額は、入力した冊数に対する合計金額を入れて下さい。
冊数 金額 番号備考
[] [2457] []

直移動:PgUp/PgDown 登録実行:End 機能選択:Home
半角項目 上 []

図5

< 三田 > 和書・受付入れ入力 1999. 7.31
検品No. T1720538-1 検品日 99.07.30 発注受付No. 9138874-00017 発注日 99.06.25
ISBN/ISSN 4-00-026252-1
書名 等 儀礼の象徴性

番号備考
検品時金額 2,646

他のルートで、登録済みのみの為、受け入れ可能です。
書誌調査?分? [] <1999/07/30>
BOOK-ID [10100864866] BOOK-ID (End) []
受入区分 [] 入・入:受入 :受入不可
受入時予算CD [10100] 図書館・単行書
受入時業者CD [05] ○○書房
納品書番号 [1486] []
受入時金額 [2646] 受入日付 [19990731]

登録実行:End 機能選択:Home
半角項目 上 []

図6

KOSMOS II の図書目録システム

はら
原 なおみ
直実

(メディアセンター本部係主任)

1. はじめに

1999年1月に新図書館システム(以下、「KOSMOS II」)が全面稼動したが、図書目録システムはその約3ヶ月前の1998年10月に先行して稼動した。開発開始から稼動まで半年強しかなかったため、機能的に不足している部分もあったが、全塾のテクニカル業務統合に合わせ、10月に先行稼動することになった。

2. 新図書目録システムの基本方針

KOSMOS IIの方針として「単純化」「標準化」「実用性」の3つがあるが、新しい図書目録システムは「データ形式の標準化」および「データの独立性」の2点を基本方針とした。

基本方針の1つである「データ形式の標準化」のために、書誌フォーマットは和洋ともUSMARCフォーマットを採用することになった。

洋書については、RLINなど書誌ユーティリティがUSMARCフォーマットを使用しており、同フォーマットが標準的な書誌フォーマットであると考えられるため、採用は問題なく決まった。

和書については、国内の多くの大学図書館で使用されている、学術情報センターの書誌フォーマット(「KOSMOS」でもこのフォーマットを採用していた)とする方法、JPMARCフォーマットを採用する方法も考えられた。しかし和洋で書誌フォーマットが異なると業務が行いづらいとの判断で、こちらもUSMARCフォーマットを採用することになった。

和書にUSMARCフォーマットを採用した場合、問題となるのはヨミと文字の扱いである。USMARCフォーマットにはJPMARCフォーマットと異なり、カナ読みやローマ字読み専用のタグは存在しない。それを解決するため、通常のタグにはローマ字形を入力し、日本語形はTag880に入力する方法がよくとられているが、開発を担当する丸善側の提案により、

通常のタグにはそのまま日本語で入力し、分かち書き・カナ読み・ローマ字読みは日本語拡張タグとして、通常のタグの頭にそれぞれW・K・Rという文字をつけたタグを用意することとなった。例えば、"245"というタグはタイトルと責任表示に関するタグであるが、ここには資料の通りに日本語を入力し、日本語拡張タグを付与する。すると"W245", "K245", "R245"という3つの拡張タグが作成される。日本国外に書誌データを提供する際は、日本語拡張タグがある場合はRタグを、ない場合は通常のタグのみを提供するようすればよいと考えられる。

もう一方の基本方針である「データの独立性」の維持のため、KOSMOS IIの目録システムでは書誌・所蔵間のリンクしかもたない構造となっている。データの独立性を高くすることにより、システムの動きを速くし、かつ業務の効率を上げることを目的としている。

KOSMOSにおいては、最大2階層の書誌階層を持っていたが、KOSMOS IIでは書誌階層のないフラットな構造となっている。また、著者典拠ファイルの維持も行っていない。

KOSMOSでは著者典拠ファイルを維持していたが、20名あまりの整理担当スタッフで、著者典拠ファイルの維持を続けていくのは業務上負担が大きい。データ系ワーキンググループで調べたところ、例えば東京都立図書館は著者典拠ファイル維持のためのスタッフが20名いるということだったが、とてもそのような人数のスタッフを揃えることはできない。KOSMOS IIでは外部書誌ユーティリティから書誌を調達するが、それらの書誌は何らかの典拠コントロールが行われていると考えられるため、慶應独自の著者典拠ファイルを作成・維持することは中止することとした。

3. 稼動から現在までの機能追加・変更

基本的には丸善のパッケージシステムである「CALIS」の持つ機能に準拠している図書目録システムではあるが、稼動後にいくつかの問題および不足と思われる機能が判明したため、機能追加・変更が行われた。

まず、和書では必要なタグに日本語拡張タグを付与するが、日本語分かち作成・カナ読み付与の機能が当初からCALISに付属していたものままで業務に十分な機能を持っておらず、自動付与後に多くの手直しを必要としたため、KOSMOSで使用していたものに変更した。

次に書誌検索を行った場合の一覧表示の変更を行っている。当初はヒットした書誌1件につき1行での一覧表示であったが、1件1行の表示では適合書誌の判断や重複書誌の発見に十分な情報が得られない。そのため1件の書誌を一覧表示するのに最大で5行とし、表示内容・順番についても変更した。1画面で表示できる数が少なくなるため、ヒット件数が多い場合には画面を何度も送る必要があるが、1件1件を詳細表示して確認することは少なくなった。

また、所蔵一覧表示からの画面遷移を変更している。当初は所蔵一覧表示から詳細表示をした後は所蔵検索画面に戻ってしまい、複数の所蔵レコードの内容の確認・変更が必要な場合には再度検索から始めなければならなかった。これを、ある書誌に複数の所蔵がリンクされている場合には所蔵詳細表示後に再度、所蔵一覧表示画面に戻るように変更した。

その他に、重複書誌を発見した場合に簡単に統合作業が行えるよう、ある書誌にリンクされている所蔵を一括して他の書誌に移し替える機能がこの7月に追加された。それまでは所蔵を別の書誌に移し替える場合、まずその所蔵を検索する必要があった。ある書誌に100件の所蔵がリンクされていて、そのすべてを移し替える場合、100回同じ作業を繰り返さなければならなかった。一括所蔵リンク変更の機能が追加されたため、重複書誌の統合作業が簡易に行えるようになったと思われる。KOSMOS時代から重複書誌の多さが問題になっているが、KOSMOS II図書目録システム稼動とKOSMOSからのデータ移行に3ヶ月のずれがあったため、この3ヶ月にやむを得ず重複書誌をいくつか作成してしまった。データ移行時に生じた問題についてはデータ

整備計画を立て現在実行中であるが、一括所蔵リンク変更の機能がおおいに役立つことと思う。

機能追加・変更ではないが、和書書誌調達の際のTRCMARCをUSMARCフォーマットへ変換するための仕様についても数回の改訂を行った。改訂の結果、当初より手直しをする箇所が減り、業務が円滑に進むようになった。

4. 今後の課題

稼動以降、何度かの機能変更を行ってきたが、今後の課題としてはまず雑誌目録システムとの統合があげられる。

現在は機能選択メニューの段階で雑誌・図書目録システムを選択するようになっている。通常の業務では別メニューでも問題はないが、同一資料でも地区によって登録が雑誌・図書と異なるものやマイクロ資料のような特殊な資料など、雑誌・図書目録システムの両方を確認する必要がある場合、2つの目録システムが一緒になっていた方が扱いやすい。また、今後の機能追加・変更を考えると統合されていた方が都合がよい。

雑誌・図書目録システムの統合はすでに打ち合わせに入っており、できるだけ早期に実現したいと考えている。

今後の課題の2点目として、日本語拡張タグの扱いの問題がある。

現在のところ日本語拡張タグを付与する場合、分かち書き・カナ読み・ローマ字読みすべてを1セットとして付与しなければならない。これを各拡張タグの単独での付与・削除が可能となようにしたいと考えている。不要な拡張タグを付与してしまうことを避けるためである。

日本語拡張タグの扱いの変更は、稼動当時から希望していることはあるが、同一タグが複数ある場合のタグ・拡張タグをどう対応させるかという問題を解決しなければならず、検討を続けている。機能変更にはまだしばらく時間がかかると思われる。

KOSMOS IIの図書目録システムが稼動してから10ヶ月、今後もいくつかの機能追加・変更を行う必要があるが、基本方針を大きく変えることのないよう、システム・業務双方の見直しを続けなければならないと考えている。

雑誌システム「KOHEI」の現在

たけうち 竹内 みき
美樹

(メディアセンター本部)

1. はじめに

「KOHEI」とは、1996年に三田メディアセンターにて稼動を開始した、自館開発の雑誌システムである。当時は三田地区をはじめ、各キャンパスのメディアセンターにおいて、既存図書館システムである「KOSMOS」のレスポンス速度と現実の業務量との折り合いがつかず、新路線の模索が不可避の事態となっていた。

2. 雜誌システムKOHEIとは

こういった状況下に登場したKOHEIに求められたコンセプトは以下の様なものであった。

- ①納品された雑誌を、できるだけ早く利用に供するために、受入、支払に主眼を置く。
- ②書誌/所蔵データ自体の主な管理は「KOSMOS II」に任せ、KOHEIはあくまでそこにデータを迅速に提供する役割を果たす。

KOSMOS IIのシステム的な負担を軽くするために、オンラインの受入は、製本作業も含めて全てKOHEIで行う。その1冊1冊のデータはKOHEIからKOSMOS IIに転送されるので、利用者は受入情報をOPACで確認することができる。

- ③軽くシンプルなシステムを採用し、業務の運用 자체を柔軟にすることで、全体の合理化を図る。

予算/支払集計関係機能や、KOSMOS IIへの受入/修正データ転送機能等はKOHEIからさらに切り離し、補助メニューである「データ管理画面」に搭載する。

3. 業務内容

次に、具体的にKOHEIではどの様な業務を行っているのか、メニューと概要を紹介する。

3.1. 書誌・発注画面

ここでは主に新規タイトル受入のための初期設定を行う(例:契約書店や配架場所、受入/修正データ転送のキーとなるKOSMOS II所蔵IDの設定等)。

ただし、目録のメインはKOSMOS IIという原則を反映し、KOHEIの書誌画面は、毎回の受入作業時に割り込む様に設定された業務メモの他、必要最低限の項目のみを備えた非常に簡略なものである。

また、発注画面には当該資料の購入先書店や予算等、通常の契約に関わる項目の他、後述するFD納品作業のポイントとなる「書店受注番号」や「ソートキー」入力フィールドがあるが、これらの実際の働きについてはFD納品の項を参照されたい。

3.2. 受入画面(通常)

文字通りの受入画面である。具体的な作業としてはタイトルやISSNから当該書誌を検索し、未製本データを一件ずつ発生させていくという流れに沿ったもので、これら受入情報については修正や削除、メモ入力等も簡便に行なうことが可能である(図1)。

図1 「KOHEI」受入(通常)画面

また受入する現物が製本版の場合は、通常の受入追加ボタンの代わりに「ハードカバー」ボタンを押下することにより、製本データを同時発生させることとする(ただし、転送先のKOSMOS IIで存続するのは製本データ)。

そして製本版についても、基本的に未製本と同様に修正入力他が可能であるが、KOHEI内では未製本/製本が完全に別管理となっているため、修正/削

〈特集〉新システムへの移行:3つのコンセプトを掲げて

除等の処理には両データとも対応する必要がある。

3.3. 受入画面(FD納品)

次に、KOHEI最大の特徴であるFD納品機能を紹介する。

①各タイトルの発注画面に予め入力された「書店受注番号」(固定の契約IDに該当)と、業者から現物と共に送付されるFD搭載の納品データのそれをマッチングさせることにより、50~60冊以上の雑誌でも、短時間で一挙に処理することが可能である(図2)。

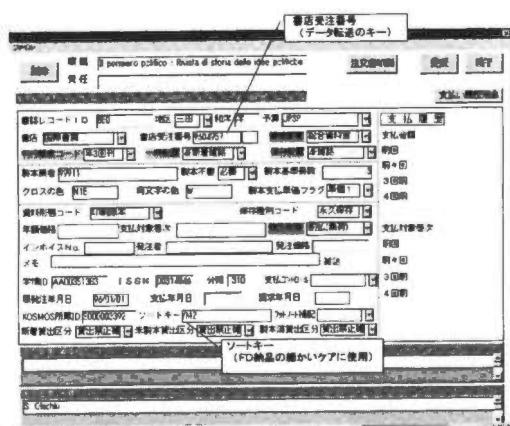


図2 「KOHEI」受注画面

②発注画面の「ソートキー」の活用により、一点ごとの受入と同様のケアをすることができる。

例：ソートキーに「/M2」と入力

→FD納品画面にはKOHEI書誌から読んだ業務メモを表示。

③FD納品一覧画面には、KOHEI内の当該書誌のタイトルや、既存最新号の擬似巻次が表示され、常にタイトルチェンジや、未着/重複のチェックを併せて行うことができる(図3)。

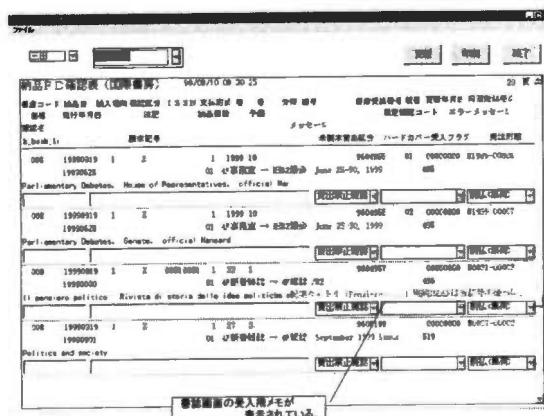


図3 「KOHEI」受入(FD納品)画面

④一つの契約の中に複数タイトルの雑誌が含まれる場合、親タイトルに該当するものも含め、書店受注番号に枝番を付与することにより、FD納品受入が可能となる。そしてこの形式は同時に、各タイトルの契約形式を受入担当者に常に意識させる点で有用と言えよう。

⑤FD納品の処理範囲には、都度払タイトルの納品データへの支払入力や、製本版の受入も含む。

3.4. 製本

まず、受入作業によって生じた未製本データを製本単位ごとにまとめて、「製本中」と状態を変更する。そして現物がバインドされて戻った時点で製本IDを付与して受入する、という通常の業者製本の流れに即したメニューである。実際、三田メディアセンターにおいては、KOHEI発注画面への製本業務情報の入力も含め、この機能のオペレーションは外注製本業者が行っている。

なお、これら製本データは自動生成の物理単位IDを基として、データ転送の際に、転送済の同範囲未製本データをKOSMOS II内で上書きする。

4. データ管理画面の業務

この画面はKOHEIシステムをシンプルな状態に保ち、かつ補助する目的で設定されている。ここではその特徴的機能を紹介する。

4.1. KOSMOS IIへのデータ転送機能

KOHEI内に新規に入った受入データと、メモも含め、変更/更新が加えられた既存データを対象として、KOSMOS IIへの転送が行われている。当初はこの転送業務は手作業によっていたため、データ固定の都合上、定時終了時の一定時間、業務中断を余儀なくされていた。しかし99年8月にデータ夜間転送機能が実現したことにより、業務への支障は解消された。そして現在、KOHEI内の転送対象データは毎日22時に固定され、翌朝4時にKOSMOS IIに反映される様に運用されている。

なお、受入データ単位削除については、削除情報が転送対象にはなっていないので、KOSMOS II上でオンライン処理が併せて必要である。

4.2. 予算・支払集計関係機能

月次支払集計については、通常雑誌支払/業者製本支払(集計日は別)を問わず、サポートプログラム

〈特集〉新システムへの移行:3つのコンセプトを掲げて

のパワービルダを併用しつつ、ほぼ全て、このデータ管理画面で行っている(図4)。すなわち全地区分の当月支払用データ抽出、書店ごとの支払明細書出力、支払最終確定以前の修正機能(例:金額入力ミスの修正や各件ごとの支払データ削除等も含む)、バックアップ作成他が代表的機能として挙げられる。

また、各地区選書担当を筆頭とする関係部署で雑

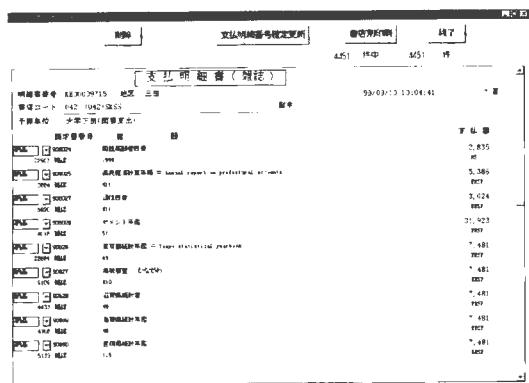


図4 「データ管理」支払明細

誌予算執行状況を把握するため、KOHEI内の予算消化状況表も月次恒例で提出している。

5. 統合とKOHEI導入による業務変化

本稿冒頭にも書いたが、当初、KOHEIは三田の雑誌システムとして誕生した。しかし、日吉地区を皮切りに、98~99年にかけ慶應各キャンパスのデータ統合・支払統合が開始され、現在では全地区で雑誌業務に使用されている。

そして、これに伴う業務上の変化としては、以下の様なものが考えられるだろう。

- 他地区の所蔵状況や資料購入(寄贈)先を、その場で参照可能なので、書店へのクレームや或いは目録作業、塾内ILL等の参考にことができる。
- リニューアル価格の支払入力の一括化をはじめ、各種雑誌業務の合理化が実現できる。
- パワービルダやInfomaker等の統計ソフトを補助ツールとして活用することにより、地区の要望に応じた各種統計類を、柔軟な形式で算出することが可能である。

6. おわりに

本稿では、KOHEIとそれを補助するデータ管理画面の持つ現時点での特徴の一部を紹介した。ただし、ここに「現時点」と明記した通り、KOHEIは全地区雑誌業務に関わっている現在、なお各種要望を反映しながら、改善されるべきシステムと言えよう。

三田図書館・情報学会月例研究会

第99回

日 時：1998年12月11日（金）午後6時～8時
テーマ：実践的知識マネジメント－図書館情報学の一つの展開可能性－
発表者：池谷のぞみ（東洋大学）

第100回

日 時：1999年3月13日(上) 午後2時～4時
テーマ：大学図書館における電子情報サービスとその評価の枠組み
発表者：池内淳（慶應義塾大学大学院）

第101回

日 時：1999年6月26日(土) 午後2時～4時
テーマ：変貌する図書館
—科学技術情報センターにリニューアルした二つの府県立図書館—
発表者：三谷久子（大阪府立特許情報センター）
若杉秀子（神奈川県立川崎図書館）

これらの研究会は、非会員にも公開している。また、年2回刊の機関誌 Library and Information Science は、個人会員（年額 ¥3,000）、機関会員（年額 ¥5,000）を支払った会員に送付される。

学会への入会、機関誌等に関する問い合わせは、慶應義塾大学内、三田図書館・情報学会事務局（Tel. 03-3453-4511 内 3147）で受け付けている。

新閲覧システムの開発： 閲覧ワーキンググループの活動を中心にして

わだ こういち
和田 幸一

(三田メディアセンター課長代理)

本稿では、1999年1月に稼動開始した新閲覧システムについて、その開発の中心となった閲覧ワーキンググループ(以下、WGと略す)の活動を中心に紹介する。筆者は、1998年4月から99年5月末までの13ヶ月、WGの主査を務めた。

1. 閲覧ワーキンググループの組織とその役割

旧閲覧システムは、発注・受入、目録、雑誌など、トータルシステムの一環として、慶應義塾の5キャンパス(三田、日吉、信濃町、矢上、湘南藤沢)7つの図書館(上記5キャンパスの5つのメディアセンターのほか、信濃町の看護短期大学図書室、湘南藤沢の中高図書室)で利用されていた。各図書館では貸出規則を独自に保ちながら、目録だけでなく、所蔵データや利用者データも共有していたので、キャンパスを越えた予約や貸出も可能だった。新閲覧システムもKOSMOSSの一部であり、7つの図書館を対象にしている。新システムでは中高図書室が抜け、新たに日吉の経営管理研究科図書館が加わった。

新閲覧システム開発のために、WGが組織されたのは、1998年4月のことである。この時点で新システムは旧システムの改良ではなく、既存の図書館パッケージをカスタマイズすることが決まっていた。

そして、1999年1月に貸出・返却等の窓口システムを稼動させた。その後、3月に督促、蔵書点検、利用者データの一括更新、4月に統計といった順で、機能を追加した。同時にシステムの改修を行ってきた。1月に稼動した新OPACについても、一部仕様の決定と、稼動後の改修はWGの業務となつた。開発・改修作業が落ち着くにつれ、WGでは閲覧システムの運用に比重を移している。WGの業務範囲は、これらに加え、閲覧システムの事務処理方

法の決定である。

開発・改修といっても、具体的にプログラム等を組むのではなく、仕様を作成し、運用方法について全図書館をまとめることである。WGが作成した仕様に基づき、業者やシステム事務局がプログラムやデータを作成し、そのチェックをWGが行う。旧システムから新システムへのデータ移行そのものについては、利用者、貸出、予約等の閲覧関係データも含め直接には関与していない。新システムの閲覧関係ファイルのデータ項目そのものは、WGが決定した。

WGは、三田から5名、その他のキャンパスから1名ずつの計9名で組織された(それまでの業務を兼任)。看護短大図書室は信濃町、経営管理研究科図書室は日吉のメンバーが兼務した。三田5名のうち、2名はシステム担当を兼ね、また、三田の1名を除いて、残りは閲覧業務経験者である。

このWGの特徴は比較的若いメンバーで構成されたことにある。システム担当2名と主査である筆者を除けば、実動部隊となる6名は全員が91年度以降の就職であり、98年4月時点での平均勤続年数は4年未満、所属キャンパスの図書館以外での勤務経験もない。また、9名中に旧システムの開発に関わった者はいない。

若手を中心にWGを組織したのは、彼らの育成を目的にしたと同時に、過去や現状に囚われず、自由な発想で新しいシステムを考えてほしかったからである。

2. 新システム開発の基本方針と目標

旧システムは業者との共同開発で、慶應の規則、運用に従ってシステムを構築したと言ってよい。これに対して新システムは、業者が開発した既存の図書館パッケージをカスタマイズするという形をと

り、必要によってはパッケージに業務を合わせることも行った。

新システム構築の基本方針は、下記のとおりであった。

- 1) 理想のシステムではなく、1999年1月から実際に稼働するシステムとして考える
- 2) できる限り業務の簡素化・合理化を図る
- 3) 現利用者サービスを維持する
- 4) 全てをシステムに頼らず、特殊な部分は手作業を残す

また、システムの要件として下記をあげた。

- 1) エラーが発生しにくい
- 2) 処理速度が速い
- 3) 操作が簡単
- 4) 貸出規則、事務処理方法の変更に対応できる

簡素化・合理化といつても、それが利用者サービスの低下につながるものであってはならない。また、システムの要件は、極めて一般的なものであろう。貸出規則、事務処理方法そのものは今後、簡素化の方向に向かうが、サービスを拡大し、貸出冊数・期間などを変更することは容易に予想される。

大まかに言えば、スピードアップ、シンプルという2つの目標を掲げたと言ってよい。旧システムでの「何でもできる」が、結果としてスピードを犠牲にした感は否めない。新システムでは、それを回避することを第一の目標とした。

3. 新システムへの移行

今回の新システムの稼動にあたっては、旧システムをほとんど止めることなく作業を行った。年末最終の通常開館日となる12月24日まで旧システムで貸出・返却等を行い、年始最初の開館日となる翌1月7日から全図書館一斉に新システムで本番稼動したのである。年末年始の開館期間が若干長い医学メディアセンターと年末特別開館を行う三田では、数日間をマニュアル貸出で対応した。

一方、目録システムの移行のため、1998年10月以降は、新目録システムで資料を整理することとなつた。結果、10月以降に整理した資料については旧OPACに搭載されず、新OPAC稼動の1月までの3ヶ月ほど、利用者は新旧2つのOPACを検索しなければならなくなつた。また、新OPACは旧閲覧シ

ステムと連動していないため、貸出中という資料状態が確認できなかつた。とはいへ、一時的にせよ、利用者が資料を検索できないという事態は避けることができた。

また、新目録システムで資料が整理されることは、旧閲覧システムにデータが反映されず、貸出ができないことを意味する。このため、貸出に必要な資料の所蔵データを旧システムに送ることとした。こうして、利用者が書架から図書を取り出し、カウンターで貸出を受ける分には、何ら変わらない状態を作ることができた。

100万の書誌、200万の所蔵を持つ7つの図書館の集合体が新システムへ移行するにあたって、ほとんどシステムを止めず、ほとんど利用者に移行作業を意識させなかつたことは驚異的であった。臨時の閉館をせずにこれだけの大規模な移行を行つた図書館を筆者は知らない。

4. 閲覧システムの構築の実際

WGの会合は、1998年4月8日を皮切りに翌年5月末までに計28回を数えた。最初の3ヶ月、4~6月は毎月5回、計15回の会合を持ち、主に現状分析と窓口システムの仕様作成を行つた。7~10月は窓口システムの詳細および窓口以外のシステムの仕様作成、11月~翌年1月は業者から納入されたシステムのチェックといったプロセスであった。2月以降は、システムの細かい修正および改良、窓口以外のシステムの詳細仕様作成を行い、現在もそれが続いている。

ここでは、現状分析とそれを基にした仕様作成を中心に、閲覧システムの構築について概説する。

4.1. 貸出規則マトリックスの作成

同じ慶應義塾の図書館でも、実際は全く別な図書館が集まつたものと言って過言ではない。キャンパスが物理的に離れていることはもちろん、主題的にも医学や理工系、人文社会系、1、2年生中心の教養課程と様々であり、同じ規則で運用することはできない。図書館によっては図書館資料と学部(研究室)資料があり、その運用が異なる。また、利用者の身分によつても貸出規則が異なる。それぞれの図書館が集まればさらに複雑になる訳である。

もっとも、これまで少しづつではあるが業務の

簡素化は進んでいた。例えば、延滞の罰則は、延滞金と貸出停止に分かれていたが、1987年、三田で開発した2世代前のシステムを導入する際に、日吉の罰則を貸出停止から延滞金へと変更し、統一が図られた。さらに旧システムでは、それまで各図書館それぞれのコンピュータに置かれていた利用者、所蔵、書誌データが共通になり、閲覧システムの統合が進んだ。そしてILLの進展や、人の異動が活発になるといった外的要因によっても、業務の簡素化がより意識されるようになった。

単にシステムを移行するなら、旧システムに搭載されている貸出規則をそのまま新システムに変換すればよい。しかし、今回は、閲覧業務の簡素化・合理化という観点からその貸出規則を再検討した。旧システムに搭載されている貸出規則でも、利用者の身分や貸出のための資料区分はコードとして整理されていた。しかし、身分コードは、統制のないまま7つの図書館で別々に使っていくうち、定義が曖昧になっていた。そこで、それぞれのコードに当てはめられた利用者と資料を把握しながら、その両者のマトリックスである貸出規則を確認することにした。

利用者を考えたとき、例えば、正規の学生や専任教職員はわかりやすい。法学部教授、文学部3年の学生といえば共通に理解できる。しかし、それぞれのキャンパスにしか在籍しない各種講座受講生や聴講生、人事課がその時点でデータ上関与しない教職員が存在し、その一部は教務部が作成する学籍情報ファイルや、人事課が管理する人事ファイルにも搭載されていない。さらにはそれぞれの図書館独自で認めた利用者が存在する。これらについて、コードに基づき1つ1つ実態を確認した。

資料についても同様に、貸出上のデータとして考えるのではなく、それが実際にどういう資料なのかをまとめた。慶應の図書館では、資料種別は全キャンパス共通のBOOK-IDと各キャンパス固有の請求記号で把握できるが、この請求記号の種別が全図書館合わせて約200種類あった。今まで漠然と、あるいは記号としてしか理解していなかったものを、特定の資料として意識できるようにした。

表1は、三田の旧一般貸出規則のマトリックスの一部で、中の記号は貸出期間を表す。例えば、身分

01の利用者は区分03の資料を2週間借りられるということである。「/」は未使用コード、「×」は貸出不可を表す。未使用コードがあるのは、新システム検討前に、かつて利用していた資料区分を統合し簡素

表1 旧一般貸出規則マトリックスの一部(三田)

資料区分 利用者身分	01	02	03	04	05	06	07	08	09	10	11
01	1M	/	2W	/	×	×	×	2W	/	×	×
02	1M	/	1M	/	1M	2W	×	2W	/	×	×
03	3M	/	3M	/	3M	2W	2W	2W	/	3M	×
04	1M	/	2W	/	×	×	×	2W	/	×	×
05	1M	/	1M	/	1M	2W	×	2W	/	×	×
06	3M	/	3M	/	3M	2W	2W	2W	/	3M	×
07	1M	/	2W	/	×	×	×	2W	/	×	×
08	1M	/	1M	/	1M	2W	×	2W	/	×	×
09	3M	/	3M	/	3M	2W	2W	2W	/	3M	×
10	1M	/	2W	/	×	×	×	2W	/	×	×
11	×	/	×	/	×	×	×	2W	/	×	×
12	1M	/	1M	/	1M	2W	×	2W	/	×	×
13											

化した結果である。三田以外の図書館もそれぞれ同様のマトリックスを持っている。ちなみに利用者身分は全図書館共通で167種類、資料区分は三田だけで7種類、最も多い日吉で12種類であった。

このマトリックスで、先に確認した身分内容と貸出期間とを照らし合わせ、この利用者にこの資料をこの期間貸し出しているということを確認した。また、同様の貸出規則となる身分を教職員・大学院・学部・その他の4つにグループ化し、同じグループ内で他の身分と貸出上の扱いが同じであることが妥当かどうかを検討した。さらに全図書館のマトリックスを合わせ、「図書館によって異なるグループに属する利用者身分については、それを統一すべきである」という貸出規則合理化の提案を閲覧担当者の集まりである全塾パブリックサービス部門事務連絡会(以下全塾PS部会)に行い、その一部が受け入れられた。

マトリックスは、この一般貸出以外にも延滞時の罰則、更新の可否および回数、休暇貸出の可否、合計貸出冊数が存在し、同様に検討した。

仕様となる最終的なマトリックスは、利用者データの身分種別決定後に作成した。

4.2. マニュアル貸出

次に行ったのは、マニュアル貸出の確認である。マニュアル貸出を行っている理由として以下の5つ

の点が挙げられた。

- 1) システムが停止している
 - 2) システムにデータがない
 - 3) システムに対応する機能がない
 - 4) 利用者に意識させる(システムでの貸出が可能な資料でも貴重なものは手書きで手続きする)
 - 5) システムによる貸出では容易に督促ができない
 - 6) 本来貸し出さないものを特別に貸し出す
- 2), 4), 6)は、閲覧システムそのものの問題ではないと考えた。1), 3), 5)については、新システムで対応することとした。1)は、ハンディターミナルによる非常時貸出、3), 5)はオーバーナイト貸出のシステムを作成することとした。オーバーナイト貸出は、2つの図書館で行われており、今後他の図書館でも実施される可能性がある。1返却期限日に加え返却期限時刻がある、21日あたりの延滞金の金額が異なるか、時間ごとに延滞金がつく、3利用度が高く、延滞したらすぐに督促を行う必要がある、という3つの点で通常の貸出と異なっており、そのための仕様を作成した。

4.3. データの意味と業務の必要性の検討

画面構成要素、それぞれのファイルそしてファイルの項目についても、1つ1つそれが何のために必要かを考え、定義づけた。利用者データを例にすると、それぞれのデータ項目の主たる存在目的は

学籍番号——学生証の学籍番号を読み込んで貸出を行う、利用者同定

氏名、氏名読み、所属、学年——利用者同定

身分——利用者同定、貸出の可否・期間・冊数の決定

メールアドレス——メールでの連絡

有効期限 --- 最終返却期限日決定

と考えられる。貸出だけを考えれば、専任職員も嘱託職員も教授も非常勤講師も貸出規則上の身分グループは同じであるが、個人個人の利用者同定が難しくなる。このため、同定に最低限必要となる身分を利用者データの身分種別とした。

利用者データの大半は、人事部が作成する教職員情報、教務部が作成する塾生情報を一括で変換したものだが、2つのファイルのコードに共通性がないこと、ここでの身分種別のコードが複雑すぎること、それ以外の利用者がいることなどから、身分種

別は図書館独自のものとした。もちろん、ここでも合理化・簡素化を心掛け、身分種別のコード数は、旧システムの167から55種類に削減した。

この他、資料の状態(整理中、製本中、貸出中など)と処理(貸出、返却、更新など)との関係の仕様についてもマトリックスを作成した。

帳票や窓口システム以外の蔵書点検、統計等についても、既存のものについて1つ1つステップをたどり、存在目的が明確でないものは新システムでは作成しないこととし、逆に必要なものは新たに作成することにした。

4.4. その他

画面構成、画面遷移の大半は、最初から業者の提案で、それを修正した。

窓口以外の閲覧システムでは、以下の方針がシステム担当から提案され、これを受けた

- 1) 新システムでは、データの抽出のみを行う。但し、抽出するデータフォーマットの調整は行う
- 2) 帳票類の印刷、各図書館で異なるフォーマットへのデータ加工は、パソコンで行う。
- 3) パソコン上のプログラムの全図書館共通部分の作成はシステム担当で行う。また、各図書館でのプログラム作成の補助をシステム担当で行う。

旧システムでは、蔵書点検のためのリストは、各図書館ごとにプログラムを作成して、システムの大型計算機から出力していた。これは、請求記号とその体系が各図書館ごとに異なっており、データを請求記号順に出力するにはそれぞれ別のプログラムが必要だったからである。また、80年代後半に大型計算機で作成したプログラムを利用していったからである。パソコンと利用できるソフトウェアの性能と使い勝手がよくなり、新システムでは、いくつかの条件をつけてデータを抽出するだけとし、その後の作業として、各図書館のパソコンで請求記号順にソートし印刷することとした。

統計では、新たにシステムから全図書館共通の統計を数種類出力することとした。全図書館共通である利用者と資料IDで区分できる簡単な資料区分(和図書、洋図書、和製本雑誌、洋製本雑誌、未製本雑誌、非図書資料、その他)について、出力するもの

である。もちろん、印刷はパソコンで行う。請求記号別等の統計については、各図書館対応とした。

5. 新システムおよびWG活動の評価

ここでは、1999年7月末の段階での新閲覧システムおよびWGの評価を行う。

何よりもまず、スピードが速くなったことが最大の評価ポイントである。少なくとも窓口に列ができるということはなくなった。また、返却図書が最終返却日に集中し、処理スピードが遅くなるため、キャンパスによって別々の日に設定されていた春夏冬の長期貸出返却日も統一することができた。利用者、係員の双方にとってわかりやすい規則となった。

シンプルという点では、窓口以外の業務にそれが顕著に見られる。今まで大型計算機でJCLを見ながら作業していたものが、大半は画面で数字等を入力すれば済むようになった。

画面遷移についても多少わかりにくいところはあるものの、そのスピードが速くなったのでストレスがなくなり、全体としては問題がない。

機能的には旧システムの機能を満たしたうえで、いくつかの新しい機能が追加され便利になった。予約図書到着・督促の利用者へのメール連絡、(システム的に)ある図書館の資料を他のどの図書館にでも返却できるようになったこと、特定の利用者グループのみを簡単に督促できるようになったこと、等々である。また、オンライン印刷をシステムのコンピュータからではなく、データだけを抽出してパソコンで行うことで、きめ細かい対応が可能になった。

画面遷移、操作方法、機能の追加等、可能な点は修正を行ってきているし、今後も行う予定であるが、この修正が依頼をしてから短期間で行われたこともシステムの満足度を高めた。

以上から、新閲覧システムの評価は高く、ひとまず成功といっていい。

成功の大きな要因は、業者とのコミュニケーションがうまくとれたことではないかと思う。WGのシステム担当が業者との間に立ち、自然語をシステム語に翻訳してくれたこともあるが、先方も図書館業務を知っており、こちらの意図を理解してくれたので希望どおりのシステムとなった。担当の方々には

この紙面を借りて改めて感謝したい

もちろん、多大な予算と時間を投資して新システムを開発したのだからよくなるのは当然であろうが、そのバランスを考慮したうえでの評価を今後行う必要がある。

閲覧業務の合理化・簡素化という点では、

- 1) コード類の整理を行い、その数を減らすと同時に厳密に定義した
- 2) コード類の管理は、WGが継続して行うこととした
- 3) 図書館によって異なっていた同一利用者の貸出上の身分を統一した
- 4) ILLの貸出上限冊数を全図書館共通とし、システムで管理する

ことで、一応の成果を上げた。ただ、上記の過程である業務分析について詳細な報告ができなかつたことが悔やまれる。

WGは、システムの運用にその主たる目的を移しつつ、存続している。システムから出力したデータを加工、印刷するソフトウェアを扱うデータベースの講習会も実施している。

開発時は、1999年1月に稼動させなくてはいけないからと、閲覧担当者にも我慢してもらった部分があったことは否めないが、タスクフォースとして、その活動を組織として支持され、システムの開発という意味で、業務がしっかり切り分けられていたため混乱も少なかった。

そして今、システムの運用を主たる目的としたとき、全塾PS部会との切り分けも難しくなっている。何がシステムで、何がそうでないのかという切り分けが運用という意味では非常に困難だからだ。

また、改修に手をつけていない部分に加え、新たな改修要求も出てきている。その要求をまとめるのも困難である。

WGがここまでシステムを作ってきたこと、閲覧業務の整理を行ったことは評価されてよからう。今後、個々の要求をどうまとめ、システムを維持、発展させていくか、そして次のシステムに繋ぐか、WGの真価は、これから活動にかかっている。

新OPACについて

かねこ やすき
金子 康樹

(一田メディアセンター係主任)

1. はじめに

1999年1月、慶應義塾大学メディアセンターでは、旧システムであるKOSMOS-OPACに変えて、新たなWebベースのOPACの提供を開始した。本稿では、開発に携わったもののひとりとして、開発の経緯と問題点、および今後の課題について記してみた

2. 開発の目標

はじめに、新OPACの開発に際して掲げた目標について説明したい。

図書館の新システム開発に際し、キーとなるコンセプトとして「単純化」「標準化」「実用性」があげられた。これらの3つの方針は、旧システムであるKOSMOSの持つ冗長性・複雑性を廃し、効率のよいシステムを構築することを目指として掲げたことを意味している。

新OPACに関しても、システムの全体方針である上述3点のコンセプトに従った上での開発を目標とした。

2.1 単純化

OPACが単純であるという場合には、2つの意味合いが考えられる。ひとつは、利用者にとって単純であること、もうひとつは、システム自体が単純なことである。前者については、操作方法が単純で、直感的であることや、ヘルプ、チュートリアルが充実していることなどが要件となる。本来、この2つの点は矛盾を含むものと考えられる。すなわち、操作方法が直感的でわかりやすいものであれば、ヘルプ機能はそれほど重視されないはずである。この相反する2つの機能を満たすためのバランスを意識した開発が望まれることになる。図書資料に関するデータは、一般的に複雑であり、単純化しきれない部分を有している。こうした、単純化しきれない部分については、しかるべきヘルプ機能を与えるべき

であるということが考えられる。

一方、OPACにおいて、システム自体が単純なことの表す意味は、索引語が単純であることを意味している。索引が複雑になればなるほど、システムにかかる負荷は大きくなる。単純な索引構造で、効率の良い検索システムをつくることが、当初計画された目標であった。

2.2 標準化

OPACにおいて、標準的であるということは、様々な面から考えることができよう。狭義には、図書館システムのパッケージが有する機能から大きく逸脱しないこと、すなわち、その館独自の機能をあまり付加しないことがあげられる。広義には、他の図書館システムや、データベース検索システムの操作方法、検索方法との整合性をできるだけあわせる、ということが考えられる。現在、インターネットの進展に伴い、Webを使ったOPACシステムが主流となっている。HTMLとCGIでOPACの検索システムが実現されているため、ユーザーインターフェースと検索語入力方法に関しては、様々なOPACにおいて大きな相違がなくなってきた。

2.3 実用性

旧システムであるKOSMOS-OPACの致命的な欠点は、その反応速度にあったと言える。新システムにおいては、何よりも検索速度を最優先課題として考えることが要求された。

3. 特徴

3.1 旧システムの問題点

KOSMOS-OPACにおいて、いくつかの問題点が指摘されていた¹⁾。この問題点に関しては、旧KOSMOS-OPACにおける改善策があげられていたが、新OPACでは、ここで指摘された問題点の解決を前提として設計が行われた。旧KOSMOS-OPAC

に対してあげられた問題点(改善要求)は以下のように集約できる。

(1)検索処理時間(レスポンス)の向上のための要求

- 地区別の検索
- 限定検索・サブデータベースの検索
- 表示されるデータの制限

(2)書誌・所蔵データの質の向上のための要求

- 主題情報の付与
- データの質的統一
- 索引生成方法

(3)操作性の向上のための要求

- 検索結果の印刷、ダウンロード
- 端末ごとの機能設定
- インターネットへの公開

3.2 新システムの特徴

新OPACの具備する特徴について、仕様を基にいくつか説明していく。

3.2.1 キーワード検索

キーワード検索は、「書誌事項検索」「主題・分類検索」「限定検索」の3つの部分から成り立っている。

「書誌事項検索」では、項目として、「書名(誌名)」「著者名」「出版社」「標準番号(ISBN,ISSN)」「その他の番号」「内容注記」などからの検索を行うようになっている。また、これらの全てのフィールドからの検索も実行できる。

「主題・分類検索」は、「件名」「分類番号」からの検索である。慶應義塾大学メディアセンターでは、所蔵資料の目録情報として、統一した件名を有していない。調達された書誌の件名は、ソースとなった目録に記載されたものがそのままの形で残っているのみであり、残念ながら体系化されてはいない。従って、国内資料であれば、基本件名標目表や国立国会図書館件名標目表や、その他MARCごとに固有の件名が付与されている。また、海外データに関しても同様である。さらに、オリジナル作成された書誌に関しては、新たに件名を付与する作業は行われていない。

分類番号については、書誌分類としてNDCを付与している地区もあるが、これも全地区統一されていないほか、NDCの版の問題も生じてくる。

こうした背景により、利用者にとって魅力的とも言える「主題・テーマからの検索」が、完全に実現できるわけではない。

そこで、新OPACにおいては、この「主題・分類検索」を、「書誌事項検索」から分離することにより、オプションの機能として持たせることとした。件名の付与状況や、件名標目表、分類表の違いを意識することを前提とした上で検索を行うようにしている。これにより、件名検索を行った際の検索漏れを利用者に意識させることを念頭においている。「限定検索」は、単独では利用できない検索オプションである。検索結果を絞り込むために、「出版年」「媒体」「言語」による絞り込みを行うことができる。

3.2.2 索引語一覧

通常のキーワード検索に加えて、新OPACには索引語そのものを参照し、そこから検索を実行する機能がある。この索引語一覧で参照できるのは、キーワード検索における「書誌事項検索」と同様のものである。

この索引語一覧機能には、2つの意味がある。ひとつは、自分の入力した検索語の有無が実際の索引と照らし合わせて確認できること、もうひとつは、索引語を直接参照するため、レスポンスが非常に早いことである。

ここで、新OPACの索引語構造について、説明しておきたい。

新OPACでは、和文・英文とも「ワードインデックス」「フレーズインデックス」という2種類の索引語を抽出している。「ワードインデックス」は、インデックス生成基準にのっとり作成された書誌レコード中の単語を手がかりとして検索を行うものである。一方、「フレーズインデックス」は、インデックス生成基準にのっとり作成された書誌レコード中の熟語を手がかりとして検索を行うものである。例えば、「研究情報と図書館」という書名があった場合には、「ワードインデックス」として、「研究」「情報」「図書館」といった意味ある単語がインデックスとして生成される。それに対し、「フレーズインデックス」においては、「研究」「研究情報と」「研究情報と図書館」「情報」「情報と」「情報と図書館」「図書館」などの言葉のまとまりがインデックスとして生成されることになる。フレーズインデックスは、あくまでも意味ある語の単位を基

本としているため、著者名等に関しては、姓、名の単位でのみ切り出しが行われる。ワード、フレーズとも、和資料については、カタカナ読み、ローマ字読みの双方からも、同様の検索語、検索フレーズが切り出される。

新OPACにおいては、書誌フォーマットとしてUSMARCフォーマットが使われている。インデックス生成規則に関しては、USMARCのすべてのタグ、サブフィールドに至るまで、検索語としての切り出しの有無と、ワード、フレーズインデックスへの切り出しを指定している。

この索引語一覧によって、入力した語に対するヒット件数が表示され、表示語をクリックすることにより、選択した索引語による検索が自動的に実行され、検索結果を得ることができる。

3.2.3 結果一覧表示

検索結果は、その件数に関わらず、一覧表示画面が表示されるようになっている。一覧表示画面においては、書誌事項として、タイトル(245\$a)、責任表示(245\$c)、版(250\$a)、出版社(260\$b)、出版年(260\$c)、シリーズ名(440\$a,411\$a,410\$a)が、ISBD区切り記号に準拠した形で表示される。所蔵情報については、状態、所蔵地区、配置場所、請求記号、BOOKIDが表示されるようになっている。利用者は、この画面からでも必要な資料がどこの地区のどの場所にあって、現在貸出中であるか否かなどの情報が見られるようになっている。

旧KOSMOS-OPACにおいて要望のあった、地区を限定した検索については、この一覧表示画面から地区を限定した表示を行うようにして、実現させている。また、WebによるOPACでは、結果の一覧をCGIによってHTMLに編集する際に、時間がかかってしまう。検索レスポンスを維持するために、一覧表示の最大件数を1,000件とし、これを超えた結果については、一覧表示を行わないようにしている。

さらに、一覧の並び順は、デフォルトで出版年の降順になっているが、好みによって、書名順や、配下日付の降順にソートし直すことも可能である。(配下日付の降順は、新着図書のチェックとして機能させることを目的としている)。

多巻ものの表示方法は、別途各巻詳細画面に移行して表示するようになっている。(この画面は、次

項で述べる結果表示画面になっている)。

また、雑誌については、所蔵地区と所蔵範囲のみ表示され、個々の物理単位(製本、未製本の所蔵情報)については、後述の結果表示画面に表示されるようになっている。

3.2.4 チェック機能と印刷・ダウンロード・メール送信

一覧表示画面においては、書誌の前にチェックボックスがついている。このチェックボックスにチェックをつけることにより、必要な書誌を印刷したり、ダウンロードしたり、また好みのメールアカウントに結果を送付することができるようになっている。

3.2.5 結果表示

検索結果の表示画面は3種類の表示方法を持つ。「簡略表示」「詳細表示」「タグ表示」の3種類である。「簡略表示」「詳細表示」とともに、書誌事項にはすべて「書名・誌名」「著者名」などといった見出しがついているため、図書館のデータに慣れていない利用者にとっても、わかりやすい表示となっている。一方「タグ表示」に関しては、主に図書館スタッフの便宜のために付加した機能であり、見出しに該当するものはタグとサブフィールドになっている。

「簡略表示」では、件名、分類番号は選択的なもののみ表示し、注記も表示していない。他方、「詳細表示」に関しては、件名、分類番号について全てを表示するほか、注記・内容注記に関しても表示させるようにしている。

表示された結果から、再検索を行うことも可能である。具体的には、件名、シリーズ名、著者標目、変遷誌名などのフィールドにリンクが設定しており、このリンクをクリックすることにより、再検索が実行されるようになっている。

上述のように、雑誌の物理単位は、この詳細表示画面から参照するようになっているが、多巻ものとは異なり、所蔵単位ごとの表示がされるようになっている。

3.2.6 その他の特徴

新OPACのためのサーバーは、業務システムのサーバーとは異なっている。このため、業務側に登録された情報が、OPAC側に反映されるまでに、タイムラグが発生している。通常、業務側からOPAC

側への反映は、夜間に行われているため、前日に受け入れられた資料の情報は、翌日には反映されるようになっている。なお、基本的に新OPACに表示されるのは、所蔵情報がついているものであり、発注中の資料は検索できない。また、除籍された資料については、所蔵情報は残っているが、OPACにはその詳細は表示されないようになっている²⁾。

4. 問題点

新システムへの移行は、1998年4月からスタートし、1999年1月にはカットオーバーするという強行スケジュールで実施された。短期間での移行作業であったために、カットオーバー時点からいくつかの問題点が見つかっている。こうした問題点に関して、すでに解決されたものと未解決のものについて、いくつか考察を加えてみる。

4.1 AND検索とフレーズ検索

1999年1月の新OPACリリース直後に、大きな問題が発生した。「書名・誌名」からのキーワード検索を行った際に、レスポンスがひどく悪くなってしまった。これは、カットオーバー時点では、従来のKOSMOS-OPACと同様に、単語間の空白を論理演算子「AND」と同義にみなした(学術情報センター方式)ため、洋誌名などを分かちで入力した際には、すべての単語のAND検索を実施していたことに起因していることが判明した。そこで、急遽単語間のスペースは単純にスペースと判断し、フレーズ検索を行うことで、レスポンスの改善を見ることができた。

4.2 分かち

日本語固有の問題として、分かちのルールがある。インデックス切り出しの際にも、この分かちを単位とするため、分かちが一致していないために検索漏れが多く発生してしまっていた。このため、1999年4月にインデックスの一部改修を行い、カナ検索を実施した際には、分かちをしなくても検索できるようになった³⁾。

4.3 完全一致と前方一致

当初、新OPACでは検索語に対する前方一致をデフォルトとしていた。これに対し、業務用検索にお

いては、完全一致をデフォルトとしていた。前方一致をデフォルトにすることにより、冒頭の語幹が一致するものすべてを検索するため、ヒット率は高くなるが、検索レスポンスが落ちることと、ヒット件数が多くなりすぎるという点が指摘された。そこで、ログファイルを分析し、利用者がどのような検索語を使用して検索を実行しているかを分析し、デフォルトを完全一致とし、前方一致を行う場合には、語の後ろに「？」を付加する方式に変更した。

4.4 720のインデクス化

旧KOSMOSから、新システムへの移行に際し、旧KOSMOSにおいて典拠ファイルにリンクが貼られていなかった著者標目データについては、通常の100\$aではなく、720\$aへの移行が行われた。これに対し、インデクス生成規則では720\$aをインデクス対象としていなかったため、著者からの検索がヒットしないことが明らかになった。そのため、1999年4月のインデクス改修において、720のインデクス化を行い、著者名からの検索効率が飛躍的に増大化した。

4.5 フルタイトルインデクス

インデクスが「ワード」「フレーズ」双方から成り立っているため、「Science」や「経済学」といった一単語からなりたつ書名の資料に関しては、ヒット件数が多すぎて表示できないという問題点があった。これに対応するため、新たに書名(シリーズ名等も含む)に関しては、フルタイトルインデクスを作成し、「正確な書名・誌名」という検索項目を追加した。さらに、これによる付加機能として、索引語一覧機能を応用した書名一覧機能を追加した。

4.6 著者名の標記の揺れ

これは現在未解決の問題である。新システムにおいては、書誌作成業務の効率化のため、著者名典拠を廃止した。典拠コントロールが行われていないため、著者名等の表記方法に揺れが生じてしまっている。特に漢字形における旧字と新字の違いや、外国人著者のイニシャルによる省略の問題などは、現物に記入されているものが基本となるため、どうしても揺れが発生してしまう。

こうした標目の揺れを、業務システム、OPACともに防ぐための工夫を今後は行っていく必要がある

4.7 インデックス正規化

これも未解決の問題である インデックスの正規化がうまくできていないと思われる点がいくつか見つかっている 大きなところでは、平仮名を片仮名へ変換する仕様になっているが、これが実現されていない。また、長音記号も一部正規化がうまく行っていないという事例が報告されている。こうしたインデックス正規化の修正には、抜本的なインデックスの改修作業が必要であり、1999年夏に実施する計画である。

4.8 人名件名

現在の仕様では、著者名からの検索を行った際に、人名件名もあわせて検索するようになっているが、これがヒット件数の増大化につながっているという意見がある。人名件名を独立した検索項目とすることを検討する必要がある この場合には、利用者に「人名件名」というものの意味を理解させるようになくてはならないであろう

4.9 マニュアル

そのほか、利用者からはマニュアルを求める声があがっている。ヘルプ機能も未実装であるため、今後早期に対応を行っていく必要があると思われる。

そのほかにも、細かい問題点はいくつか報告されており、ひとつひとつに対し、原因を究明し、しかるべき対処を行っていく予定である

5. 今後の課題

最後に、新システムが今後有すべき機能について、私見をいくつか述べる

新システムの開発開始時に掲げた目標には、上述3点以外に、「グローバル化」というものがあった。これにはいくつかの意味が含まれている。

ひとつは、英語版の作成である 開発期間の制約もあり、残念ながら現状はすべてのインターフェース部分は日本語になっているが、この英語版を作成することが必要であろう。実際、利用者からも英語版を求める声はあがっている。これはインターフェースに限らず、マニュアルやヘルプを含めて、

取り組んでいく必要があると考えられよう。

OPACがグローバル化することは、すなわち情報アクセスへの可能性を広げることを意味している。OPACは、言うまでもなく図書館の所蔵情報を提供するためのデータベースである。つまり様々な書誌データベースのひとつとしてOPACを位置づけることにより、先の展開へのステップと見なすことができるのではなかろうか。商用で提供される書誌データベースは、発展を続けており、現在はインターネットを意識した構成となっているものが多い。すなわち、他のデータベースや、電子ジャーナル等との連携が可能となっている。こうした動きにOPACも追随していくことにより、利用者にとってより使いやすいものとなりうる。

このうち、前者については、Z39.50プロトコルへの対応という形で、実現させていくことが計画されている。また、後者に関しては、タグ856の運用などを書誌作成側と検討していくことが考えられる。もうひとつ、利用者が現在自分が借りている資料に関する問い合わせをOPACから行う機能が当初計画されていた。結局のところ、認証の問題が解決されずに実現されなかったが、多くのOPACシステムによって実現されている機能であり、慶應においても再考の余地があるのではないかと考えている。

注および参考・引用文献

- 1) OPAC運用・調整ワーキング・グループ."全塾図書館システムにおける次期利用者用オンライン目録について(最終報告書)". 11p. 平成7年.(内部資料).
- 2) したがって、新OPACにおいて書誌だけがあって所蔵がないものが表示された場合には、除籍された資料である、ということになるが、本稿を執筆している時点(1999年7月)では、移行の際に生じたエラーデータがあるため、この限りではない。
- 3) なお、この問題は後述するように、インデックス生成規則がうまくいっていないことに起因していると考えられる。今後のインデックス改修にて、漢字形やローマ字形についても、同様の処置が必要となる。

ティールーム

奇怪な機械のお話

おぎの
荻野 安奈
(文学部助教授)

メディアネットからの原稿依頼で、「ネット」の文字にひっかかった。ネットといえばパソコン、私にとって古傷の痛む分野である。原稿は原則として「MS-DOS」のテキストファイルで、と伺うなり額からすうっと血の気が引いた。SMではなくMSときた。DOSって何どす?あまりの狼狽ぶりを察してか、別に形式は問わないと、なだめる調子が受話器の向こうから伝わってきて、胸を撫で下ろした。

「執筆要綱」を頂いてからしばらくして、メールボックスに新たな封筒が入っていた。メディアネット特製の原稿用紙に、「先生はワープロ等をお使いにならないということをお伺いいたしましたので」と添え書きがある。「ワープロ等」の「等」のほうでは挫折したが、これでも普段はワープロなのである。依頼電話の折のあまりの慌てぶりに、手書きと判断されたのだろう。余計なお手間をとらせて恥ずかしく、そんなわが身が情けなく、一念発起。実はこれ、現在進行形でパソコンで打っている。最後まで持つかどうか、メールで送れるかどうか、書いている本人にも自信はない。

2年ほど前になるだろうか。初心者向けのパソコン雑誌からエッセイの連載依頼を受け、渡りに船と引き受けた。周囲の先生方はもちろんのこと、学生たちに至っては指の延長のごとくマシンを使いこなしている。いじけていたところに、恩師から思わずプレゼントがあった。専門とする16世紀の作家、ラブレーのCD-ROMである。薄っぺらな一枚に、作家のあらゆる版が網羅してある、はずなのだが、肝心のパソコンなしでは中身が見られない。いっそCDプレーヤーにかけてみようかと剣呑なことを考えていたところだったのである。

連載用にとノートブック型が一台与えられ、設定から何から編集部まかせ。お大尽様の気分で事に当たったのがよくなかった。下積みの苦労なしに、突然座布団10枚の上に乗っかった人間は、とりあえず転げ落ちる、というのが人生の原則である。異変はマウスから始まった。研究室で設定したマシンを自宅に持ちかえり、一

階で用いていた間は問題がなかった。二階に移動するなり、画面が凍り付いて、どこをどう叩こうがビクとも動かなくなった。奥の手の強制終了を試し、もう一度立ち上げた画面がすでに凍っている。またしても強制終了、また立ち上げては凍りつく。まさに賽の河原の石積みで、不動の画面がミルフィーユのごとく折重なるばかり。パソコン通と思われる知り合いに網羅的に電話をかけまくった、最後のひとりが教えてくれた。もしやマウスの左右の機能が入れ替わっているのではないか。

コントロールパネルを弄る発想など当時の私にはない。マウスが、自発的に、というのもへんだが、機能の入れ替えを行ってしまったのである。以後、何度も設定をし直したが無駄だった。今では諦めの境地で、最初の「OK」を

クリックするとき、今日は右かしら左かしら、とむしろ楽しみにしている。機械のバグだと理科系の友人は決め付けるが、原因は地縛霊というのが私の見解である。

その後も絶妙なトラブルの連続で、エッセイのほうは好評だった。こんなひどい例もあるのかと、初心者の読者を大いに安心させたからである。最初はファックスで入れていた原稿を、初めてメールで送るのに成功したときなど、受話器の向こうで担当編集者はほとんど涙ぐんでいた。編集者も気の毒だったが著者はボロボロとなり、連載終了と同時に機械は部屋の片隅で埃をかぶることになった。

ただならぬ経緯を経て、今回こうして晴れのパソコン復帰を果たしている。研究休暇の今年、フランス滞在が難しいとあって、あちらの図書館にアクセスぐらいは出来るようになりたいと、せめてもの思いで機械にへばりついているのが実情だ。ようやく印刷機も揃えて、先日は初印刷に挑戦した。何度も試みても設定ミスの表示が出る。コントロールパネルを始め、想像の及ぶ範囲をチェックし、深夜の一時間を無駄にしてから気がついた。印刷機のスイッチが入っていないかった。わがOA化への道は、フランスよりも遠かった。



集中処理機構の発足とその意味

いりえ
入江 伸

(メディアセンター本部課長代理)

1. はじめに

1998年10月、慶應義塾大学メディアセンターにおける全地区の収書・目録業務を処理する機関として集中処理機構が誕生し、組織的にはメディアセンター本部のもとに位置付けられることとなった。

この組織には2つの特徴がある。一つは各地区でそれぞれ行われていた収書・目録業務を三田メディアセンターで行われていた収書・目録業務の組織へ業務委託する形(社内アウトソーシングに近い)で立ち上げたこと、もう一つはそこで運用実績を積み、集中処理機構へと発展させた業務モデルということである。本稿では、集中処理機構発足の経緯と特徴について説明したい。

2. 集中処理機構の目的

厳しい経営環境の中で、図書館においても業務の効率化と新しいサービスの創造という、ただでさえ難しい2つの課題を同時にかつ緊急に実現することが強く求められている。図書館の経営資源の効率的な運用のため、分散した機能を集中するための業務モデルや、アウトソーシングを含めた外部資源を活用する形の業務モデルが多く検討されてきている。

集中処理機構は各地区で行われてきた収書・目録業務を集中処理することで業務の効率を上げると同時に、書誌データを集中管理することでデータの安定した品質を維持していくこうというものである。

しかし、業務を集中するだけですぐに業務効率が上がるわけではない。短期間に集中処理機構を実現するためには、三田メディアセンターで運用されてきた新しい業務モデルとその支援システムの実績が重要な要素であった。

3. 集中処理機構の発足まで

3.1 集中処理機構の業務モデル

集中処理機構の業務モデルは、三田メディアセンターにおける滞貨一掃プロジェクトと、それ以降の「これから滞貨を生まないために」開発された収書・

目録業務の新しい業務モデルとその支援システムであった。

3.2 三田地区における業務モデルの設計

三田メディアセンターにおける業務モデルは、整理業務を生産ラインに見立て、生産量をコントロールし、材料となる書誌データを業務モデルに合わせて調達するという考え方を基本としていた。実際のライン設計は、工場のライン設計にあわせ以下のように行われた。

- 収書・目録の手順を工程に分解した上で、工程ごとの作業と工程間のインターフェースを設定する
- 個々の工程の生産性を算出し、人件費を積算する
- 工程管理の方法とロット単位を決定する

その上で年間受入冊数から1日の生産高を算出し、ラインの生産性を決定し、それにあわせて発注・受入量をコントロールするというものである。また、この目録ラインへの材料(流用する書誌・所蔵データ等)は受入時点で調達するように設計された。

3.3 支援システムの開発

三田メディアセンターにおける業務モデルで生産性をあげるため、そのボトルネックとなっていたKOSMOSの使用を部分的に停止し、代替システムの開発を進める必要があった。

図書の受入は、丸善の発注・受入システム「ちょいす君」を使い、調達した書誌・所蔵データは、日々の一括処理でKOSMOSに登録することにした。雑誌受入システムは独自に開発し、図書と同様に受入データをKOSMOSへ登録することとした。

この支援システムのスタイルは、そのままKOSMOSIIの分散システムの基礎となっている。

この業務スタイルは三田メディアセンターで成功し、日吉地区でも適応されることによって、1地区のモデルから複数地区のモデルとなった。

4. 三田モデルから全地区のモデルへ

集中処理機構は、実績のあった三田メディアセン

ターでの業務ラインに各地区から業務委託する方法で検討が進められた。

集中処理機構という新しい業務モデルを作成したのではなく、三田メディアセンターで運用されてきたラインを標準とし、そこへ業務を委託できるものと地区に残さなければならないものの区分けを行っていった

集中と分散についての基本的な考え方は、効率化を図れる業務については可能な限り集中処理機構へ委託して標準化し、一方、地区特性の高い業務は生産性が低下してしまうことを避けて、そのまま各地区に残すことである

4.1 地区へ残すものと集中するもの

選書業務と発注業者は、地区経営の基本事項であるため各地区業務とし、集中処理機構では発注業務から目録業務までと決められた。各地区との調整の結果、地区の専門性の高い一部の分類と、緊急性の高い至急本の処理は各地区へ残すこととなったが、ほとんどの業務は集中処理機構へ委託となった

装備は当初、集中処理機構の範囲としたが、地区特性が高いため各地区へ戻すことになった

4.2 雑誌集中処理機構

雑誌集中処理機構は、雑誌チェックインシステム(KOHEI)を全地区で共用することから始めた

雑誌のチェックイン業務の統合は、三田・日吉・藤沢で行うこととし、緊急性の高い理工・医学の雑誌はそれぞれの地区に残すこととした

4.3 予算管理と支払い

予算権限は各地区にあるため、日々の予算実績のデータを集中処理機構で作成し、Webの管理表を更新している。前日までの、発注額・受入額・予算残額が確認できるようになっている。

支払いでは、発注で利用するシステムが複数あるため、それぞれのシステムから出力されるデータを集中処理機構でまとめ、経理へ提出している

4.4 物流

集中処理機構では、三田から各地区へ毎日350冊を配送している。そのため、新しい物流のラインを作成することになった。

5. 新システムと集中処理機構

KOSMOSIIで想定していた業務モデルが集中処

理機構であったため、集中処理機構への業務委託の立ち上げがうまくいかなければ、KOSMOSIIの開発に影響があったと思える。逆にKOSMOSIIが集中処理機構をモデルに開発されたため、各地区ではそれ以外の業務フローを想定することが難しかったのかもしれない。

ただ、KOSMOSが各地区のあらゆる業務形態をサポートするために複雑になっていたことに比べると、KOSMOSIIはきわめて単純になっている。

6. 今後の課題

集中処理機構は各地区の業務を委託される形で作られてきたため、各地区の業務とうまくかみ合っていないものや、業務的に抜けていたこともある。

たとえば、予算管理や支払い管理については、経理や業者との関係、各地区総務との関係を調整しなければならない。各地区へ配送した後の物品管理的なデータ保守作業についてもこれから決めていかなければならない。

また、目録業務が集中処理機構に集中することによって、地区で目録のスキルが薄くなってしまうことや、逆に利用者から離れた集中処理機構の中にどのようにサービス意識を維持していくか等の問題が残っている。

集中処理機構の立ち上げによる大きな成果として、業務が標準化されマニュアル化されたことがあげられる。このマニュアルがあれば、そのままアウトソーシングすることも可能であるかもしれない。

集中処理機構による効率化と標準化にめどがついた後は、新しい付加価値についての方向性を確立していく必要がある

白楽サテライト・ライブラリー

みやざき ていじ
宮崎 貞治

(メディアセンター本部課長代理)

はじめに

白楽サテライト・ライブラリー(以下HSL写真参照)の運用開始から5ヶ月以上が経過したが、慶應内外の利用者への知名度が未だ低い現状を鑑み、HSL開設の経緯と現状について、まとめてみた。

1. HSL開設までの経緯

慶應義塾では書庫の狭隘化に対応するため、資料の保管場所を探していたが、1998年夏に第一候補として東京通運(株)横浜支店ビルの倉庫が絞り込まれた。この倉庫を視野に入れた書庫計画を検討するため、三田メディアセンターのスタッフ9名による白楽ワーキンググループが組織され、8月28日から10月15日まで、計10回の会合が開かれた。

その後、11月からは白楽の現地担当として2名が着任し、書庫管理担当の3名とHSLワーキンググループが組織され、翌年の開設に向けて運用や具体的な準備計画立案のための検討を開始した。

11月18日には東京通運との間に白楽倉庫の正式賃貸契約が結ばれ、また、2月5日には白楽サテライト・ライブラリーの名称が常任理事会で承認された。実際の作業は2月8日からのシール貼り(HSLへ移管する資料の印)を皮切りに、番地札(白楽書架)の資料への差込み、業者による結束、白楽への運搬作業、書架への展開、結束ほどき、蔵書点検と続いた。一方、2月15日には備品類の搬入が行われ、予定通り3月1日の開室を迎える事ができた。

しかし、三田での作業は、開始から13日までは館中のために利用者が館内におり、また、移送する資料が三田の新館、旧館、新研究室棟地下とに分かれていたため、作業日程、計画の立案、実行とも容易ではなかった。

また、白楽の書庫は暖房がなく、10℃程度まで下がる日も多いため、書庫内での作業に困難を来たすこともあった。

上記の作業にあたった人数は、2月8日から13日は

1日平均18人、15日から20日までは三田で32人、白楽で3~4人、22日~3月4日は白楽で7~8人であった。

2. 開室以降

3月13日に日本石炭産業史関連資料を4階書庫に搬入、3月29日から31日には中山資料センターから三田の旧分類洋書約10万冊が移送され、6月17日には、マールブルグ大学、ケルン大学両学位論文、ニュージーランド・コレクション、ルーマニア・コレクションが4階書庫に搬入され、予定されていた資料が全て揃った。

上記に伴い、HSLの書架利用状況を作成した(表1、図1)。3階の新分類和・洋書は今後三田から白楽へ古い順に移す予定であるが、白楽での追加受入分(5年分)を想定して書架には余裕をもたせ、40%前後の占有率になっている。また、4階の書架E.Fは完全に空いているが、予定されている大口の搬入資料は今のところない。

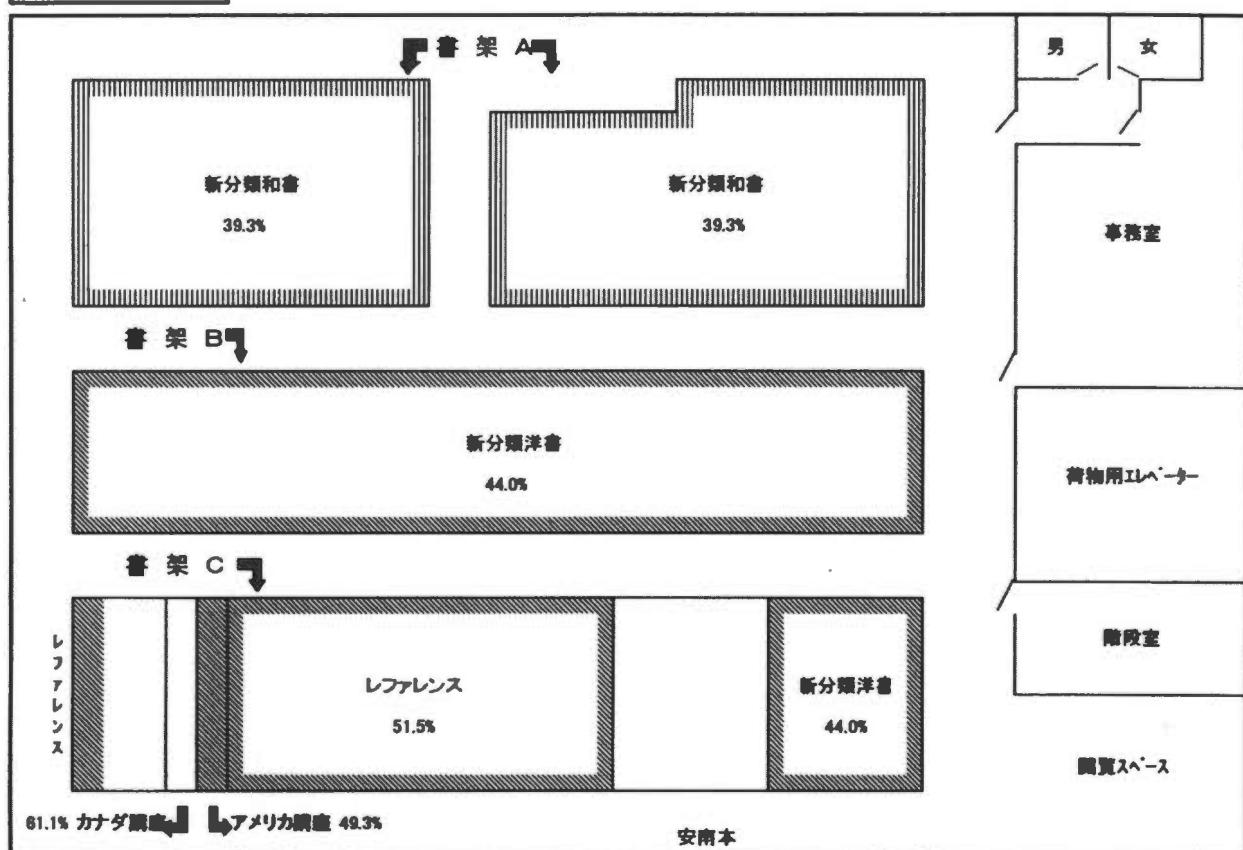
開室以来の業務統計はグラフ1、2にまとめたが、春季休業中の3月に比べ、4月からは数字が伸びている項目が多い。

おわりに

今後の懸案事項は、閲覧スペースに暖房がないために冬期に長時間閲覧が不可能であること、同じく、閲覧スペースの照明が14席中5席にしかなく、これらのできるだけ早い解決が望まれる。

HSLは6番目のメディアセンターとしての位置づけを目指して開設され、6月1日をもって正式にメディアセンター本部の管轄となった。改めて名実共に6番目のメディアセンターになれることを目指して今後更に内容を充実させる必要がある。

3 階



4 階

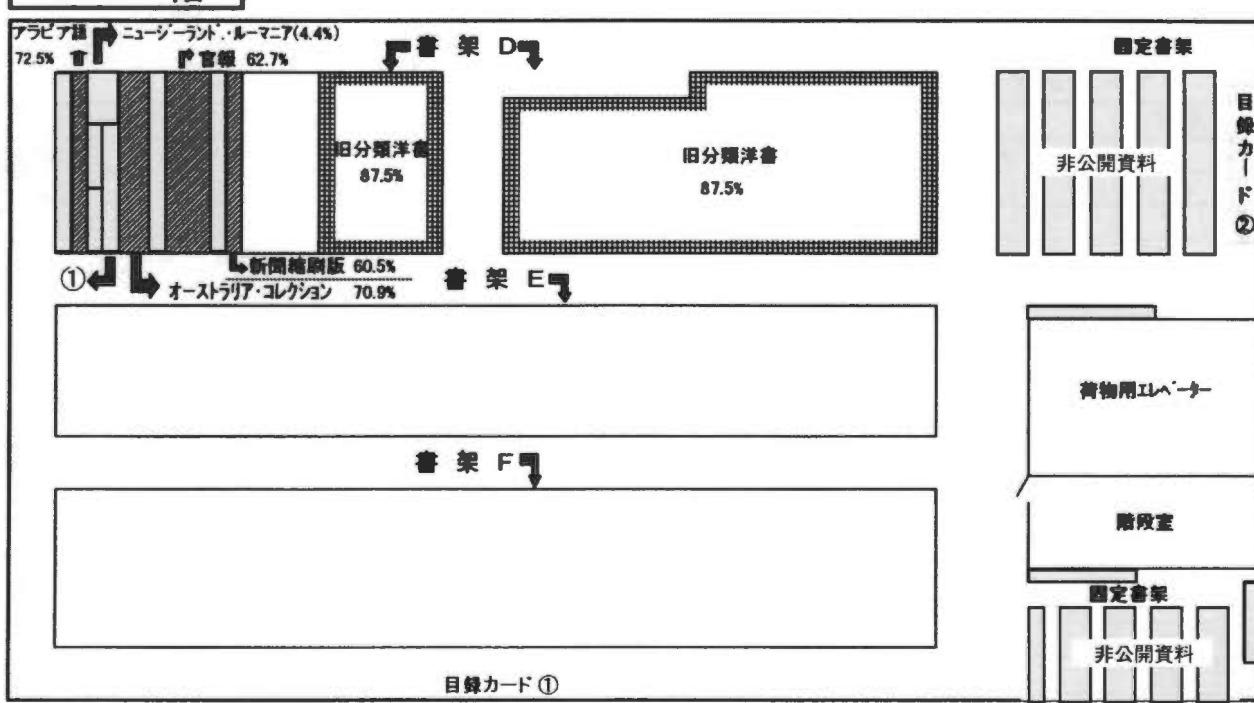


図1 白楽サテライト・ライブラリー書架状況

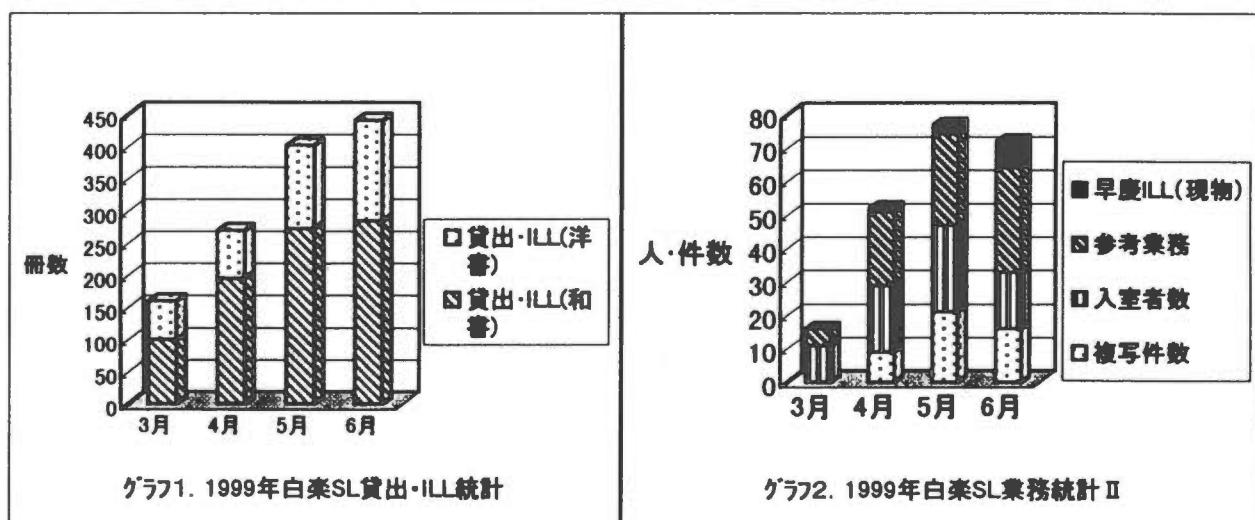


表1. 白楽SL書架使用状況

書架名	資料名	使用棚延長	空き棚延長	合計	棚占有率	割合(全体)
三 階	A 新分類和書(A)	142,690.0	220,230.0	362,920.0	39.32%	7.01%
	B・C 新分類洋書(B)	147,059.0	187,023.0	334,082.0	44.02%	7.23%
	C レファレンス資料(Ref)	74,553.0	70,271.0	144,824.0	51.48%	3.66%
	C アメリカ講座図書(Am)	5,888.0	6,066.0	11,954.0	49.26%	0.29%
	C カナダ講座図書(Ca)	4,413.0	2,811.0	7,224.0	61.09%	0.22%
	小計	374,603.0	486,401.0	861,004.0	43.51%	18.41%
四 階	C 他空き棚計	0.0	71,565.0	71,565.0	0.00%	
	合計	374,603.0	557,966.0	932,569.0	40.17%	
	D 旧分類洋書	257,191.0	36,585.0	293,776.0	87.55%	12.64%
	D 新聞縮刷版	2,186.0	1,426.0	3,612.0	60.52%	0.11%
	D 官報	7,768.0	4,616.0	12,384.0	62.73%	0.38%
	D オーストラリア・コレクション	5,730.0	2,354.0	8,084.0	70.88%	0.28%
階	D アラビア語コレクション	7,174.0	2,458.0	9,632.0	74.48%	0.35%
	D ケルン大・マールブルグ大学位論文	2,045.0	2,771.0	4,816.0	42.46%	0.10%
	D ニュージーランド・ルーマニア・コレクション	213.0	4,603.0	4,816.0	4.42%	0.01%
	固定 日本石炭関連産業コレクション	71,036.0	0.0	71,036.0	100.00%	3.49%
	小計	353,343.0	54,813.0	408,156.0	86.57%	17.37%
	E・F 他空き棚計	0.0	693,504.0	693,504.0	0.00%	
合計		353,343.0	748,317.0	1,101,660.0	32.07%	
総合計		727,946.0	1,306,283.0	2,034,229.0	35.78%	

三田メディアセンターニュース**E-mail レファレンスを開始**

研究室・自宅・出張先などからレファレンスサービスを受けたい、というかねてからのご要望に応えて、1999年7月22日よりE-mailによるレファレンスサービスを開始しました。

当面は三田キャンパス所属の専任教員を対象に所蔵調査・事項調査などを承ります。

図書館内のサインを新しくしています

新館のオープンから17年が経過し、資料室名やコーナー名などが大幅に変わりました。このため、サイン全般を見直す目的で、一昨年、サイン計画検討会が発足しました。

新館・旧館双方を調査した結果、改訂・新設が必要なサインが多々リストアップされました。これらを3年計画で一新する予定です。

現在は2年次目までの工事が終了し、新館各階のフロアマップ、カウンターサイン、旧館の書庫サインなどを設置しました。

自動入館システムの導入

本年2月、新館入口に自動入館システムを3ゲート導入しました。

従来の入館手続きは受付カウンターのスタッフによる学生証の目視確認でしたが、学生証の磁気ストライプ部分をゲートで読み取る方式に変更しました。

期末試験期の大混雑が大幅に緩和されました。

旧館の資料移動を行いました

夏季休業期間中に、旧館の資料を一部移動しました。今回の作業により、遠山音楽文庫は全て旧館内に配置され、新研地下書庫からの出納手続きは必要なくなりました。

詳しい配架場所についてはフロアマップを参照してください。

旧館の照明を増設

旧館の地下1階第2、第3書庫と地下2階第3書庫の照明を増設して明るくしました。

小展示ニュース**<日吉メディアセンター>****平成10年度**

第4回 作家の手稿・「複製近代文学の手稿100選」

(平成10年8月1日～9月30日)

第5回 「ルイ14世と宮廷文化」

関連上映会「三銃士」「王妃マルゴ」

(平成10年10月1日～11月30日)

第6回 「宇宙科学の歴史」

(平成10年12月1日～平成11年1月31日)

第7回 「手塚治虫ワールド」

(平成11年2月1日～3月31日)

平成11年度

第1回 福澤諭吉と慶應義塾

(平成11年4月1日～4月30日)

第2回 ミステリー・サスペンス小説はすごい！

(平成11年5月1日～6月30日)

第3回 東洲斎写楽撰

(平成11年7月1日～9月30日)

三田メディアセンターの雑誌再配置について

むらた ゆみこ
村田優美子

(三田メディアセンター)

1998年夏に、雑誌を中心とする新図書館3、4階の資料再配置を行なった。計画と準備には数年かかり、移動作業だけでも2ヶ月近くを要する大掛かりな作業であった。その背景や作業の経過、反省点などをここにまとめる。

1. 目的

今回の再配置の目的は2点あった。

1点目は書庫の狭隘化に対応することである。この問題はおそらくどこの図書館にも存在する悩みの一つであろう。三田の雑誌も例に漏れず、製本雑誌が書架の天板の上にまで積みあがり、取り出すときに危険なばかりでなく、部屋全体を薄暗くし、圧迫感を与えていた。さらにそれでも入りきらざにバックトラックに乗せて別置していたタイトルもあった。

もう1点は、3、4階にそれぞれどのような資料を配置しているのかがわかりにくいという点を解消することであった。

2. 再配置前の3、4階

かつて雑誌資料は研究室棟と現在の旧図書館に分散し、利用上の制限も多かったが、1982年の新館オープン時に3、4階に集中させた。3階雑誌室は図書館予算と文学部予算で購入した雑誌、4階総合資料室は経済資料室(経済・商学部)と法学部資料室の雑誌およびその他の専門的な資料が配置された。また、4階は教職員・大学院生を対象とするフロアと位置づけており、3階と比べると静寂な雰囲気が保たれていた。

図書については目録担当と配架の担当、レファレンスなどと業務が分かれているのに対し、雑誌は受入、配架、製本、サービスのすべてを3、4階それぞれが受け持っていた。

運用はそれぞれ独自に行なわれており、カードの配列方法や各種記録の記入方法、配架規則などを始

めとして、製本の仕様や天地印・受入印といった細かな部分などを含めると、3階と4階では多くの点において異なっていた。

例えばコーナー分けの基準である。白書のコーナーを取り上げてみると、3階では各省庁で出している白書を指していた。一方4階ではより広義でとられており、タイトルに「白書」とつくものはすべて白書コーナーに含めることにしていた。このようなことは雑誌と統計・年鑑でも例があり、3階では雑誌扱いなのに4階では統計・年鑑扱い、というタイトルもあった。

コレクションを見ると、3階のマイクロ資料、4階の国際機関の資料や洋統計、洋法令、洋判例など、各フロア特有の資料がある一方で、一番大きな部分を占める和雑誌、洋雑誌、和法令、和判例、白書などは3、4階双方にコーナーがあった。専門性の高さに違いが見られるものの、3、4階それぞれにどのような資料があるのか、ある雑誌がどちらのフロアで所蔵しているのか、わかりにくく状態であった。重複購入していたタイトルもあった。

3. 再配置案が決まるまで

3、4階の資料再配置を行ないたいという話はここ数年に持ち上がったことではない。過去の資料を見ると、1987年にはすでに配置替えに向けた話し合いが持たれていることがわかる。しかし、配置替えによって教職員・大学院生向けという総合資料室の性質が変わってしまうことから、教員から賛同を得られなかつたようである。

1996年にも立案したものの見直しを迫られ、最終的に計画が承認されたのは1997年のことである。

今回の所蔵一本化と再配置計画が承認された背景には、書架状況がより一層厳しくなったことが利用者の目にも明らかになったことが挙げられる。ただし、再配置によって4階への学部生の入室が増加し、これまでの教職員・大学院生のための静寂な空

間が保てなくなることが予想された。さらにこれまで4階を中心に利用していた教員には、再配置の結果かえって不便になる場合がある。そこで学部生の4階入室時手続きを継続すること、3階に教職員用の閲覧席を設けることなどによって、理解を求めた。

また、業務改革による組織変更などによって1995年には雑誌受入業務が、1996年には製本業務が、それぞれ3、4階から切り離されてテクニカル部門の管轄となった。これにより3、4階のスタッフはレファレンス業務に従事することになり、こうした流れも管理の一元化・簡素化への動きを後押しすることになった。

4. 新しい配置について

もともと雑誌室と総合資料室の資料配置がわからにくかったことと、重複所蔵をなくすことではます各フロアの性質が曖昧になってしまうことから、わかりやすい配置を目指した。当初の案では3階が雑誌全般、4階が統計・年鑑や法令・判例などの資料という配置を考えていたが、各学部の図書委員会等で理解を得られず、検討の結果、3階が和雑誌と日本に関する統計・年鑑、4階が洋雑誌と外国に関する統計・年鑑という配置にした(図参照)。移動の対象は雑誌、統計・年鑑、法令、判例、加除式資料、白書とし、それ以外の国際機関やマイクロ、新聞などは従来のフロアに据え置きとした。また、大学紀要を3階から2階に移すことで、3階の書架に余裕を持たせた。

5. 作業

1998年2月から本格的に作業開始、1998年9月完了を目指にスケジュールを組んだ。

5.1 所蔵の一本化

3、4階両方で所蔵している雑誌は、今後は原則として1部のみ所蔵することとした。この所蔵を一本化する作業は、洋雑誌については1996年夏に行われていたため、1998年の対象は主に和の雑誌、統計・年鑑、法令、判例、白書であった。

一本化の対象となるタイトルは前任者の時代に3、4階のシェルフカードを照合してリスト化されていた。休・廃刊したものや誌名変更したものを受けければ、重複は約1000タイトルにも上る。そのリスト

をもとに、1998年2月に入試期恒例の蔵書点検を行わず、シェルフカード上で一本化作業を行なった。現物とカードを照らし合わせ、所蔵範囲を長く、かつ欠号なく所蔵できるように埋め合わせた。その後4月から約4ヶ月かかって重複資料を抜き出した。それらは現在、箱につめて保管中である。

なお、特に利用頻度が高い雑誌や教員から強い要望があった雑誌は、引き続き複数部を購入・保存している。

5.2 統計・年鑑の請求記号付与

これまでのタイトル順配架(3階)・独自分類配架(4階)を改め、新しくNDC9版を採用した請求記号付与を4月から7月まで行なった。これは国や地域別に配架できるように工夫した請求記号である。請求記号が決まったものからラベルを作成・貼付した。

5.3 移動作業

移動作業は利用者への影響を最小限とするため、できるだけ夏季休業期間中を利用することを目指したが、時間が足りないため、法令や判例など比較的タイトルボリュームの少ないコレクションの移動は6月から行なった。

続いて7月中旬に慶應義塾大学以外の紀要を2階に配置した(2階にあった大型本は地下5階へ移動)。慶應義塾大学の紀要是3階に据え置いた。学外からの利用もあるため、カウンターの設置されている3階にあったほうがよいと考えてのことである。

8月は、繁忙期にあたる通信教育課程のスクリーニング期間を除き、前半と後半に移動作業を行なった。前半の一斉休暇中には、統計・年鑑をタイトルのアルファベット順から請求記号順に並べ替えた。3階には日本に関する統計、4階には外国に関する統計が、請求記号順に並ぶことになった。地下4階・地下5階も、これまで雑誌に混配されていた統計・年鑑を地上階と同じように別コーナーにし、請求記号順に並べた。

後半の8月21日から1週間は、3、4階を閉室して作業を行なった。和雑誌・洋雑誌・それぞれの新着雑誌書架・事務室内のカードや事務用の参考資料の配置替えである。

まず3階の洋雑誌を地下5階に一時的に移動させ、3階に大きな空きスペースを作る。ここに、3階の和雑誌と4階の和雑誌をそれぞれブックトラックで運

び、タイトルをローマ字表記したもののアルファベット順になるように棚に収めていった。一方、この作業で4階に空きスペースができるので、そこには洋雑誌を収めてゆく。これも、一時的に地下5階に降ろした3階の洋雑誌と、4階の洋雑誌を見比べて、アルファベット順の一つの流れに直していく。

作業前半、一斉休暇のうちの4日間は書庫管理担当の専任職員3名他、学生嘱託、業務委託の男性スタッフ11名が出勤した。作業後半、8月21日から1週間は、3、4階を閉室し、常時約30名が資料の移動、棚の組み替え、掃除などに従事した。始めの、3階洋雑誌を地下に降ろす作業は、業者に依頼した。

6. 成果と課題

所蔵の一本化と再配置から約1年が経過した。書庫スペース上の問題は若干改善されている。とくに3階にはスペースの余裕ができた。4階も、書架の天板の上に資料をのせるという事態は回避された。

配置のわかりにくさも改善されたと図書館側では考えている。3階が和雑誌、4階が洋雑誌という大まかな区分けができ、数々の配架上の例外をなくしたこと、OPACに頼らなくてもどのフロアにあるかがわかる。配置替えの直後も、こちらが思っていたほどの混乱はなかった。ただ、3、4階の並びを一本化してわかりやすくなった、というのはスタッフから見た側面であり、利用者(とくに教員)にとっては、コレクション全体がどう並んでいるかということや配列規則はともかく、探している資料の場所がわかれればいいのであって、今まであったはずの場所にないことに不便を感じるようである。スタッフは、この感じ方の違いを頭に入れておいたほうがいいだろう。

また、移動させる量に対して2ヶ月間で作業がすんだのは、閲覧業務委託による労働力の増加によるところが大きい。今回の書庫移動は3、4階の雑誌のタイトルを見比べながらアルファベット順に一本に並べ替える作業である。また移動先に十分なスペースがあるわけではないため、移動の様子を見ながら別の場所の配置図を書きざるをえない。このような状況で移動作業を運送業者等に任せるとすると、かなり複雑な準備をしなければならないし、修正が必要になったときに小回りがききにくい。短時間に合

理的に作業してもらうことは困難だったと思われる。これまでのように学生嘱託に頼るだけでも、2ヶ月で終わらせるのは無理であったろう。それが1997年からカウンター業務やシェルフリーディングを委託するようになり、書架の詳しい配置を把握しているスタッフが増えた。彼らは移動に関する説明もよく理解できるし、何か問題があればそれに気づいてくれる。学生嘱託とうまく連携して、手際よく移動作業をこなしてくれた。

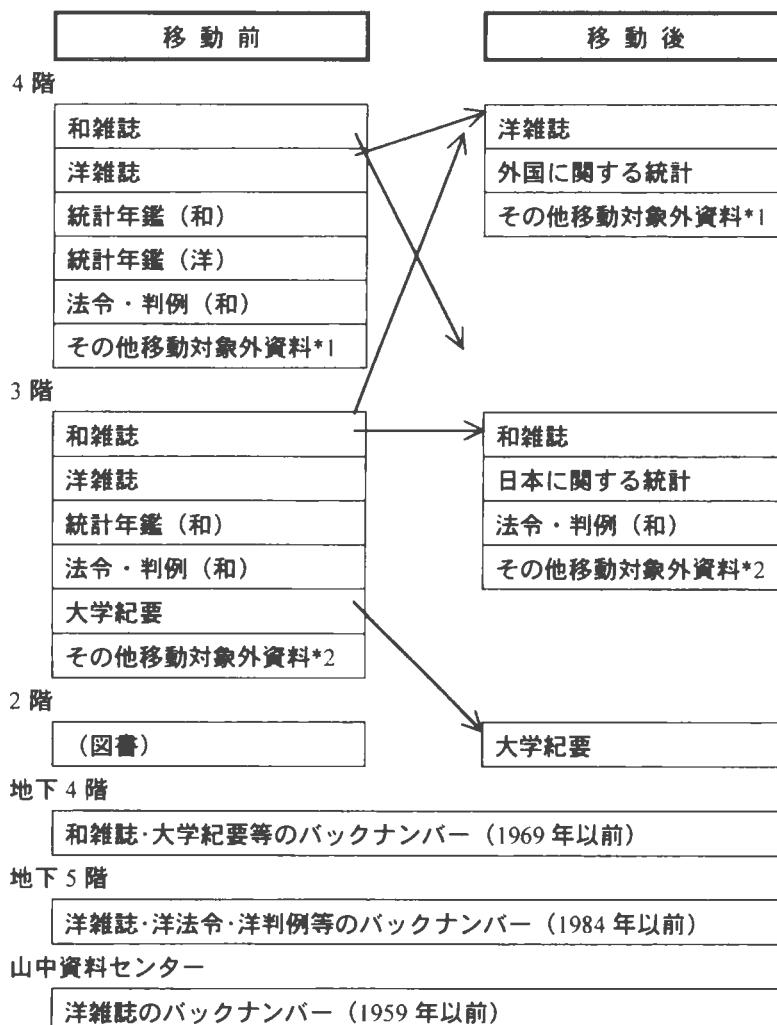
計画段階を含めての反省点は、テクニカル部門との調整である。ここ数年にわたって進められている雑誌のデータ整備との兼ね合い、一本化したときの予算の調整、現物の移動とOPACの配置場所コード変更のタイミングなど、うまく連携できなかつた部分があったことは否定できない。今回に限らず、書庫移動時には、現物移動とデータ修正のタイムラグが極力小さくなるように、スケジュールの調整など綿密な打ち合わせをする必要がある。

早めに計画を立てるのは容易なことではない。棚に少しでも余裕があるうちは、一時的にせよ利用者に不便を強いる必要性が理解されにくいからである。

しかしながら、未製本雑誌を含めると月5000冊を上回る雑誌を受け入れている現在の状況では、計画の時期を誤るとたちまち資料が棚から溢れ出し、無駄な書庫移動や複雑な別置を繰り返すことになる。利用者の皆様には三田の書庫の状況についてのご理解をお願いすると同時に、三田メディアセンターでは単行書・雑誌を含めた長期的書庫行政について考えることを今年度の事業計画としている。

7. おわりに

この計画には長い歴史があり、その途中の組織変更や業務委託、人事異動、データ整備など、いろいろな要素が絡み合って何度も修正を重ねながら、ようやく終了することができた。この間、数多くの方がこの計画に携わっている。志半ばで他地区に異動された方々、膨大な重複タイトルのリストを作った方々、ホコリの積もった書架を掃除してくれた方々、データ修正をしてくださった方々、そして夏の間ひたすら移動作業をしてくれた方々に、あらためて感謝申し上げたい。



*1 法令・判例 (洋)、国際機関資料など

*2 新聞、マイクロ資料など

資料配置図

雑誌と再配置に関する年表

1982年	4月	新館オープン、雑誌を集中化
1987年頃		この頃すでに再配置計画が持ち上がる
1995年	春	組織変更により、雑誌室・総合資料室の業務から受入・配架・製本業務等を分離
1996年	3月	洋雑誌1959年以前を山上資料センターへ移動
		運営会議で再配置案承認
	7、8月	新館内での洋雑誌の移動
	9月	重複雑誌 (洋) の一本化
	12月	雑誌製本業務をテクニカル部門の管轄に
1997年	1月	閲覧業務を委託
	4月	各学部から再配置案に賛同得られず、改定案作成、運営会議で承認
1998年	2~7月	重複雑誌 (和) の一本化
	4~8月	統計年鑑資料に請求記号付与
	5~8月	書庫移動

ILLサービスの拡充について

ひらの
平野 真紀

(メディアセンター本部)

1.はじめに

近年、情報化社会の中にあって、利用者の情報要求は増大かつ多様化しており、図書館サービスはその要求への対応が求められている。しかし、各図書館が自館の蔵書だけで利用者のニーズを満たすことは不可能であり、図書館間の相互協力に依存せざるをえず、ILL(相互貸借)サービスが果たす役割は大きくなっている。三田メディアセンターでは、1997年4月、相互貸借担当の独立した部署が発足し、1999年6月には相互協力担当と名称を変え、業務の集中処理とサービス向上をめざしている。本稿では、三田メディアセンターにおけるILLサービスについての報告と、今後の展望を述べたい。

2.ILLサービスの現状

2.1. 業務内容

三田メディアセンター(以下、三田)の相互協力担当は、国内外の現物貸借および文献複写の受付業務(以下、IN)と依頼業務(以下、OUT)を行っており、専従スタッフは専任1名、嘱託1名、学生嘱託1名、業務委託職員3名で構成されている。INについては、受付、資料の出納までを相互協力担当で行い、複写、発送、料金の管理を外部業者へ業務委託している。またOUTは、塾外への申込みは、まずレファレンス担当で受け付けし、典拠確認および所蔵調査をした後、依頼から到着物引き渡し、料金受領までの処理を相互協力担当で行っている。そして利用者から徴収した料金は、総務担当に引き渡し、所蔵館への支払いを行う、という流れになっている。

2.2. 件数

ILLの実績を数字で見ると、1998年度はIN約8,300件、OUTは約10,000件で、件数は年々増加しており、特にOUTの伸びが著しい(図1、2参照)。1998年度の処理件数の内訳(図3、4)は、INは塾外からの複写依頼が全体の半分以上であるのに対し、OUTは塾内現物が一番多く、塾内他地区メディア

センター(以下、他地区)と早稲田大学図書館(以下、早大)への依頼で全体の65%を占めている。早大からは図書の取り寄せのほか、塾内と同様1枚10円で文献複写の取り寄せができるから、蔵書の規模や構成を考えても、塾内、早大間のILLがきわめて多いのは当然といえよう。

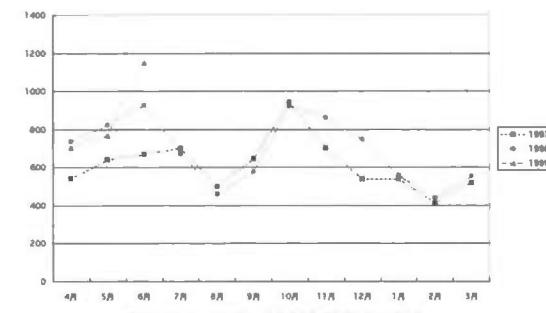


図1>ILL-IN(=受付)件数(三田)

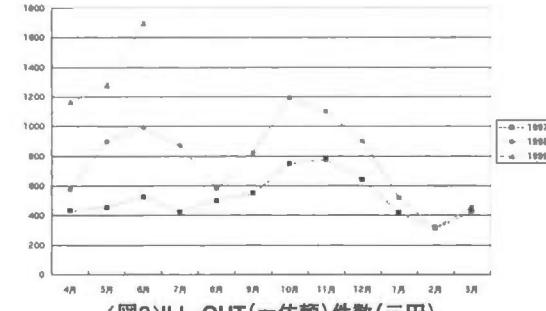


図2>ILL-OUT(=依頼)件数(三田)

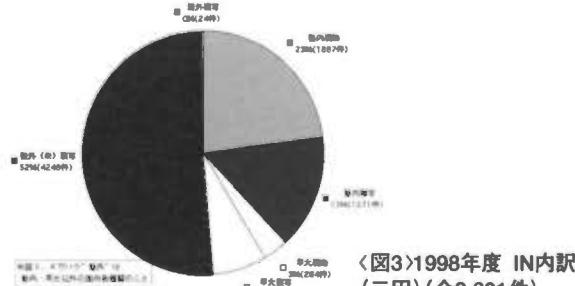


図3>1998年度 IN内訳 (Mita) (全8,301件)

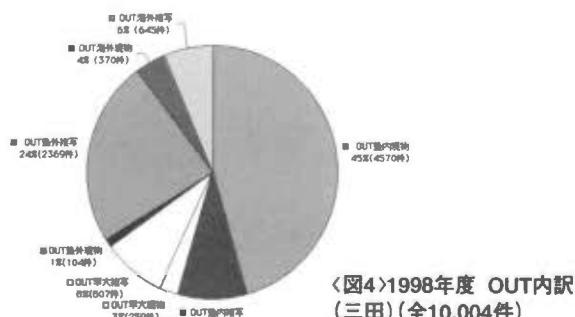
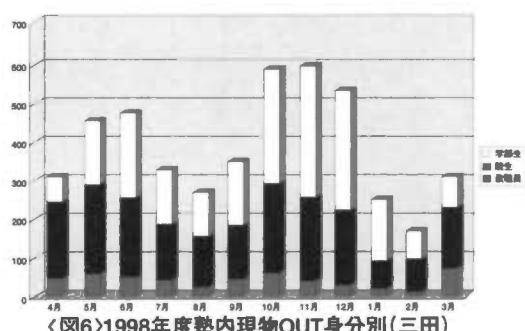
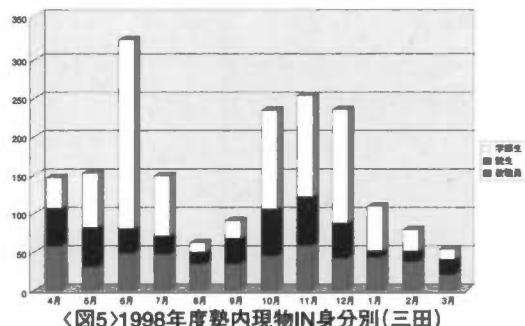


図4>1998年度 OUT内訳 (Mita) (全10,004件)

ILL件数増加の要因はいくつか考えられるが、OUTでは第一に、1999年3月の白楽サテライト・ライブラリー(以下、白楽)のオープンが挙げられる。そのほかには、学部学生(以下、学部生)へのサービス拡大にともなう利用者数の増加も大きな要因であろう。実際に塾内現物ILLの利用者を所属別に見てみると(図5、6)，全般的に学部生の利用が多いことがわかる。



2.3. 新しいサービスとサービスの変遷

1999年3月より、OUTのサービス向上をめざし、新館1階メインカウンター内にILL窓口を設置した。ILL窓口は、塾内ILL申込みの受け付け、国内外の到着物の引き渡しを行うほか、ILLに関する問い合わせの窓口としても機能している。このことにより、特に塾内ILLに関しては、申込み受け付けから引き渡しまで一貫して同一担当内で行われることとなり、問い合わせにも迅速な対応をとることができるようにになった。

また、同年3月にオープンした白楽は、三田と山中資料センターから移管された約24万冊の資料が所蔵されており、オープン直後からILLの申込みが多く寄せられている。白楽の資料については、利用者から申込みを受けた翌開館日夕方には提供できるよう、特に迅速な対応をとっている。

1999年6月より“貸出中”や“予約中”“移動中”など、“在架”以外の状態の他地区資料も取り寄せられ

る(申込みを受け付ける)ようにした。また、1999年度から、長期休業期間中に限り、所属地区以外でもILLの申込みができることになった。これは、例えば日吉近辺に住んでいる三田の学生が、夏休み期間中、自宅近くの日吉メディアセンターで、湘南藤沢メディアセンターの図書の取り寄せができる、というサービスである。

表1で見るとおり、特に1997年以降、IN、OUTとも学部生に対するサービスが広げられてきており、塾内や早大の複写料金の値下げもともない、それまでは大学院生(以下、院生)以上の研究者を対象とした限定されたサービスであったILLが、より開かれたものとなってきたと言える。

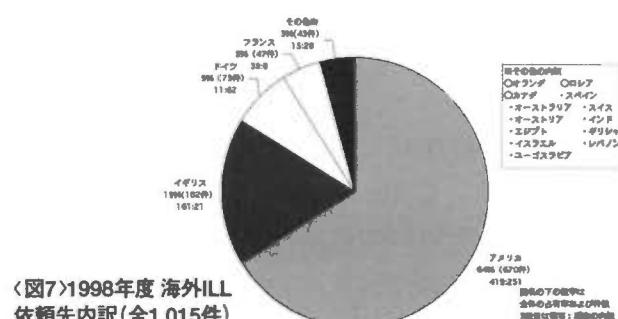
表1 三田における近年のILLサービスの変遷

1993年4月	相互貸借の担当部署を新設
1994年4月	文献複写INの複写、発送業務を外部業者へ委託
1996年7月	院生の塾内現物取り寄せサービス開始
9月	文献複写の申込をレファレンスだけでなく、3・4階カウンターでも受付
1997年3月	NACSIS-ILL開始
4月	相互貸借担当の部署が独立(当初のスタッフは3名、5月より業務委託職員が就任)
5月	塾内複写料金を1枚30円から10円に改訂
6月	学部生の塾内文献複写取り寄せサービス開始
	学部生の早大複写取り寄せサービス開始
7月	学部生の塾内現物取り寄せサービス開始
8月	早大複写料金を1枚30円から10円に改訂
	NACSIS-ILLによるBLDSOからの申込開始
1998年5月	学部生の23区内文献複写取り寄せサービス開始
	学部図書の学部生への塾内ILL解禁
1999年3月	白楽サテライトライブラリー開館により、白楽からの取り寄せサービス開始
4月	メインカウンター内にILL窓口設置
	OCLC-ILLによる塾外ILL申込開始
	他地区“在庫”以外の現物取り寄せサービス開始
6月	E-mailでの塾内現物到着の連絡開始(登録者のみ)
7月	所属地区以外でもILL申込可とする(休業期間のみ)

2.4. 海外とのILL

三田は海外とのILLが多く、1998年度の件数は約1,000件であった。そのほとんどはOUTであり、INは月に数件程度で、その内容は現物貸借希望が多い。三田では現物の貸出を行っていないため、複写物を送付したり、他の国内所蔵館を調べて転送するなど、できる限りの対応をしている。

OUTについて言えば、三田では英語以外にも様々な言語で書かれた資料の依頼をしており、それも現物借用が多いこと、出版年の古い資料の依頼が多いことが特徴である。依頼先はアメリカが圧倒的に多く、次いでイギリス、ドイツ、フランスとなっている(図7参照)。



相互協力担当では、1999年4月より、OCLC-ILLによる海外ILL申込みを開始し、NACSIS-ILLによるBLDSCへの依頼に加えて、オンラインで海外と結ばれることになった。OCLC-ILL参加館はアメリカに多いため、OCLC-ILLの導入により、大半の依頼について、文献入手までにかかる日数の短縮が実現している。また導入のもう一つのメリットとして、IFM(=ILL Free Management)¹⁾を利用するこにより、代理店を通じて日本円での支払いが可能となったことが挙げられる。これまででは、先方の請求書に従い、外貨で支払いを行う必要があり、その手続きを利用者自身に行ってもらっていたため、非常に煩雑であった支払いの流れがこれによりスムーズになった。しかし、この支払い方法にも問題点はある、また、申込み時に書類や典拠を添付して送ることができないことや、2ヶ所から同一文献が届いてしまったなど、オンラインゆえの問題点があるのも事実である。その上、NACSIS-ILLとOCLC-ILL以外の依頼パターンがほかにも多数あるため、それらの方法をいかに効率的に行うかを考えいかなければならぬ。電子メールやFAXによる依頼方法を確立し、支払いについてはIFLAバウチャー²⁾導入やクレジット・カードでの決済など、様々な観點から海外ILL業務の効率化、迅速化に向けての見直しが必要であろう。

一方、海外とのILLの中で発生したトラブルの処理は、なかなか厄介である。トラブルの内容は、単純なミスコピーもあれば、複写を申し込んだのに現物が届いてしまった(あるいはその逆)、移動中の事故(紛失、破損など)、金銭上のトラブルなど様々である。そしてその度に事情を説明する手紙を英文で作成し、連絡先を調べて送付するという作業は手間がかかり、回答を受け取るまでにかなりの時間を要する場合が多い。英語以外の言語の読み書き能力が必要となる場合もあり、業務における語学力の必要性は大である。

3. 現状の問題点

3.1. 業務の切り分け

現在、OUTの業務は、塾内ILLはILL窓口、その他塾外への申込みはレファレンス担当で受け付けている。そして、塾内から取り寄せた図書の提供は閲

覧担当(メインカウンター)で行い、複写料金の管理は総務担当で行っている。ILL処理の流れの中で他部署が行っている業務があり、責任の所在が曖昧なことがある。利用者、また相手館からの問い合わせに迅速に対応するためにも、関連部署との業務の切り分けを適切かつ明確にし、また常に連携を保っていく必要があろう。

一方、相互協力担当内では、OUT部分で国内/海外の担当者を決めているが、IN/OUTの切り分けはしておらず、毎日の業務の進行状況を見ながらINとOUTをバランスよくこなしているという状態である。しかし、ILL窓口設置により、OUT部分の負担が増え、INの業務に多少の遅れが出てしまうため、他部署との関係も含めて、より効率的なスタッフの配置と運用を考える必要がある。

3.2. 所蔵確認、典拠確認

慶應(特に三田)の全蔵書を検索するには、複数の目録を横断的に調べる必要があること、また典拠確認の必要があることから、塾外へ依頼を出す場合、レファレンス担当で受け付け、利用指導と書誌、所蔵の確認を行っている。

依頼先の負担を考慮し、自館で行うべき調査はしっかりと行うのがILLの基本であることは言うまでもないが、利用者にも私達スタッフにも調べやすい目録を整備することは大前提であり、利用者自身に調べ方を覚えてもらうこと、典拠を明確にもらうことも重要である。

4. 今後の課題と展望

4.1. 他大学との現物貸借

現在、三田と正式に現物貸借を行っているのは、塾内と早大間のみである。しかし、近々予定しているNACSISへの所蔵データの一括登録に合わせて、NACSIS-ILLを使った現物貸借のサービスを開始しようと、現在貸出案を検討中である。

他大学への貸出は、三田の規模から考えると、ギブアンドテイクの相互貸借にはならない可能性があることは否定できないが、他大学へ貸出を行うことによって、借用の可能性も高まり、ひいては図書館界の活性化につながると考えている。

他大学への貸出を開始すれば、国内の大学のみならず、海外からの依頼が来ることは必至であろう。

国内実施後、海外への現物貸出に向けて検討する予定である。

4.2. ドキュメント・デリバリー・システムの構築

文献複写は、オンラインやFAXによる依頼により、以前に比べて入手までの時間が短縮されてきている。しかし、一次資料をコピー機で複写し郵送で提供、という紙媒体の流通が依然として主流であり、この送付方法の見直しが今後の課題であると言えるだろう。

文献をスキャナで読み込んで画像データ化し、それを電子的に伝送する方法は、既に米国を中心に各国で行なわれているが、三田でも、1999年度中に、日米ラウンドテーブル・パイロット計画³の一環として、ミノルタのEPICWINを使って、国内外の数館との送受信テストを開始する予定である。

同時に、1999年3月より、全塾ドキュメント・デリバリー・システム・ワーキング・グループが発足し、塾内の文献複写処理の迅速化、効率化について検討中である。文献の検索、複写の依頼/受付、送受信までの過程を一連の流れで可能とするシステムの構築が最終目標であるが、少なくとも文献の送受信を電子的に行うことによって、入手までの時間短縮が期待できる。

ただし、ドキュメント・デリバリーを考える上で、著作権の問題は十分留意しなければならない。

4.3. 塾内現物のどこでも返却

他地区の図書を直接借りに行った場合、返却は借りたところで行う、というルールがあり、利用者は返却のためにもう一度所蔵館へ出向かなければならぬ。ILLで取り寄せても、直接来館して借りても、貸出手続きした場所に関係なく、どこででも返却が可能になれば、利用者にとっても便利であり、図書の延滞も減る可能性が高い。しかし、そうすると、返却を受けた館と所蔵館双方に業務負荷がかかることや、資料の性質から運搬に適さずILL不可となっている資料(三田では、大型本や準貴重書、他地区の雑誌など)の対応の問題があり、現在問題解決に向けて検討中である。

4.4. OUTデータの分析

どのような文献がILLで利用されているかなど、過去のILL業務の記録を分析することにより、慶應全体の蔵書構築や、雑誌の継続購入の見直しをはか

るためのデータとなる。また、研究者の研究動向を知る上でも有効なため、検討中である。

5. おわりに

短時間で、利用者の満足する文献入手し、それを低コストに押さえる、というのが、ILLの究極の目標である。質を高めていく一方で、より多くの利用者にサービスを提供できるように考えていく必要性も感じており、今後もサービス拡充のために、様々な問題を検討していくなければならない。

注

- 1) <http://www.oclc.org/oclc/menu/ILL.htm>
- 2) http://www.ifla.org/VI-2_p1_vouchers.htm
- 3) <http://wwwsoc.nacsis.ac.jp/anul/kisoku-roundtable/>

参考文献

- 1) 佐藤裕子.“ILL業務の新たな展開”. MEDIANET. No.1, 1993, p.45-46
- 2) 大原寿人.“Arielを中心としたドキュメント・デリバリーシステムの開発”. 情報の科学と技術. Vol.47, No.10, 1997, p.516
- 3) 大野優子ほか.“海外のエレクトロニック・ドキュメント・デリバリー・サービスの比較”. 情報の科学と技術. Vol.47, No.10, 1997, p.509
- 4) 黒澤節男.“ILLと著作権”. 情報の科学と技術. Vol.49, No.8, 1999, p.399-404
- 5) 篠島智子.“相互協力業務の実態と分析 - 中部大学附属三浦記念図書館の事例を中心に”. 館灯(私立大学図書館協会東海地区研究会). No.36, 1997, P.12-23

スタッフルーム

システムエンジニア(SE)残酷物語

たなべ
田邊 稔

(メディアセンター本部)

システム開発の仕事は、何かとプレッシャーの多い仕事である。ユーザからの無理な要望→受注優先の上司命令→「何でもやります営業」による受注→無理なスケジュール→突貫工事で作るシステム→バグが多発→「納期に間に合わない・品質悪い」状態→ユーザの怒り爆発→謝りに行くが、納期は延ばせない→マンパワーと開発マシンをさらに投入→赤字発生・コントロール不能→徹夜作業・土日なし→開発担当者の志気低下→サービス開始すれど、評価は低い。やくざのようなお客様に怒鳴りこまれることもしばしばあり、下手をすれば新聞沙汰になり、対応に追われさらに忙しく……という悪循環が繰り返される。そのたびに不幸な人が増えていく。

勿論、こんなシステムばかりではないが、情報システム業界ではよくある話である。「35歳定年説」はあながち嘘ではなさそうだ。

「リフレッシュ」、つまりどうガス抜きするかが良い仕事を行う上で重要なポイントとなる。ガス抜きのできないSEは、ストレスに耐え切れず、志半ばで倒れてしまう。胃に穴が空いたり、円形脱毛症になってしまう人に始まり、夜中に倒れて救急車で運ばれる人、出社拒否症になってしまう人、ゾンビのようになって話しかけても返事すらできなくなってしまう人、逆切れして上司を殴ってしまう人、自分の親の名前すら忘れてしまう人、自分の結婚式に出席できなかった人……私はこれまでいろいろな不幸なSEを見てきた。「人を憎んで仕事を憎まず」、「信じるものは裏切られる」を合言葉に「誰が一番悲惨か?」の話題でよく盛り上がった。

それでもみんな辞めることなく働き続けた。と言うより、辞める体力・気力すら奪われてしまっていたと言った方が正確かも知れない。無論、家のローンを抱えていて辞められない人も多いし、人道的に途中で逃げ出す訳に行かない事情もある。私も、一時期約50名の開発人員を抱えるシステムのリーダを担っていたが、仕様管理・品質管理・外注管理等すべてのコントロールを行っていたので途中で投げ出す訳には

いかなかった。

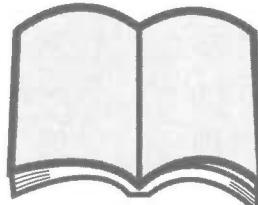
通常、仕事というのは、山あり谷ありで、1年中忙しい状態というのはありえない。繁忙期と閑散期があり、休みがあるからリフレッシュができる、次にいい仕事ができるのであって、1年中忙しいと、まさに「伸び切ったゴム」のようになり、後はいつゴムが切れるかを待つばかりの状態となってしまい、もはや人間らしい生活など送れない。

システム開発の仕事はまた、実に達成感の得にくい仕事だ。その原因の1つに、ソフトウェアというのは、そもそも目に見えにくいもので、周りから見ると、その目に見えないものを

作っているSEの作業はさらに見えないから、なかなか評価しづらいことがある。しかも、成功して当たり前、失敗したらボロクソの世界だから、なおさらである。成果に対してお金やステータスを求める人もいるとは思うが、「ご苦労様」とか「システム化して楽になった」といった一言でSEがどれだけ救われることか。「評価」は次への原動力につながる。

私にとって慶應義塾への転職は1つのリフレッシュになった。自分の将来像が見えてしまって、モチベーションが切れかかっていたときに日経新聞の日曜版に(学校法人)慶應義塾の求人広告を見つけた。気づいたら、履歴書と職務経歴書にペンを走らせていた。書類は提出したもののが就職活動を行うのは至難の業であった。徹夜明けで受けた筆記試験、仕事の途中抜け出して受けた面接。だめだと思っていたら、内定通知が来た。一昨年の12月のことである。慶應義塾の文化、三田の文化、図書館の文化等今までとは全く違う文化、違う業種の人達に触れることができたことは私にとって新鮮だった。

配属されたデータベースメディア担当の仕事は、SEに加えてCE(カスタマ・エンジニア)的要素も強い。約2割~3割はガテン系の肉体労働である。「どこに行ってもシステム担当は一緒だよ」という声の大きい酒好きな上司の言葉に戸惑いながらも、自分のモチベーションをいかに盛り上げて行くかを模索する今日この頃である。



日吉メディアセンターにおける インターネット・エリアの開設

さかい ゆきこ
酒井由紀子

(日吉メディアセンター係主任)

きのした かずひこ
木下 和彦

(日吉メディアセンター係主任)

はじめに

慶應義塾大学日吉メディアセンターでは、1999年4月2日、図書館内3個所にインターネット・エリアを開設した。ここには計101台のパソコンが設置され、学生がいつでも自由に使用することができる。このインターネット・エリアは、日吉キャンパスで逼迫しているパソコンへの利用要求を充足させるとともに、コンピュータスキルを前提とした、情報リテラシーの習得、実践の場を提供するものである。

本稿では、このサービス開始に至る経緯、サービス概要、現在の運用状況を報告し、課題を考え、今後のサービス発展に資することを目指す。

1. 経緯

1.1. 日吉キャンパスにおける情報処理教育

慶應義塾大学日吉キャンパスは、文学部、経済学部、法学部、商学部、医学部、理工学部の1、2年生約11,000名が通う「若いキャンパス」である。大学生として学習・研究に必要なコンピュータ技術を身につけるための情報処理教育科目は当初、各学部のカリキュラム外で行われていたが、現在ではカリキュラム内の必修または選択科目と位置づけられるに至っている。また、授業の前段階の機会としては、情報システムサービス担当(当時、1999年2月以降は日吉インフォメーションテクノロジーセンター。以下同じ)が利用説明会や、新入生を対象とした「コンピュータの使い方セミナー」を開催している。

1.2. 日吉メディアセンターにおける情報リテラシー教育

日吉メディアセンターでは、1997年よりILP(Information Literacy Project)を立ち上げ、その成



果をあげつつある¹⁾。これは「情報をその発生・流通・蓄積・利用という社会的文脈で捉えつつ、情報探索プロセスに関する知識と技術を持って、情報を批判的に分析・評価・表現する能力」(情報リテラシー)を、日吉キャンパスに在籍するすべての学生に身につけてもらうことを最終目的として行われているものである。

プロジェクトの中心を成すのは、図書館員がそれぞれの分野(学部)に特有な情報探索プロセスや情報源を紹介する授業であり、協力を得られた3学部の指定された講義の1回分を借りておこなっている。この授業で紹介している情報探索プロセスや情報源として、データベースなどのデジタル資料は次第に欠かせないものになってきており、これらを利用するためにも、基本的なコンピュータスキル(コンピュータリテラシー)の習得は欠かすことのできない要件となっている。

1.3. デジタルキャンパス構想と施設拡充の必要性

日吉メディアセンターでは、情報システムサービス担当が、情報処理関連科目のために使用することを主たる目的とした「パソコン室」を優先して整備していた。しかし講義の増加により、これらの部屋は

常に授業で使用されるようになったため、自習などにはほとんど使用できなくなってきた(表1)。一方で、電子メールによるコミュニケーションやWWWブラウザを利用した幅広い情報収集が、学術利用のみならず、日常生活にとってもますます欠かせないものとなっている。こうした事情から、学生生活の基盤として、インターネットにアクセスできるパソコン利用環境を拡充することが急務となつた。

学生にネットワーク環境を提供する手法はいくつか考えられる。

- 1) キャンパス内 - 設置パソコン、貸出パソコン、学生所有パソコンのLAN接続
- 2) キャンパス外 - 自宅などからのPPP接続によるネットワーク利用

日吉キャンパスにおいては、コンピュータリテラシーの浸透度からみて、まず、設置パソコンの増設が優先された。コンピュータを使い始めたばかりの学生にとっては、設置パソコンは、ネットワークの設定などの必要がなく、同一のインターフェースで利用できるメリットがあるからである。高まる利用要求に応えるため、自由利用のできる教室も増設された(1998年10月にJ12教室、1999年4月にJ13教室)。これらの教室は、開設されるやいなや常に満席の盛況ぶりとなつた。

同時に次の段階として多様な利用形態を提供するため、1998年11月より、図書館内において、無線LAN装置を装着した貸出パソコンの実験運用も開

始している。貸出パソコン、学生所有パソコンのLAN接続利用については、大・小の教室群に情報コンセントが設置され(1,290口、1999年9月現在)、運用体制の検討が始められている。

1.4. 図書館におけるコンピュータ利用

日吉メディアセンター(図書館)内では、インターネット・エリアが開設されるまで、学生が利用できるコンピュータは、OPAC(オンライン目録)専用機20台とCD-ROM検索用パソコン(スタンダロン)9台のみで、これらは図書館内の資料を利用するための機器でしかなかった。図書館がその任務とする情報サービスは、すでに館内の資料だけでは十分ではなく、外部のネットワーク上の情報源や情報ツールをも積極的に取り入れる必要があった。一方、学生は、コンピュータスキルの向上に伴い、技術的には自らそれらのサイトにアクセスできるようになりつつあったが、レポートの作成など、情報の収集から発信までといった応用の場において、そのノウハウを得る機会はまだ少なかった。おりしも図書館では、目録データの遡及入力終了に伴い、目録カードボックスが撤去できる見込となつた。その跡地にインターネットが利用できるパソコンを設置し、応用的な情報リテラシーの学習、実践の場とするという構想が登場したのである。

2. 開設までの体制

開設に向けて動き始めたのは1998年も終盤にさしかかった11月のことであった。インターネット・エリア開設のためのワーキンググループ(以下WG)は、この月に発足した。WGのメンバーは、日吉メディアセンター内の関係各部署(総務担当、資料サービス担当、情報メディアサービス担当、パソコン・ネットワーク担当、情報システムサービス担当:いずれも名称は当時)から構成され

表1 パソコン利用環境と台数一覧

名称	場所	PC台数	利用形態
計算室ロビー	第7校舎地階	26	常時利用可
702 教室	第7校舎地階	36	常時利用可
703 教室	第7校舎地階	50	授業時利用不可
704 教室	第7校舎地階	100	授業時利用不可
710 教室	第7校舎横	30	授業時利用不可
F01 教室	藤山記念館地階	120	授業時利用不可
F11 教室	藤山記念館中2階	78	授業時利用不可
641 教室	第6校舎4階	105	(*)
J12 教室	第4校舎1階	101	常時利用可
J13 教室(**)	第4校舎1階	102	常時利用可
インターネットエリア(**)	図書館1~2階	101	常時利用可
合計台数		849	(常時利用可は366)

(*)641教室は、通常は普通教室として使用。授業で必要時のみパソコン利用可能。

(**)J13教室、インターネットエリアは1999年4月に開設。

た。これは、開設に際しての検討項目が、設置場所、機器構成、什器・設備の選定、ネットワーク敷設・管理、設置後の運用体制など、多岐に渡るためであった。

WGでの検討結果については次章以降で触れるが、急務であったのは、機器および什器・設備の選定であった。そのためWG発足間もない1998年12月に、基本的なハードウェアの要件ならびに台数について、競争入札のための業者説明会をおこなった。これには、機器について3社、什器について4社の参加があった。説明会が12月中旬、見積り提出期限が1999年1月初旬、最終的な業者決定が2月、工事が3月という過密なスケジュールではあったが、なんとか4月のオープンに漕ぎ着けることができた。この場を借りて関係各位に改めて御礼申し上げたい。

3. 基本コンセプトと名称

インターネット・エリアの基本コンセプトは1.4でも述べたように、「インターネットが利用できるパソコンを設置し、応用的な情報リテラシーの実践、学習の場」とすることである。これは、図書館におけるコンピュータ利用の広がりとも深く関係すると同時に、今後の日吉メディアセンターの新たなサービスの方向性を打ち出すものである。

このコンセプトのもとに、インターネット・エリアを予定していた3箇所の各々の性格付けをおこなった。検討に際しては、トロント大学をはじめとする、海外の大学図書館における同様のサービス事例や、また義務ですすめられている「提案プロジェクト」のうち、「デジタルキャンパス」グループで研究されていた、教室の機能別にみたタイプ分け、といった事項などを参考にした。その結果、以下のような性格を持たせることとなった。

1) インターネット・トレーニング・ゾーン

目録ボックス跡地に開設。この場所は、レファレンスデスクの前でもあることから、ネットワークを介して利用できる各種データベースやインターネットを用いた情報収集について、レファレンス担当者の指導も受けられるスペースと位置づける。図書館主催の各種のセミナーもここでおこなうこととした。OPAC(図書館の蔵書検索システム)も、ここに

設置する。

(設置機器：デスクトップパソコン14台、OPAC専用機18台、CD-ROM専用機6台)

2) インターネット・クイック・ゾーン

1階出入口脇に開設。ハイテーブル、ハイチェアを置き、ノートブックパソコンはここにのみ設置した。名前が示す通り、短時間の利用を前提とする、ちょっとした電子メールのやりとりや、ネットワークを用いた情報収集のためのスペースと位置づける。

(設置機器：デスクトップパソコン17台、ノートブックパソコン24台)

3) インターネット・エリア

2階東閲覧室に開設。総称と同じ名称となっているが、本来のコンセプトの使い方である。コンピュータリテラシーと情報リテラシーを習得した者のためのスペースと位置づけたことによる。

(設置機器：デスクトップパソコン46台)

4. 機器構成

コンセプトや性格付けとは別に、1.3で触れたように、キャンパス内設置パソコン増設への貢献も、このエリア開設の大きな意義の一つである。そのため、このエリア内になるべく多くのパソコン機器を設置することを目指した。従来の席数や、パソコン設置のために必要なスペースなどから、3エリアあわせて100台という数値を算出した(OPAC専用機、CD-ROM専用機は除く)

限られたスペースをいかに活用するか、という課題を解決するために考えられたのは、当時出始めた“省スペース型”パソコンと、ノート型パソコンの導入である。特に省スペース型パソコンは、液晶ディスプレイを用いることで、ノート型パソコンと比べても遜色のないスペースで設置できるという長所があった。これらを、後述する設備什器とうまく組み合わせることにより100台という目標値を達成することができた。

また、機器に要求されるスペックも重要である。予算等の関係から、一度導入すれば、数年間は機器を置きかえることは難しいが、一方、パソコンのスペックは俗に言われるように“秒進分歩”で向上して

いく。機器に搭載されるソフトウェアは、利便性などの面からも、すでにパソコン室などで提供しているものと同等にしておく必要があるため、これを実現し、かつ数年の間ソフトウェアの更新に対応できるだけのスペックを考える必要があった(表2)。これに加えて、当初は予定していなかったが、後述する運用の関係から、サーバ側からクライアントをまとめて自動的にシャットダウンする機能も必要とされた。

5. 設備、什器

3個所あわせて100台という機器を収納するためには、レイアウトも重要な役割を果たす。そのレイアウトを実現するための什器の選定も、意外と時間を要した。机上には、パソコンだけでなく、ノート等を広げるスペースを確保したい。一方、通路スペースも十分に確保したいということがあり、限られたスペースを十分に活かすサイズの什器の有無が、レイアウトに如実に反映されるからである。一部のテーブルは、スペースの有効利用のために特注した。加えて、そうしたレイアウトやデザインは、このスペースがメディアセンターにおける新しい試みであることを、アピールできるものでなければならなかつた。

什器納入業者が決定した後も、このレイアウトやデザインについては、頻繁に打ち合わせをおこなつた。インターネット・クイック・ゾーンにおけるハイテーブルの採用は、この経緯で決定されたものである。

6. 運用体制

エリア開設後の運用体制は、学生による利用状況が読めないだけに、一番不安が大きかった。その一因として、ネットワーク環境の利用に精通した図書館スタッフが少なかったことがあげられる。そのため、利用サポート体制として、実際にそれを使用している学生アルバイトからなるインターネット・エリア相談員を雇用した。

また閉館時には、忙しい閉館業務と並行して100台からなるパソコンの電源を確認する必要があった。この労力軽減のために、サーバのタイマー監視による、自動ON/OFFを実現させた。(ただし、

ノートパソコン(24台)についてはこの機能がないため、人手によりおこなっている)

ソフトウェアのトラブルについては、前述の相談員が対応するが、ハードウェア部分については、パソコン・ネットワーク担当(現デジタル環境担当)が対応している。いずれもネットワークの根幹に関わる問題については、情報システムサービス担当と密接に連絡を取り合う体制をとった。また包括的な運用体制の検討については、WGを発展させた、デジタル環境ワーキンググループでおこなっている。

7. 現状とこれから課題

開設当初から、インターネット・エリアは学生に大変好評で、学期期間中はほぼ終日満席状態である。しかも開設前に憂慮していたような、騒音や席の終日占拠などの問題も起こらず、今までのところはよい状態で推移している。

今後の課題としては、次のようなことがあげられるだろう。

1) 情報リテラシーのグレードアップ

現在のインターネット・エリアの利用状況を見ていると、電子メールの利用やWWWで趣味的な情報を得るなど、当初のコンセプトである「情報リテラシーの応用的な実践・学習の場」としては、まだまだ機能していないといえる。ILPの情報リテラシー講義との一層の連携や、ホームページを活用した広報活動をはじめとする、学生へのアピールが必要と考えている。

2) より高度な情報サービスの提供と図書館員のスキルアップ

ネットワーク環境が整備されるにつれ、これを活用したデータベースや電子ジャーナルなどの提供が、今まで以上にメディアセンターのサービスとして重要になる(1)ともあわせ、これらを推進するためには、図書館員自身がネットワークを活用した情報リテラシーの習得や、関連情報の収集について、より貪欲になることが求められる。

3) 機器の増設

インターネット・エリアとは別に、今春、大教室の一つもパソコン教室(J13教室)とし

て改裝されるなど、日吉キャンパスにおけるコンピュータ環境は次第に改善されている。それでもキャンパス全体のパソコンの台数は、学生数の約1割に過ぎない。今後も機器の増設が望まれるが、設置スペースの問題やキャンパス全体での計画、また5キャンパス相互の格差を解消する全体計画との関係も考慮する必要がある。

増設に際しては、すでに行われている3種類の手段(1.3参照)とは別に、貸出パソコン制度の新設や、学生のパソコン保有率を高めるために推奨パソコン制度を導入することも検討に値するだろう。メディアセンターのみならず、日吉キャンパス全体として、これらをどのように位置付け、どのように計画的に設置していくかが問題である。

8. おわりに

書物もコンピュータも、情報サービスの手段であり対象である、という観点から、図書館と計算室を統合し、1993年に「メディアセンター」は発足した。発足当初のコンピュータを用いた情報サービスは、CD-ROMやオンラインデータベースなど、カウンターにこななければ利用できないものが中心であったが、このインターネット・エリアの開設により、「開架資料」と同様に、学生が自由にコンピュータを用いて情報収集をおこなうことが可能になった。

今後はこの環境の維持につとめると同時に、情報リテラシーをより高度化するために、メディアセンターは積極的なサービスの提案、実現に努めなければならない。

参考文献

- 1) 平尾行蔵ほか、"大規模大学の1~2年生に対する情報リテラシー教育とメディアセンター"、大学図書館研究、No.54、1998、p.33~42

表2 搭載ソフトウェアと要求ハードウェアスペック

搭載ソフトウェア

名称	用途
MS WindowsNT 4.0	OS
MS-Office97 Pro	統合事務アプリケーション
SPSS 8.0	統計解析
Mathematica 3.0	数的処理、図表作成
Visual Basic 6.0	プログラム開発
Visual C++ 6.0	プログラム開発
Internet Explorer 4.01	Web ブラウザ
Netscape Navigator 4.04	Web ブラウザ
Becky!	電子メール
AL-Mail	電子メール
WinVN	ニュースリーダー
Outlook Express	電子メール、ニュースリーダー等
WSftp LE	ファイル転送
TeraTerm+SSH	リモートアクセス(telnet)
Lhasa	ファイル解凍
弥生	ファイル圧縮

要求ハードウェアスペック

デスクトップ型(省スペース型デスクトップ DOS/V 互換機)

CPU	Pentium II 300MHz または同等
メモリ	128MB
HDD	4GB
ネットワーク	10Base-T、100Base-TX 対応

ノート型(A4ノート型 DOS/V 互換機)

CPU	Pentium II 233MHz または同等
メモリ	80MB 以上
HDD	4GB 程度
ネットワーク	10Base-T、100Base-TX 対応。内蔵型が望ましい。
ディスプレイ	XGA 以上
その他	セキュリティーチェーン取り付け口のあること

医学メディアセンターにおける電子ジャーナル導入実験

いちご
市古みどり

(医学メディアセンター課長代理)

はじめに

1999年度洋雑誌の購読契約は、雑誌価格の値上がりおよび為替の変動により、これまでの雑誌数を維持することが困難となり、160種の継続中止を決定した。一度に100誌以上の継続中止を行ったことは過去にも経験がなく、また、今後も現在の雑誌数を維持することが難しくなることが想され、対応策の検討が課題として残された。こうした状況は、医学メディアセンターだけでなく、理工学メディアセンターにおいてはさらに深刻な問題となっていた。メディアセンター本部にもこの問題の大きさが認識され、1998年度末より対策の一つとして電子ジャーナルの導入が検討され、1999年度よりProQuest¹、IDEAL²、ADONIS³の実験的導入が段階的に行われることになった。これらの運用に関する調整は、全塾データベース委員会にて行われ、プロバイダや代理店との連絡、メンテナンスは、メディアセンター本部のデータベースメディア担当者によって行われている。

文献検索と電子ジャーナル

医学メディアセンターの利用者にとって最も重要なデータベースの一つであるMEDLINEは、米国立医学図書館(NLM)が無料で提供しているPubMed、Grateful Med、理工学メディアセンターで管理されてきたOVIDシステムによるもの、FirstSearchによるものなどさまざまな方法で利用が可能である。さらに今回のこの実験においては、SilverPlatter社のネットワークシステムであるERL(Electronic Reference Library)、およびそのWeb版検索システムWebSPIRSを導入し、MEDLINEほかPsycLIT、MLAなどいくつかのデータベースが利用できることになった。データベースは各キャンパスの利用対象者を考慮してライセンス契約を結んでいるため、MEDLINEは1996年以降の範囲で、医

学部キャンパスからのみ利用可能となっている。

このERLにSilverLinkerという機能を加えることにより、データベース検索から、電子ジャーナルへリンクさせることができる。したがって、MEDLINE検索を行い、その書誌レコードに対応する電子ジャーナルが存在すると、検索結果の書誌レコード中にリンクボタンが現れ、それをクリックすることによって出版社のWebサーバ上の電子ジャーナルにアクセスすることができる。今回、実験を行うことになったIDEALはこの機能によって、1999年出版の文献が検索されると、デスクトップ上で抄録や全文を読むことができるほか、PDFファイルをダウンロードしたり印刷することができる。ただし、SilverLinker機能では、各電子ジャーナルの契約範囲とは関係なくリンクボタンが表示されてしまうため、利用者に混乱をきたす可能性がある。全文情報が得られない出版年へとリンクされる場合は、電子ジャーナルの契約にあるいくつかの制約事項を理解してもらう必要があるほか、契約年の範囲が短い場合はリンクボタンの表示を行わない方が良いかもしれません。

また、SilverPlatter社のHCU(Holding Conversion Utility)を利用することによって、文献検索結果表示画面に電子ジャーナルの利用が可能であるというメッセージを表示させ、さらに、各電子ジャーナルのコンテンツへリンクさせることができる。今回の実験ではこの技術を用いて、ADONISおよびProQuest Medical Libraryを利用できるようになっている。

利用者への広報とサービスのための調整

今回の実験では、最初に、ProQuest Medical Library、続いてIDEAL、最後にADONISの利用が可能となった。

各ジャーナルの利用法については、最初に図書館

員に対して業者による説明会が行われた。利用者に対しても、業者による説明会の開催を計画中であるが、ADONISの本格的利用開始が9月であり、さらに来年度もその他の電子ジャーナルを導入する計画があるため、それらのデモンストレーションを同時期に行うことによって、電子ジャーナルへの関心を高めたいと考えている。したがって、これまでのところ、利用者に対する広報は、当メディアセンターの広報誌である「きたさとニュース」での利用法の解説、アクセス方法や利用できるジャーナル、注意事項を記載した案内をカウンターに置くこと、医学メディアセンターホームページにも同様の内容を掲載すること、あるいは、電子ジャーナルで利用できる新着雑誌の貸出し手続きの際、または貸出し中の新着雑誌の予約でカウンターに訪れた際に紹介したり、個別に研究室へ利用法の説明に出向いたりして行っている。このように、利用者への広報はあまり積極的という状況ではないが、具体的に説明できる機会が得られた場合は非常に反応が大きく、便利さを理解してもらうことができる。今後予定している利用指導は、実際に使ってもらいながら説明を加えるという方法で行うよう計画中である。

一方、電子ジャーナルへのアクセスの方法は、電子ジャーナルの個々のタイトルからホームページへアクセスする方法、文献検索結果から論文へ導かれる方法、OPAC検索から電子ジャーナルのホームページへ導かれる方法など、いくつかの方法が考えられるため、図書館側としてさらなる調整が必要である。たとえば、理工学メディアセンターのホームページで維持されているようなアルファベット順リストを作成し、定期的な更新が必要かもしれない。しかし、同じようなリストを塾内で複数の担当者が時間をかけて維持していくのも得策ではない。全塾データベース委員会などが中心となり、ドキュメントリバリーシステムワーキンググループとも調整しながら、利用者の文献入手のパターンを把握して、電子ジャーナルへの入り口を整備する必要があろう。

評価と今後の展開

今回の電子ジャーナル導入実験は、理工学および医学メディアセンターの外国雑誌購読契約における

危機的な状況によって開始されたため、導入時において、どのパッケージや出版社の製品を選択するのかなどについて深く検討する時間がなかった。また、導入決定後にも、医学分野の電子ジャーナルの新しいサービスやパッケージが発表されるなど、明確な電子ジャーナルに対する取り組み方を決定することは困難な状況である。来年度の契約を目前にし、この報告を執筆している現在、継続契約の難しさに直面している。たとえば、IDEALの契約更新は、過去数年における慶應義塾大学の印刷体雑誌講読数によって査定される。契約が結ばれると、印刷体は75%引きという価格で提供されるが、継続契約を決定しなくてはならない時期が非常に早い上、決定の段階においても、印刷体の価格が提示されていない。また、必要なない雑誌もパッケージとして契約しなくてはならないといった問題が生じている。さらに、IDEALには今回契約したAcademic Press以外の出版社の雑誌も含まれるため、利用の際に混乱が生じたり、その他の出版社の雑誌も契約に含めたりする場合には、契約更新が複雑になる。

ProQuest Medical Libraryについては、その他の電子ジャーナルと比べて、図表が含まれない文献が多いこと、その印刷した場合の品質が劣っているといった問題がある。ADONISにおいては、文献1件あたりに課せられる料金が約10ドルから30ドルであり、利用料金が非常に高いという問題がある。

医学および理工学メディアセンターにおける雑誌の重要性はメディアネット全センターに理解されている。しかしながら、電子ジャーナルの将来性については不確定な要素が数多く存在しているほか、当センターは、図書館利用を慶應内に限らず、医学研究者に開放していること、あるいは、キャンパス内においても、ネットワーク環境を十分に利用できない利用者が存在することなど、現状では印刷体資料の継続を中止して、電子ジャーナルへと一本化することは不可能である。さらに、人文・社会科学をサポートする三田、教養課程をサポートする日吉、ネットワーク環境をフルに利用して新しい教育方法を進め、プロジェクトによって研究が推進される湘南藤沢キャンパスにおける、雑誌および電子ジャーナルに対する重要性は異なる。全塾データベース委員会はこうした状況をふまえ、各メディアセンター

独自に導入すべきもの、メディアネット全体で契約すべきものを選択しているが、各地区とも予算状況により調整は困難を極めている。各地区が、ある一定額をメディアネット全体として購入すべき電子ジャーナルに対して予算を確保する、メディアネット本部が電子ジャーナル契約のための予算を持つなどの措置が必要かもしれない。

出版社が提示するサービスに振り回されているという状態のままでは、今後の図書館サービスをより魅力的かつ発展的なものとすることはできない。予算やサービス提供に必要な人的資源を考慮したうえで、今後の電子ジャーナルに対する方針を確認し、各ジャーナルやパッケージの評価を行い、サービス体制を整え強化する必要がある。

おわりに

一般に、電子ジャーナルの導入においては、ネットワークなど情報インフラの整備状況、価格、契約方法、購読中止によるバックファイルの利用、バックファイルの量や永続性、また、機関内での予算区分、利用料金の請求、ファイルの形式とプラウザ、利用案内などが問題とされている。今回の実験において、これらの全てが問題として残され、電子ジャ

ーナルへの取り組みに対して評価を下す段階に至ってはいない。今後、電子ジャーナルを無視したサービスや蔵書構築は不可能であり、新しいパッケージの出現、新しい図書館間協力による電子ジャーナルの購入などを考えると、変化が大きい分野である。これらの動きに遅れることなく、よりよい方法でのサービスの提供を一時的ではなく継続して行って行きたい。

注

- 1) 米国Bell & Howell社が、学術雑誌記事や新聞記事情報を提供するサービス。医学メディアセンターではProQuest Medical Libraryを主に利用しており約200誌が提供されている。
- 2) 174誌のAcademic社の雑誌のほか、選択的に Saunders社、Churchill Livingston社のフルテキストが提供されている。
- 3) 医学関連の約800誌をファクシミリイメージとしてCD-ROMに収録した文献提供システム。論文1件を表示する毎に、PPCと呼ばれる著作権使用料金が課金される。
- 4) 10月に説明会を開催

メディアネットニュース

Web版蔵書検索サービスについて

1999年1月よりWeb版の蔵書検索サービスを開始しました。

1999年10月現在、KOSMOS II OPACを補助するものとして、三田・日吉・藤沢で受入れた中国語・韓国語・アラビア語・ロシア語などの資料を対象とした「特殊言語図書データベース」、三田キャンパスで1962年以前に受入れた資料を対象とした「旧分類和漢書データベース」「旧分類洋書データベース」があります。

詳しくはホームページの「慶應義塾の蔵書」のサイト(<http://catalog.lib.keio.ac.jp/>)をご覧ください。

白楽サテライト・ライブラリー利用案内

[所在地]

神奈川県横浜市神奈川区六角橋6-2-38
(東京通運株式会社 横浜支店ビル内3,4階)

[開館時間]

9:00-18:00(土16:00)

[休館日]

日曜日、国民の休日、慶應義塾の祝日、夏季・冬季・春季休業中の一定期間

[利用について]

利用できるのは塾在籍者及び塾員の方です。
塾外の方は所属機関発行の紹介状および身分証をお持ちの方に限ります。

ご希望の資料が貸出中の場合もありますので、あらかじめOPACや所属の図書館(室)を通して所蔵確認を行ってください。

[ILL(図書館間貸借)]

塾内：在籍者は既存規則の範囲で現物取寄せ、複写取寄せが可能です。

塾外：慶應義塾図書館ILL担当(三田キャンパス内)へお申込みください。

スタッフルーム

本屋巡りの楽しみ

かたざり
片桐 裕恵

(メディアセンター本部)

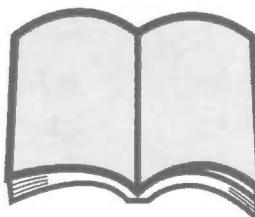
私は本屋に行くことが大好きである。本が好きなことも理由の一つではあるが、それだけではない。子どもの頃の事だが、デパートなどに親と買い物に行くと、本屋に置いていかれて、何時間も待っていた。その経験のせいかもしれないと思ふが、私の本好きはそれを補ってあまりあるものがあったようだ。とにかく本屋に連れて行けば、どこかへ行ってしまったり、泣いたりせずに、売り物の本を読み漁っている。親も本屋にあずけていく感覚だったに違いない。本屋にしてみれば、甚だ迷惑な家族である。今考えると、「あの子、また来ているよ」と思われていたかもしれない。しかし、そんな子ども時代の経験からか、今でも本屋はリラックスできる場所である。

本屋でリラックスできるというのは、案外便利なものだ。日本中、いや世界中どこに行っても本屋というものは存在する。本屋というのは、どこも大体同じような雰囲気を持つていて、本屋が好きな私としては入りやすい。そういったわけで、本屋を見つけてしまうと、ついつい中をのぞいてみたくなる。小学生の頃、長野の善光寺に家族で旅行に行ったとき、善光寺前の通りに本屋を見つけた。本屋で本を見ると言つて、親を困らせたことがある。高校時代、台湾へ行ったときには、本屋街を見つけてあちこち見て廻ってしまった。置いてある本はほとんど読めないものばかりだが、そんな中に「日本語学習教材」や、明らかに海賊版と思われる日本のマンガ本があつたりするのが面白い。読めない本でも、見ていると日本人著者の翻訳本が見つかったりする。こんなところでも読まれているのか、と思つたりもした。

本屋には、単に本を買うだけではない楽しみ方もある。日本経済新聞の読書欄に、「ところかわれば」というちょっと変わったベストセラー情報があった。地方書店のベストセラーを掲載しているだけなのだが、全国区の書店とはかなり違うラインナップになっているのが興味深い。ところが、それほど遠くに行かずとも、都内でもこの現象を見ることができる。若者の街渋谷の大型書店と、ビジネス街の真ん中八重洲の大

型書店では、意図的にかどうかは不明だが、ディスプレイされている本がかなり異なっている。当然書店内のベストセラーも大きく違う。いつも使っている本屋を離れて違う本屋に行ってみると、今まで気づきもしなかった本がディスプレイされてたりすることもあり、あちこちの本屋を見て回るのは、案外楽しいものである。

こうした楽しみを満喫すると考えると、最近話題のネット書店は面白味がないと思う。実際何度も本を頼んだり、検索に利用したりと、重宝してはいるが、何か新しい本出でていないかなとか、面白い本ないかな、と探す楽しさを考えると、やはり本屋は見て回ることのできる現実の書店がよい。



本屋でこんな楽しみ方をする人間は少ないとと思われるかもしれないが、これが意外と多い。今やコミュニケーションツールとして常識となっているインターネット上には、飽和状態と言えるほど多くの読書系・書評系ホームページが存在する。自分もページを作っていることもある、それらのページを作っている人達と接する機会も多い。聞いてみると、私と同じように、小さい頃本屋や図書館にあづけられた経験を持つ人や、本屋をはしごする人、どこに行っても本屋に寄ってしまう人、給料が出ると本屋で大量購入してしまう人・・・などの「同類」がかなりいる。本が好きだから本屋が好きなのか、それとも本屋が好きになったから、本も好きなのか、本当のところはどうだかわからないが、本を手放すことのできない「活字中毒者」は、多かれ少なかれ「書店マニア」のところがあるらしい。

そんなこんなで、家に本屋のように本があつたらいいなあというのが、昔からの私の夢だった。気が付くと本だらけの職場を選び、家も本だらけになっている。家の方は、そろそろスペースが足りなくなり、本棚の上に本を重ねるなど、どこかでやっているのと同じような状態になっているが、私の本屋徘徊癖は治ることもなく、今でも月20冊は確実に増えている。いつか家の底が抜けないかと、かなり心配だが、きっとこれからも増え続けるであろう。スペースとの闘いは、図書館ばかりではないようだ。

「政策・メディア研究科学位論文検索システム」の WWW公開について

よしざわ あ き こ
吉沢亞季子

(湘南藤沢メディアセンター)

1. はじめに

湘南藤沢メディアセンターでは、1999年よりインターネット経由で利用できる「政策・メディア研究科学位論文検索システム」を公開した。このシステムは、慶應義塾大学政策・メディア研究科の修士論文の「論文要旨」をデジタル化して蓄積し、それらをインターネットを介し検索できるようにしたサービスである。開発は、当キャンパスの学生との共同で行った。下記URLで稼働中である。

<http://www.sfc.keio.ac.jp/mcsearch/>
(メディアセンターのホームページ)

<http://www.sfc.keio.ac.jp/mchtml/>
の「データベース」にリンク。但し、著作権者から受けている許諾範囲の関係でSFC内のみにアクセス制限されている。)

データベースには、政策・メディア研究科第一期生(平成7年度卒業)から現在までの修士論文の抄録が収録されている。以下に、「政策・メディア研究科学位論文検索システム」の内容と公開までの経緯を述べる。

2. データベースの構築

紙の形で提出された修士論文中の「論文要旨」(和文・英文)を、スキャナで画像データとして読み込み、テキストデータに変換する方法で編集した。使用したアプリケーションソフトウェアは、e.Typistバイリンガルである。「ヘッダー部分」は手入力で書き込み、画像からテキストデータに処理された「詳細部分」と合わせて1レコードを完成させた。レコードの内容項目は以下に示す通りである。

〈ヘッダー部分：書誌事項〉

TITLE タイトル

AUTHOR 著者名

DEGREE 年度

SCHOOL 学科

CALLNO 請求記号(配架用に当センターが付記)
(詳細部分)

ABSTRACT 論文要旨(著者によって書かれたもの)

KEYWORDS 件名(著者により付与された自由語で
コントロールされていない。数の制限もない。)

3. 検索

検索システムとしては、学生に依託開発させたオリジナルの全文検索エンジンを採用している。従って、レコードすべてが検索語になっており、レコード上の「文字列」で検索する仕組みである。検索は、「検索語を入力する」→「書誌事項の一覧表示から論文要旨を見たいものを選ぶ」→「詳細部分の論文要旨を表示する」という流れになる。検索にあたっての画面遷移は図1・2・3に示す通りである。

4. 著作権処理について

修士論文は学位授与の目的で作成するものであり、公刊物とはみなされていない。従って、このデータベースを構築するにあたっては著者の許諾が必要であった。それは、論文を保存のために複製(デジタル化を含む)すること、および図書館資料として閲覧に供し貸し出す他に、利用者の求めに応じて複製し提供すること、更にメディアセンターが内容を有線・無線で塾内に送信することの許諾を求める内容である。そこで、平成8年度までの修士論文提出者には「複製等に関する許諾書提出のお願い」を送付し回答を返送してもらう手続きをとった。そして、平成9年度卒業生からは、論文提出の際に許諾書の提出を求めていた。回収内容の内訳はグラフ1に示す通りである。

MAG master thesis searching system.

1/1 ページ

アクセス数 448

慶應義塾大学 政策・メディア研究科 学位論文検索システム

これは、慶應義塾大学政策・メディア研究科の学位論文検索システムです。著者名／書名／論文要旨などの中の語から検索することができます。ここで見られるのは要旨のみですので、論文そのものはメディアセンター3階北の学位論文コーナーでご覧ください。(要旨画面にあるCALLNOの順序で並んでいます。)

検索は、

- 単語を、入力ボックスのなかに、半角スペースで区切って入力してください。
- カタカナは全角で入力してください。
- 各ボックスの中では、それぞれの単語は“OR”で接続されます。
- ボックス間では、それぞれ“AND”で接続されます。
- “()” “+”などの記号は入力しないでください。

検索語を入力してください:

ネットワークコミュニケーション

AND

AND



Any Questions and comments (Welcome!!) should be E-mailed to
help@fm.sfc.keio.ac.jp

図1 検索画面

Result

1/1 ページ

検索結果: 7 件ヒットしました。
御覧になりたい論文をチェックし、GETボタンを押してください。

<input type="checkbox"/> TITLE: ネットワーク社会論 AUTHOR: 上原由起子 DEGREE: 1995年度(平成7年度)修士論文
<input type="checkbox"/> TITLE: チームオーフス AUTHOR: 沢田玲子 DEGREE: 1995年度(平成7年度)修士論文
<input type="checkbox"/> TITLE: Webを利用したサウンドリテラシー教育 AUTHOR: 伊藤彰敬 DEGREE: 1996年度(平成8年度)修士論文
<input type="checkbox"/> TITLE: 草の根BBSとクローズドコミュニティ AUTHOR: 渡川藍子 DEGREE: 1996年度(平成8年度)修士論文
<input type="checkbox"/> TITLE: 「Computer Mediated Communication」: デジタルコンテンツ製作スタジオにおけるプロジェクト実行のためのネットワークコミュニケーションシステムのデザインと構築 AUTHOR: 松田浩史 DEGREE: 1996年度(平成8年度)修士論文
<input type="checkbox"/> TITLE: Small Team Collaborationのためのクロスウェアのデザインと構築 AUTHOR: 山田修 DEGREE: 1997年度(平成9年度)修士論文
<input type="checkbox"/> AUTHOR: 黒坂道也 DEGREE: 1998年度(平成10年度)修士論文

図2 一覧画面

Result

1/1 ページ

結果表示: 1 件表示します。

TITLE: Webを利用したサウンドリテラシー教育
AUTHOR: 伊藤彰敬
DEGREE: 1996年度(平成8年度)修士論文
SCHOOL: 政策・メディア研究科
CALLNO: TM-1996-180
ABSTRACT: マルチメディアネットワークが普及する時代では、読み書きと同様画像や音を利用したネットワークコミュニケーションが一般の人にも可能となる。しかし、その際に必要となる知識や技術は、初心者の立場にいたつまどめられ方をされていない。そこで、音とテクノロジー両方に携わる研究分野であるコンピュータ音楽のフィールドから、テクノロジーを利用した音のリテラシー教育について検討する。
KEYWORDS: 1. 音楽教育 2. コンピュータ音楽 3. World Wide Web 4. リテラシー 5. マルチメディア

図3 詳細画面

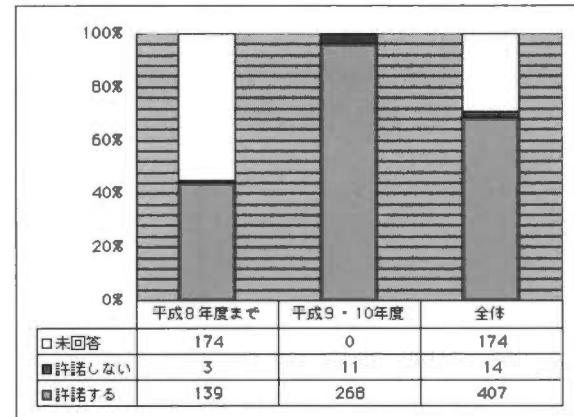


図1 許諾書回収内容の人数内訳

5. 公開の範囲

著作者に許諾書を送付した結果、許諾するもの、許諾しないもの、返事のないものの3種に分かれた。メディアセンターでは、この3種のデータベース公開の可否について、表1のように取り扱うこととした。

表1 公開の範囲

↓公開部分/回答→	許諾する	許諾しない	未回答
書誌事項	○	○	○
論文要旨	○	×	○

6. おわりに

「政策・メディア研究科学位論文検索システム」は、学位論文へのよりよいアクセス提供のために作成した。これにより、従来OPACで提供されていた「書誌事項」のみならず「論文要旨」からアクセスが可能になった。しかし、現システムにも問題がある。まず、技術的な点では、現システムの核となっている検索エンジンは大容量のデータに対応するには限界があるため、近い将来には十分な検索スピードを確保することが難しくなると予想される。また、運用の面では、入れ替わりのある学生との共同体制で、今後も安定した維持管理体制を築けるかどうかを考えいかなければならない。また、以前よりも前進したとは言え、検索結果から全文にアクセスするためには、相変わらず請求記号を控えて書架に探しにいかなくてはならない。現在、湘南藤沢キャンパスでは「デジタルキャンパス化」をめざしてさまざまな取り組みが実施されている。このキャンパス・ポリシーに応え、更によりよいアクセスを提供するためにも、ここで留まることなく「全文データベース構築」という次の課題に挑戦すべきであろう。

死と無常の寓意とエンブレム

— 慶應義塾図書館所蔵品より

まつだ たかみ
松田 隆美
(文学部教授)



1999年1月に日本橋丸善本店で開催された「寓意の鏡 — 16・17世紀ヨーロッパの書物と挿絵」展¹⁾では、慶應義塾図書館が所蔵するエンブレムやインプレーザと称される寓意的な図版を含んだ書物が40数点展示されている。16世紀のエンブレムとは、単純化して説明するならば、題辞(モットー)、挿絵(図像)、詩文(エピグラム)の3つの要素から構成され、お互いに意味を補完しあうことで、単独では表現しきれない複雑な概念を伝えようとするものである。抽象概念をはじめとして様々な事象をエンブレムや寓意的擬人像を用いて視覚的に表象する方法は、中世から近代初期にかけて文学、美術に共通して認められる特徴である。抽象的な事象こそ、ビジュアル化することでその本質を判りやすく応用しやすいかたちで理解できるという信念は、中世からルネサンスを経て少なくとも17世紀末まで続いている。18世紀以降になると、コンセプトと図像の照應は、文学においても絵画においても、周縁的なものへと変化してゆくが、ヨーロッパの精神史における大きな区切りはそのときに訪れるといってよい。

ビジュアル化の対象となる様々な概念や主題のなかでも、死や人生の無常をめぐるテーマはポピュラーなものである。以下、慶應義塾図書館所蔵の具体例を解説するかたちで、中世後期の14世紀から17世紀まで、死と無常の観念の視覚化の多様性に触れてみたい。

中世末期の英語の短詩に、死ぬことをめぐる3つの恐怖というモチーフがあるが、それによると、3つの恐怖とは、死は確実に訪れること、死後どこへ行くのかわからないということ、そして、死がいつ訪れるのかわからない点である。この3つのポイントは、死の絶対性、生の短さ、死後の恐怖などさまざまなテーマにより表象されている。

〈死の絶対性—全てに君臨する死〉

ジャン・ブジェ・ド・ラ・セール作「媚びへつらわぬ鏡」(ロンドン、1639年[120X 1049 1])は、死と人生の無常に関する隨想で、4枚の挿絵を含んでいる。「死」の擬人像は、通常墓の中で白骨化しつつある骸骨として描かれるが、扉絵[図1]では、全てに勝る絶対的な権力者の「死」が王者にふさわしい緋衣を腐敗した肉体に纏い、王笏と鏡を手に持って、現世を踏みしだいて君臨している。手にしている鏡は人間の本当の姿を映しだし、人間は塵芥に過ぎないという事実を認識させるためのものである。



O that they were wise, that they understood This,
that they would consider their latter End! —
Mors sola factur
Quantula sunt hominum corporicula. — Lovet.

図1

〈死の前の平等性〉

ハンス・ホルバイン『死の舞踏』(正確なタイトルは「巧妙に構想され、優雅に描かれた「死」の像と物語」—リヨン、1538年[120X 1003 1])は、ホルバインの原画をバーゼル在住のハンス・リュツェルブルガー(Hans Lützelburger)が版刻した41枚の挿絵、ウルガタ聖書からの引用句、そしてその引用を説明するフランス語の4行詩で構成されている。「死の

「死の舞踏」(danse macabre)は、中世後期から写本や壁画でポピュラーなテーマだが、通常の「死の舞踏」は、中世の聖俗の階層制にしたがって、白骨化した死者があらゆる階層と職業の人間をひとりずつ連れ去ってゆく場面を、行列のように並んで描いている。ホルバインの『死の舞踏』でも、死が全ての人間に平等に訪れる様子が精緻な銅版画で描かれている。図版[2]は前触れもなく高利貸しのもとを訪れる「死」で、題辞は「ルカ」12:20の引用、「愚かな者よ、今夜、お前の命は取り上げられる、お前が用意した物は、いったいだれのものになるのか」である。中世において高利貸しは神が禁じた職業の代表で、貪欲の象徴のように解釈されていた。



〈死はどの世代にも訪れる〉

エンブレム作家のジャン・ジャック・ボワサール作の寓意図本、「人生の劇場」(メス, 1596年 [120X 1041 1])は、聖書を中心にギリシャ・ローマ、エジプトなどの神話も題材としているが、その寓意的な扉絵は人間の人生を4つの世代に分けて描いている。「人間の4世代」のモチーフは、人間が、少年、青年、中年、老年といった自然な成長のサイクルに従って、それぞれの世代に相応しい生き方や教訓を守って生きることを教えるものである。しかし本書では、ホルバインの『死の舞踏』さながらに、「死」が階級、職業、年齢に関係なく万人に訪れる事を示

すためにこのモチーフが使われている。まだゆりかごに寝ている幼児[図3]にも、結婚式を迎えた青年にも、商売熱心な中年の裕福な貿易商人にも、死期が近い老人にも平等に死が訪れる。



図3

〈死を想い、常に用意せよ〉

イングランド最初の印刷業者であるウィリアム・キャクストン(William Caxton)の弟子で、彼の死後その印刷所を受け継いだワインキン・ド・ウォード(1535年没)が刊行した『キリスト教徒の日常訓』(ロンドン, 1506年, 初版は1502年 [120X 888 1])は、パリのアントワーヌ・ヴェラール(Antoine Vérard)が刊行したフランス語の『往生法』(1492年)の英訳である。15世紀から16世紀初頭にかけて各国語で刊行された「往生法」は、当時のベストセラーであり、いまわの際にいかにしてさまざまな誘惑を退け、罪を心より悔いて息を引き取るかを、日常的に心に留めるべき教訓とともに詳述したものである。木版画[図4]は、困惑する地獄の悪魔を後目に、魂が天使に導かれて死者の口から出て昇天する場面である。本書は、天国に迎えられるための往生の方法をかなり具体的に記しているとはいえ、その目的は、いまわの際にマニュアルとして使われることにあるのではなく、むしろ青年や中年の元気な時期に、死がいつ訪れるかわからないという事実を忘れないためのテクストである。



図4

<肉体とは死に他ならない>

ベルギーのイエズス会士、ヘルマン・ヒューゴー作のエンブレム・ブック『敬虔な欲望』(アントウェルペン, 1628年 [120X 592 1])には、骸骨のなかに閉じ込められている幼子の図版[5]が登場し、肉体の牢獄に閉じ込められている靈魂の姿を表している。題辞として、「ローマの信徒への手紙」7:24の「わたしはなんと惨めな人間なのでしょう。死に定



Infelix ego homo, quin me liberabit de corpore mortis huic? Ad Roman. 7.
XXXVIII. 図5

められたこの体から、だれがわたしを救ってくれるでしょうか」が添えられている。イグナチオ・デ・ロヨラは『靈操』において、「魂がこの朽ちてしまう体に閉じこめられているのを想像の眼で」見ることで、罪深い人間の存在への黙想を促したが、骸骨の肋骨内に閉じこめられている靈魂の姿は、まさにこの考えを奇想を使って視覚化したものに相違ない。

<地獄の口>

前述のボワサールの『人生の劇場』には、「反逆天使たちの失墜」の場面が描かれているが、グロテスクな反逆天使を飲み込む地獄は、聖書に登場する巨大な怪物レビヤタンの口として描かれている[図6]。この図像は中世を通じて一般的な地獄の表象であり、中世の絵入り聖書や時祷書の挿絵として、「キリストの地獄の征服」や「最後の審判」の場面に頻繁に登場するばかりか、16世紀になってもシェイクスピアの『ハムレット』に関連した表現が登場している。



*Celestes Genios perfecta luce creatus
Peccatum harrando perdidit exitio.
Sub Phlegente Satana Corpis mortuorum mala:
Perna eadem religio addita doloribus.*

c. 2

図6

<人生の絶え間ない危うさ>

ニコラウス・ロイスナー作『エンプレマータ』(フランクフルト, 1581年 [120X 909 1])には、「罪深き人間の鏡」と題されるエンブレム[図7]が登場して、現世における人間の危うい状況を描いている。人間は、かろうじて塞いだけの地獄の穴の上に、



図7

神の裁きを一本の細糸で頭上につるされたダモクレスの剣のように突きつけられて座っている。そして常に、罪、悪魔、死、肉体、「肉体の腐敗」からの攻撃にさらされている。

〈死にも勝る「時の翁」〉

イギリス人のフランシス・コールズ作のエンブレム・ブック「人生のヒエログリフィカ」(ロンドン, 1684年, 初版は1638年 [120X 1046 1])では、「何ごとにも定められた時がある」(『コヘレトの言葉』3:1)という題辞が添えられたエンブレム[図8]で、「死」と「時の翁」とが論争している。「死」が明るく燃えるろうそくの火を消そうとするが、その背後から、砂時計を持ち、羽を付け、長い前髪をした老人の「時」が「死」の手を押しとどめている。輝く太陽と日時計はまだ4時を指している。「死」はいつでも好きなと



図8

きに手を下す権利があると主張するが、「時」は、「死」がその権利行使できるのは定められた時が到来したときだけだと反論して、死にたいする「時」の優位性を主張するが、決着はついていないようである。

以上の具体例が示すように、死をめぐる表象は「死」の擬人像を中心に実に多様である。17世紀になると、「メメント・モリ」のテーマは一種のファンションと化してゆき、象牙製のミニチュアの頭蓋骨(墓での腐敗を示すべく丁寧にもヒキガエルが乗っている)や若き女性の姿と死後の腐敗した肉体とを半身ずつ組み合わせて作った、木製のタオル掛けなど、奇妙な趣味の工芸品が登場する。元来抽象的な観念を視覚化することにこだわった結果生じた多様性といえよう。



展示会風景

注

- 1) 本稿は会期中に行なわれた5回の講演会のうち、1月29日の講演内容を松田教授にまとめていただいたものである。

早朝の図書室

マイケル・エインジ

(Ainge, Michael W.)
(経済学部助教授)

大人になった今では、朝が苦手な私は午前の図書館とはほとんど縁がありません。が、小学生の頃、図書室は私の朝のオアシスでした。母の出勤時間が早い日は朝7時に校門の前でおろされ、食堂で眠そうな日系人のスタッフが出した味気ない朝食を一人で終えると、授業が始まるまでの1時間を気持ちよく過ごせる唯一の場所が学校の図書室でした。他の子供がどこでその1時間を過ごしていたかはまったく関心はなく、静けさを求めて図書室に足を運ぶ癖がついていました。正解でした。だいたい私と図書係のお姉さんの二人しかおらず、静寂の時間がその部屋に流れ、私にとって安心していられる場所となりました。係員のお姉さんと話すようになると、お姉さんはいろいろな面白いことを教えてくれました。目録の使い方とか、本の見つけ方とか。するとだんだん自分の好きなミステリー・シリーズやNational Geographic誌などがすぐに探せるようになり、図書室が自分の書斎のような空間となりました。すべての椅子を試して一番座り心地のよい椅子を探し出すと、その椅子を一番静かで奥まった隅に移して、本を読むのが私にとって幸せそのものでした。いわんや、家から密かに持ってきたリンゴや洋梨をこっそりとその一隅で食べるときの気分は最高！

一人で毎日図書室で1時間余りを過ごすと、細かい点に気付くようになりました。季節が冬へ移り変わるにつれて、日だまりが徐々に消え、窓の外は真夜中みたいな暗闇に替わりました。窓から眺める曙がいかに素敵かということを初めて知りました。そして春先に猛烈なスピードで太陽が戻ってくると、図書室に再び眩しい黄金の光を浴びせかけるのです。その様を見て本当に感動しました。私が感動していることに気



付いた係のお姉さんが「まるでヨーロッパの大聖堂の日差しみたいね」と言い、大聖堂の写真集を見てくれたのも懐かしい思い出です。

図書室が大聖堂だとは確かにいえるかもしれません、ライブラリーが知識や情報の宝庫であることを実感したのもちょうどその頃でした。当時はベトナム戦争の最中(さなか)にあって、毎晩ニュースで泥や血にまみれた米兵士達の映像が放送されていた一方で、大統領や当局の記者会見では戦況が順調であるとコメントしていました。私は映像とコメントの不一致が妙に気にかかりました。自分の19歳のいとこが徴兵に取られ戦場にいたことも心配の種でした

が、8歳になったばかりの私も兵役に召集される可能性があることを知ったせいか、ベトナム戦争に関心を持ち始め、図書室で調べることに決めました。

さまざまな資料がみつかりました。ひとつはデータが中心の資料でこれは目を通して終わりとしました。ある資料はベトナム戦争というのは悪党の共産主義の国が民主主義の南ベトナムの自由を奪おうとして侵略したのだと書いてありました。弱者の民主主義の南ベトナムが我が国アメリカ合衆国の援護によって独立を守ろうとしている、と主張していました。これはニュースで報道されていた解釈とほぼ同じでした。しかし別の本は異なる観点から戦争を論じていました。その本によれば、ベトナムという国はフランス帝国から解放されたと同時に、アメリカ帝国が侵略の食指を動かした国で、それゆえベトナムが長い間願っていた独立はいまだ得られず、アメリカの侵略軍を追い出すために今も戦っているという説明でした。図書室に備えられていた辞書で知らない単語を調べましたが、どうも相反するこの二

つの見方のつじつまをあわせることはできませんでした。迷った挙げ句、図書係のお姉さんに尋ねてみました。「所詮、本に書いてあることは一人の意見に過ぎないのだから、正しいとは限らないわよ。自分で判断してみたらどうかしら。自分で事実を調べて、どの解釈が正しいのかは自分で決めるしかない。もしかしたら、本の著者は二人とも間違っているのかもしれないわ。」

その朝はずっと考えました。ベトナム戦争に関することだけでなく、それまで私は本に書いてあることをほぼ信じていました。でもよく理解するためには自分で調べた方が確実な情報が得られると思った瞬間に授業の開始を知らせるベルが鳴りました。正しい見方は何なのかと、

自分でもっと調べることに決めたのです。

夏休み中、いろいろな大人にベトナム戦争はなぜ行われているのかと尋ねましたが、答えは十人十色でした。やはり大人でも意見が一致しないのだ、絶対に正しい見方を自分で調べてから自分で決めるんだと心に決めました。しかしもっと詳しく調べるには大きな図書館へ行かなければいい本がないと母に言われて、市立図書館へ初めて足を運びました。その図書館は午後にしか行けなかったので、その夏、朝の図書室のオアシスを失うことになりました。そして秋に入ると、小学校の早朝図書タイムの制度が廃止されてしまいましたが、私にとって「図書室」の意味が深くわかり始めたような気がしたのもこの頃だった気がします。

日吉メディアセンターニュース

貸出パソコンサービス

図書館内（1階レファレンスコーナー、2～3階グループ学習室、3階雑誌室）でキャンパスネットワーク環境が利用できる貸出パソコン（無線LAN機器）の運用を行なっています。日吉ITCでパソコンの利用登録をしている方はどなたでも利用できます。

デジタルビデオカメラの貸出、DVノンリニア編集機器（DV Station）の利用が始まりました

A V ブースに設置されたDVノンリニア編集機器では、デジタルカメラで撮影されたソフトを編集加工してV H S テープにダビングができます。

2階、3階に語学辞書のコーナーを新設

語学学習のために辞書のコーナーを2階東閲覧室（バルコニーコレクション前）と3階西閲覧室北側内に設置しました。英・独・仏の中型辞典を中心に用意しました。その他の言語や大型辞典などは、1階レファレンスコーナーに多数取り揃えています。

4階研究室図書の学部学生への貸出サービスを始めました

貸出規則、手続については、「利用案内シリーズNo.14 研究室資料利用案内」をご覧ください。

湘南藤沢メディアセンターニュース

ホームページから資料のリクエストができます

1999年5月より、湘南藤沢に所属の学生、教職員を対象に、湘南藤沢メディアセンターのホームページ上から、資料購入依頼、文献取り寄せ、文献複写などのリクエストがオンラインができるサービスを開始しました。どうぞご利用ください。

お申し込みの詳細は下記 URL にあります。

<http://www.sfc.keio.ac.jp/mchtml/libhtml/ILLhtml/ill.html>

また、ご不明の点は mc-request@sfc.keio.ac.jp までお問い合わせください。

三田メディアセンター

うえおか まきこ
上岡真紀子

(三田メディアセンター)

1.はじめに

三田メディアセンター(以下、三田)では、1995年10月より館内ネットワークを利用してCD-ROMネットワークを構築し、サービスを開始した。OSはNetWare3.12J、ソフトウェアはOptiNetを使用し、約40タイトルを提供していた。

その後、ネットワークを取り巻く環境も大きく変化し、ソフトウェアのバージョンアップへの対応などから新しいネットワークが望まれるようになつた。

新しいCD-ROMネットワークへのリプレースは1999年2月に行われ、現在に至っている。

本稿では、三田における新しいCD-ROMネットワークサービスを中心に、データベース検索システムの提供についてサービスフロントであるレンタルの立場から報告する。

2.三田におけるデータベースの内訳

三田でレンタル資料として提供しているデータベース(付録は除く)、157タイトルの形態別内訳は次の通りである。

- CD-ROM 125タイトル
- オンライン系
 - インターネット 13タイトル
 - インターネット 7タイトル
 - ダイアルアップ 12タイトル

CD-ROMは、1階、3階、4階の各フロアのCD-ROMコーナーで提供している。インターネット、インターネット経由のオンラインデータベースは、1階のオープンエリア、計算室、研究室などの学内LANに接続するターミナルからも利用可能である。これらは、利用者が自由に検索することが出来る。ダイアルアップのものは、1階、3階、4階の各レンタルカウンターで代行検索を行っている。

3.CD-ROM

3.1 新しいCD-ROMネットワーク

新しいCD-ROMネットワークを検討するにあたっての要件は、以下の2点であった。

- 1 Web対応であること
- 2 WindowsNTを使用すること

これらの要件を満たす事によって、同一のインターフェースによる検索を実現するためである。

新しいネットワークは、1998年の11月から、機器の搬入、環境設定を開始し、1999年2月の入試期間中にリプレース、試験期間終了後にサービスを開始した。

3.2 運用

CD-ROMは、ネットワークユースで同時アクセスが複数のもの、利用統計の結果から見て利用が多いものをタワーに、ネットワークユースで同時アクセスが1のものをジュータンボックスに搭載し、ネットワークユースでないものをスタンドアロンで提供している。現在、タワーに77タイトル、ジュータンボックスに52タイトルを搭載している。

タワーとジュータンボックスの利用により、利用者のフロア間の移動と、スタッフが利用者の要求に応じてCD-ROMを出納するという手間は大幅に減少した。

その一方で、必然的にどのレンタルカウンターにおいても全てのCD-ROMについて対応しなければならなくなり、各階のレンタルスタッフの守備範囲は大きく広がった。

3.3 CD-ROMコーナーのメニュー画面

これまでCD-ROMコーナーで提供していたデータベースのメニュー画面は、データベースを大きく国内のものと海外のものに分け、データベース名の一覧の中から目的のデータベースを探す形をとっていた。

しかし、一覧形式はタイトル数が増加するにつれ長大なものとなってしまったため、現在ではデータベースを便宜的に9つのグループに分類したメニューを提供している。分類メニューは、次の通りである。

- 1 総合的なデータベース
- 2 図書を探す
- 3 雑誌・新聞を探す
- 4 論文・雑誌を探す
- 5 政府刊行物・国際機関資料を探す
- 6 人物・企業・団体を探す
- 7 法令・判例を探す
- 8 統計・データを探す
- 9 その他の情報を探す

各メニューを選択すると、データベース名の一覧と簡単な紹介文があり、目的のデータベースを選択する形になっている。

当初戸惑いが見られた利用者も、概ね新しいメニューになじんできたようである。しかし、やはり現在のメニューからでは目的のデータベースに辿り着けない利用者がいる。

これらの利用者を救うために、データベース名のアルファベット順、主題別のメニューの作成も検討の余地がある。さらに、メニュー画面に、主題、言語等によるデータベースの検索機能を持たせることも可能であろう。

今後は、利用者のデータベース選択、決定に対する多面的なアプローチに対応できるように、いろいろな切り口を持つメニューを検討する必要がある。

4. オンライン

最近1年間の大きな変化は、やはりインターネット経由のデータベースの増加である。既存のCD-ROMや、専用回線で提供されていたデータベースがインターネット版へ移行していることもその一因である。

これらのデータベースは、その利用形態から、館内の複数地区、もしくは全館でサイト契約し合理的な提供を図っている。この傾向は今後も継続するであろう。

以前はオンラインデータベースといえば代行検索が行われ、利用者に実費を負担してもらっていた。

インターネット版への移行により、学内の不特定多数の利用者が利用するようになり、利用者への課金は実質不可能となった。

これまでデータベースの購入費は、冊子体の購入予算を振り替るといった措置が取られてきたが、当然この枠に収まらないものも多い。

今後データベース予算は大きな問題になるだろう。データベース予算をどのように位置づけ確保していくか、全館レベルでの検討が必要である。それと同時に、受益者負担の原則に鑑み、利用者が受容しやすい課金方法の検討も急がれる。

5. 広報

ホームページ(以下、HP)上の広報の可能性、必要性については、改めて言うまでもない。三田では、HPの改訂、メンテナンスも重要な課題の一つである。

我々にとって容易に最短で目的のデータベースに辿り着くために利用者をナビゲートすることは、データベースを提供する事と同様に重要な任務の一つであると考える。データベースがHPからナビゲートされていることを考えれば、HPの大規模な改訂は急務である。

その他レファレンスで行っている利用者への広報は、主要なデータベースを紹介するCD-ROM体験講座、特定主題に沿ったデータベースの紹介を行う文献探索ツアーが挙げられる。

6. おわりに

利用者にとって満足度の高い図書館であるために、魅力あるデータベースコレクションの構築は重要である。図書館でどのようなデータベースが使えるかは、直接図書館の評価に繋がる事は間違いない。

データベースサービスを常に充実させるためには、提供しているデータベースの取扱選択、評価をきちんとしていくことがこれからも課題である。

日吉メディアセンター

きのした かずひこ
木下 和彦

(日吉メディアセンター係主任)

はじめに

日吉メディアセンターでは、今年度、独自の新しいデータベースサービスとして、「ネットワークことといfor インターネット」(以下、「こととい」と略す)と「Nichigai·Web」の2つを導入した。

本稿ではこの2つについて説明するとともに、日吉メディアセンターにおけるデータベースの導入について、現状と今後の方向について考える。

1. こととい

「こととい」は、EPWING規格に準拠して作成されたCD-ROM辞書を、インターネット(厳密にはイントラネット)上で、利用するためのシステムである。

システムは「ことといサーバ」部と「ことといHTMLサーバ」の2つからなっている。前者は、いわゆるデータベースサーバとしての役割を持ち、後者はイントラネット上で情報の受渡しをおこなう役割を持っている。日吉メディアセンターでは、前者をWindowsNT Server上に、後者をSolaris上に構築し、センター内に設置している。

現在提供しているCD-ROM辞書は、「広辞苑第5版」「現代用語の基礎知識1999年版」「新英和・和英中辞典」「リーダーズ+プラス」の4点である。日吉では、これらを“フローティング・ライセンス”(いわゆる同時アクセスと同義)で契約し、各辞書とも15ライセンス取得している。アクセスの管理はIPアドレスでおこない、日吉キャンパス内のネットワークからのみ利用可能となっている。

2. Nichigai/Web

「Nichigai·Web」はサービスの総称であり、この名称のもとに4種類のデータベースが提供されている。日吉ではこのうち「雑誌記事索引ファイル」と「ジャーナル・インデックス」の2つを導入している。

このサービスは「こととい」とは異なり、先方のサーバにアクセスする形態をとる。契約は“サイトライセンス”で、申し込んだサイト内から契約したID数の範囲内でアクセスが可能となるものである。実際のアクセス管理はIPアドレスでおこなっており、ID数は現在、各データベースとも5としている。

3. 日吉メディアセンターにおけるデータベース導入のポイント

今回導入した2つのデータベースには、次の共通点がある。

- 日本語のデータベース
- Webブラウザで利用可能
- IPアドレスによるアクセス管理
- 同時アクセス数に基づいた価格体系
- 定額制の利用料金
- 比較的安価
- データベース(システム)管理が容易

これらを踏まえて、日吉メディアセンターのデータベース導入に際して大きなポイントを3つ掲げてみたい。

まず最初のポイントは、「日本語のデータベース」という点である。今回の導入以前から、日吉メディアセンターを含むメディアネット全体では、いくつかのデータベースを導入し、提供している。しかし、それらは主に海外のデータベースであった。日吉のような、学部の1~2年生を中心のキャンパスでは、それらは学生のニーズにマッチしたサービスとは必ずしもいえない。そのことは、従来からCD-ROM(スタンダードアロン)で提供しているデータベースのうち、日本語のもののニーズが高いことからも裏付けられる(表:1998年度CD-ROM利用統計)。

2番目のポイントは、両者とも「比較的安価」という点である。日本語のデータベースとしては、例え

ば「Digital News Archives」(略称DNA:朝日新聞記事データベース)がメディアセンター全体ですでに導入されているが、これはネットワーク接続パソコン台数による価格体系であり、1キャンパスで導入するには非常に負担の大きいものであった。ネットワークで利用可能なデータベースは概して高価なものが多く、DNAのようにメディアセンター全体での契約でなければ導入できなかった。しかし、今回の2つのデータベースのように安価なものは、中小規模の図書館においても比較的容易に導入することができる。

3番目のポイントは「インターネットエリア」の開設である¹⁾。それまでは、ネットワークを介して利用できるデータベースを導入しても、環境が未整備のため、十分な利用指導ができなかった。この問題が解決されたのも、データベースの導入に弾みをつける結果となった。

おわりに

パソコンやネットワークの発展に伴い、今後もさまざまなデータベースが出てくるであろうことは想像に難くない。また電子ジャーナルに代表されるように、様々な情報が電子媒体で提供されるようになってきている。その一方、従来通り紙媒体の資料も収集する必要があり、限られた予算の中で、これらをどのような配分で購入(導入)していくかは頭の痛い問題である。

日吉メディアセンターの図書予算是、一義的には学部学生のために計上されており、教員のための研究室図書予算是これとは別体系になっている。メディアセンターは学生のみならず、教員の研究サポートもおこなう使命を帯びているが、上記のような予算区分の中で、今後のデータベースサービス導入に際し、どのような予算上の配慮をしていくかということも、大きな問題である。

こうした問題を解決するために、メディアセンターが、今後どのような方針で対処していくかを真剣に検討する時期がきているといえよう。

表 1998年度 CD-ROM 利用統計

国内

朝日新聞	302
日本経済新聞	150
日経金融・産業・流通新聞	36
読売新聞電子縮刷版	111
毎日新聞	72
雑誌記事索引	332
CD-JOINT	6
法律判例文献情報	158
判例マスター	140
J-BISC	29
書誌ナビ	0
理科年表	3
ダイヤモンド会社要覧	4
日本の会社	1
NPIS	0
合 計	1,344

海外

Newspaper Abstracts	123
Periodical Abstracts	136
Readers' Guide	26
MLA	25
PAIS	7
Bibliographie Nationale	0
Deutsche National Bibliographie	1
Grobal Books in Print	3
Boston Spa Serials	0
MYRIADE	0
Ulrich's Plus	0
合 計	321

注

- 1) 酒井由紀子ほか."日吉メディアセンターにおけるインターネットエリアの開設". MediaNet. No.7, 1999, p.45-49

理工学メディアセンター

せいの
清野 早苗
さなえ

(理工学メディアセンター係主任)

みたに みえこ
三谷 三恵子

(理工学メディアセンター)

1. はじめに

理工学メディアセンターが全キャンパスと理工学部キャンパスに向けて2種類の「CD-ROMデータベース検索サービス」を開始したのは、1995年6月のことだった(以下、旧サービス)。それから約4年後の今年3月、システムを全面的に変更し、現行の新サービスを開始した。

振り返ってみると、旧サービスを始めた当時は理工学分野のほとんどの抄録誌・索引誌がCD-ROM化された時期であり、それらは主にスタンドアローン(CD-ROMを1台のパソコンで利用する)で利用されていた。

旧サービスの特徴は、それらのCD-ROMの“同時複数利用”と“館外からの利用”を学内ネットワークを介して実現した点にある。その結果、データベースの利用件数はスタンドアローンで利用していた頃とは比較にならないくらい増えた。

2. 旧サービスとその問題点

旧サービスは2つのサーバで提供されていた。1つはCD-ROMのデータを載せたUNIXワークステーションで、telnet接続で全キャンパスから利用するものだった。この場合の検索ソフトはOVID。もう1つは複数のCD-ROMドライブを持つNetWareサーバで、館内の専用パソコンで利用する、または理工学部キャンパス内からtelnet接続で利用するものだった。この場合の検索ソフトは個別。

旧サービスはデータベースの利用を飛躍的に促したが、開始当初からすでにいくつかの問題点を指摘されていた。

UNIXのシステムでは、搭載データベースのライセンス契約の問題などに対処するため利用者登録制を探ったが、この登録・更新・取消等の作業は利用者にとっては煩わしく、当センターにとってはたいへん手間のかかる作業となっていた。

また、この2つのサーバやネットワークの維持・管理に関しては、図書館スタッフの知識・経験では対処しきれない面が多く、その分野の専門スタッフの助けを必要とした。実際には当初予想した以上にトラブルが多発したため、スタッフの負担が一層重くなってしまった。

この他にも、システム毎に利用条件やアクセス方法が異なるためサービス全体を把握しにくい、不慣れな利用者には検索方法やキー操作が分かりにくい、などが挙げられた。

3. 新サービスへの移行にあたって

旧サービスの経験を踏まえて新サービスでは以下のを目指した:

- (1) 最新の技術動向に適したシステム。
- (2) 維持・管理が比較的容易なシステム。
- (3) 利用者登録制以外の方法で、ライセンス契約の問題に対処できるシステム。
- (4) 学生の利用が多い科学技術文献速報は、これまでのスタンドアローンではなく、なるべく同時複数利用ができるようにする。
- (5) サービスへのアクセスを一本化する。
- (6) 不慣れな利用者にも、検索方法やキー操作が分かり易いサービス

4. 新サービスの概要

新サービスはWindows NTで動く2つのサーバ(当センター内に設置)で提供されている。

1つはERLサーバ(SilverPlatter社のシステム)で、理工学部キャンパス内からアクセスし、Webブラウザで利用するものである。もう1つは複数のCD-ROMドライブを接続したCD Netサーバで、こちらは館内の複数(現在は8台)の専用パソコンで利

用するものである

ERLでは、COMPENDEXとMathSciを提供している。ライセンス契約上利用は理工学部内に限られるため、IPアドレスによるアクセス制限を行なっている。

CD Netでは、INSPECと科学技術文献速報(11編のうち利用の多い7編)を提供している。利用は館内のみで、館外からの利用はできない。

科学技術文献速報の残り4編は、予算などの制約で現在もスタンダードローンで利用されている。

5. データベース検索をめぐる状況

近年、データベース検索の世界では次々と新しいサービスが出現している。主題分野・契約方法・価格などによっては、他のメディアセンターと協同で導入した方がよい場合が多い。この4年間にそういう方法で導入したものは、FirstSearch、DNA、Web of Science(旧サービスのSCIに代わるもの)、ProQuest Directで提供されるABI INFORMなどである。

その一方で、これらのサービスは高額であるた

め、CurrentContentsのように予算上の制約などの理由で中止せざるを得なかったものもある。

なお、新サービス開始後にもNICHIGAI WEBサービスの雑誌記事索引ファイルを導入している。

6. まとめ

データベース検索サービスの詳細は表1のとおりである。これらのサービスへのアクセスは、館内の専用パソコンのメニュー画面、または当センターのホームページのデータベース検索サービスページから行えるようになっている。

今年の利用説明会以後、新サービスの利用法もかなり浸透したと思われる。館内の専用パソコンの稼動率も高く、館外からの利用も増えて、その影響か文献取寄せの申込も増加している。

最後に、ERLではオンラインジャーナルへのリンク機能SilverLinkerを利用できるが、当センターではまだこの機能は使っていない。しかし、すでにProQuest Directでは検索と同時に原論文入手できている。今後、データベース検索サービスがその方向に向かうことはまちがいないと思われる。

表1. データベース検索サービス一覧 (1999年7月末現在)

データベース名	内 容	収録期間	提供形態と利用方法
★ MEDLINE	医学	1966~	旧サービスのまま、当センターのサーバで学内に提供しているか、まもなく提供形態が変更される予定。利用者登録が必要。telnet接続して利用する。
★ 科学技術文献速報 4編	管理・システム技術、エネルギー・原子力、金属・鉱山・地球科学、土木・建築	1995~	館内の特定のパソコンで、スタンダードローンで利用する。
★ 科学技術文献速報 7編 ¹⁾	機械、電気、物理、ライフサイエンス、化学(国内)、化学(外国)、環境公害	1995~	当センターのCD Netサーバで館内に提供。専用パソコン(現在は8台)で同時に利用する。
★ INSPEC	物理、電気・電子工学、コンピュータなど	1989~	同上
★ COMPENDEX	工学	1987~	当センターのERLサーバで理工学部内に提供。Webブラウザで利用する。
★ MathSci	数学	1940~	同上
★ 雜誌記事索引ファイル	人文、社会、科学、技術、医学、薬学	1985~	当センターが理工学部内に提供。NICHIGAI WEBサービスにアクセスし、Webブラウザで利用する。
Web of Science	自然科学、社会科学、人文・芸術	1993~	全メディアセンターが学内に提供。三田メディアセンターのサーバにアクセスし、Webブラウザで利用する。
DNA : Digital News Archives	朝日新聞の記事全文データベース	1985~	同上
ProQuest Direct (ABI INFORM)	ProQuest Directは検索から全文入手まで可能なシステム ABI INFORMはビジネス、経営学分野のデータベース	雑誌ごと	全メディアセンターが学内に提供。UMI社のProQuest Directにアクセスし、Webブラウザで利用する。
FirstSearch	米国のOCLCが提供している検索サービス 複数のデータベースを利用できる	データベースごと	全メディアセンターが学内に提供。メディアセンター経由でOCLCにtelnet接続して利用する。または、Webブラウザで利用する。

注1 ★印は理工学メディアセンターが単独で提供しているもの。無印は、他のメディアセンターと協同で提供しているもの。

注2 メニュー画面では、上記以外にPubMedを加えている。PubMedはNational Library of Medicine(米国)が無料で提供しているもので、内容はMEDLINEとはほとんど同じ。

湘南藤沢メディアセンター

さんべみわこ
三瓶美和子

(湘南藤沢メディアセンター)

はじめに

湘南藤沢キャンパス（以下SFC）のメディアセンターでは1990年のキャンパス開設以来、キャンパスのネットワーク資源を活用してデータベース環境の整備を行ってきた。しかし、この10年間のデータベースをめぐる外部環境の変化はめざましいものがあり、SFCのデータベース環境もその動向を見ながら展開しているのが現状である。

現在SFC内には様々なデータベース資源が存在しているが、ここではメディアセンターが仲介して提供している商用データベースに限定して述べる。

1. 提供しているデータベースの種類

メディアセンターで提供しているデータベースを提供の形態によって区分すると以下の通りである。

- ① CD-ROM データベース
- ② インターネット上の商用オンラインデータベース
- ③ 専用回線によるオンラインデータベース
- ④ ローカルサーバーで提供しているデータベース

以下、この分類に従って紹介していきたい。

1) CD-ROM データベース

CD-ROM データベースは現在国内24タイトル、海外17タイトルを館内のデータベース検索コーナーで提供している。この中で特に利用が多いのは、「有価証券報告書」、「IFS (International Financial Statistics)」、「OECD Statistical Compendium」などである。これまで利用者の要望に応じてCD-ROMを出納し、あらかじめ決められた特定のパソコンにセットして使うスタンドアロン方式を中心として運用してきた。その一方で、タワーにあらかじめ複数枚のCD-ROMをセットしておき、ネットワーク上のパソコンからアクセスする方式を1997年度から導入した。現在では9台の検索専用のWindowsNTパソコンのうち4台がこのCD-ROMネットワークに対応している。この方式にはCD-ROMの出納が不要となり、利用できるパソコンが

増えるなどのメリットがある。今後もCD-ROMネットワークに対応できるものは可能な限りそちらに搭載する方針である。しかし、CD-ROMによつてはソフト自体がネットワーク対応に適さないこともある。当分の間は両者的方式を併用することになるであろう。

CD-ROM データベースの問題点としてはCD-ROMのインストールや検索用パソコン、CD-ROM チェンジャーなどのメンテナンスにやや手間がかかることが挙げられる。CD-ROM 検索パソコンの管理上の問題については外部委託のアドバイザーに月1回程度技術的サポートを依頼している。

2) インターネット上の商用オンラインデータベース

海外データベースの「DIALOG」、「FirstSearch」、「LEXIS」についてはUNIX環境のtelnet経由で1996年7月より提供を開始した。DIALOG, First Searchについては利用者が直接検索できる方式で提供している。但し、LEXISについては大学院生、専任教職員に限定した事前登録制をとっている。これらのサービスの導入が比較的スムーズに行われたのは、SFCでは創設時からキャンパス在籍の学生、教職員全員がキャンパス・ネットワーク・システム（以下、CNS）のアカウントを持つ方針があったことが背景にあった。

また最近のインターネット上の商用オンラインデータベースの普及に伴い、従来CD-ROMで提供していたデータベースのうち、これに置換できるものは徐々に移行を進めつつある。現在、国内では書誌情報（日外Webサービスの「BOOK-PLUS」、「ジャーナルインデックス」、「雑誌記事索引」）、新聞記事（「日経テレコン21」）などをCNSにアカウントを持つ学生、教職員全員に対して提供している。一方海外のデータベースについては、全塾で契約しているFirstSearch、「ProQuest Direct」、SFCのみで契約している「Britannica online」、「Policy File」を提供している。今後も利用頻度の高いもの

はインターネットで提供できるデータベースとの契約が可能になれば移行を検討していく方針である。これによってCD-ROMデータベースの管理に不可欠のインストール作業やCD-ROMの出納の手間が軽減された。一方、利用者側も場所や時間帯の制約を受けることがなく自由に利用できることは大きなメリットである。まさに24時間キャンパスを掲げるSFCに適合したサービス展開が可能になったと言えよう。

3) 専用回線で提供しているデータベース

SFCでは金融関係の研究会やデータ分析の授業などで各種統計データを加工するといったレポートが学生に課されるため、株価、為替などの数値データベースの需要が多い。これに応じて速報性の高い市況情報データベースである「QUICK-IS」を導入し、データベース検索コーナーの専用端末1台で提供している。

4) ローカルサーバで提供しているデータベース

現在、三田メディアセンターにローカルサーバを置く、「朝日新聞Digital News Archives」、「Web of Science」、「MLA Bibliography」を提供している。また、SFCのローカルサーバでは「大和総研データベース」、FAMEソフトを介した「日経NEEDSデータベース」を提供している。前者は月1回、後者は年1回更新を行っている。これらは館内のデータベース検索専用端末から検索するようになっている。なお、日経NEEDSについてはCNSに接続したワークステーションからのアクセスも可能である。

2. 利用者へのサポート体制について

データベース全般については1994年度よりデータベースコンサルタントの学生を中心となって毎年「SFCデータベースガイド」を作成している。また、SFCメディアセンターのホームページ上(<http://www.sfc.keio.ac.jp/mchtml>)の「データベース」の中で各種データベースについて概説し、インターネット上のデータベースはそこから直接アクセスできるようにしている。なお、最新情報については毎月、上記ホームページ上の「メディアセンター・ITCニュース」で広報している。なお、同ホームページ上に「SFCデータベースガイド」のWeb版も1995年版より搭載している。

利用者向けのセミナーとして、春・秋学期には主に初心者を対象にテーマ別のデータベースセミナーを企画・開催している。個々のデータベースについては学期期間中に月1回、外部講師を招いてデータベースセミナーを行い、これまでにFirst Search、DIALOG、Web of Science、PolicyFileなどを紹介してきた。

また、館内のデータベース検索コーナーでの利用者へのサポートはレファレンス専任スタッフと学生コンサルタントとで行っている。

3. 今後の課題

ネットワーク経由の大型商用データベースの全般的な共有化がますます進んでいく中で、書誌データベースについては利用者がメディアセンターに直接来館しなくとも利用できるように整備されてきている。それに伴い、データベースに関してレファレンスデスクで直接利用者から受ける質問は減少し、むしろ電子メールでの対応が中心となりつつある。データベースの利用状況をどのように把握していくか、また「目に見えない」ユーザーへのサポート体制をどうするかについて今後検討していかなければならない。

一方、SFCがデータベース導入当初から重点を置いてきた統計データベースについては、ほとんどが館内の専用端末での利用に限定されているという事情から、館内での利用者のデータベースの需要はこれらに集中する傾向がある。そのため統計データベースについてはスタッフが利用者に的確なアドバイスができるよう、個々のデータベースの特性や操作方法についての知識や技術を高める必要があると思われる。

おわりに

インターネットの普及により、利用者が情報検索の技術を特に必要とせず、情報を得ることができるようになった。それに伴い、今後メディアセンターでは外部の商用データベースの動向を常に意識しながら、さらに利用者のニーズに合わせたデータベースが提供できるようなシステムづくりや効率のよい情報収集のための道案内役として利用者をサポートしていくことがますます重要になってくると思われる。

ティールーム

国境を越えたある日本人の手紙から

のみやま てつお
野見山 哲生
(医学部助手)

挿啓

日本はもう秋の装いでしょうか。先生におかれましては益々御清祥のこととお慶び申し上げます。「5月はベルギーの最も良い季節。もう少しの辛抱。」と、観光にはまず選ばれない暗くて寒い11月に単身ベルギーへ渡った哀れな私は、ラボの皆に励まされながら春を迎え、木々の緑の美しさ、木の葉の間からこぼれる日差しに感動しましたが、今まで日1日短くなる日照時間と木の葉の色づきに秋の訪れを感じています。こちらブリュッセルは、私の来伯と時を同じくして通貨統合、コソボ空爆に揺れ、EU、NATO両本部所在地として注目を集めました。またその後PCB汚染飼料問題、コカコーラ問題も起こったことはすでに御存知のことと思います。渡伯1年が過ぎてこちらで来年度の新規グラント取得までは順調ですが、ベルギーでは書類手続きが煩雑で、これから何ヶ月もかけて、IDカード、就労許可証の延長手続きをしなくてはいけません。

さて、ベルギーは人口1000万人の小国ですが、首都ブリュッセルはEU、NATO両本部を持つ政治的重要拠点です。しかし欧州での統合を推進する先頭に立つ一方、国内ではフランス語、オランダ語を話す人々による言語論争のため、言語圏を基本とする社会文化共同体政府（オランダ語、フランス語、ドイツ語）と、言語圏にはほぼ一致したフランダース（オランダ語圏）、ブリュッセル（首都圏）、ワロン（フランス語圏）といった地域政府で連邦を構成し、連邦は王を戴き立憲連邦君主制の形態をとっているそうで、こちらの教授をして「自分には複雑すぎて説明するのは困難」だそうです。自国での複雑な状況は他の国家間で起こる諍いに対して寛容にさせるのでしょうか？かくいう私の留学先Université Catholique de Louvain（ルーヴン大学）はオランダ語圏Leuvenにある1425年設立のKatholieke Universiteit Leuven（ルーヴェン大学）から1970年フランス語民が分離させた大学です。事実上の大学分離の際には、所蔵の図書は登録番号下一位奇数をルーヴェン大学、偶数をルーヴン大学へと振り分けたそうです。一体どうなっているのか……



こちらで気付いたことですが、女性、特に既婚者の働く姿が多々目にとまります。女性の就労率は政府の統計では日本のそれと余り違いはなく、中央・地方行政機関、小売・飲食店、事務所、薬局、病院等々、職種により男女比率は確かに異なるのですが……研究室にも、殊に子供のいる女性が元気に働いており、同僚ポスドク2名は産後わずか4ヶ月目で職場復帰しました。彼女たちの就労を支える一つに、街の至る所にある言語圏共同体が運営する無料託児所があげられます。託児所には、朝8時前から母親、父親が首の据わって間もない乳児を預けに来ます。さらに就業・雇用形態も多種多様だそうで、これも彼女たちの就労を支えているそうです。現在4人目の子供を身ごもっている女医さんは9時から15時まで、2人の小さな子を持つ秘書

の1人も午後1時までの契約で、1時を過ぎるとさっさと帰宅してしまいます。しかし彼女達の就労を支えるものはそればかりではないようです。「飲もう。そして人生を語ろう。」が口癖のポスドク仲間の米国留学は、同じくボ

スドクの夫人の留学先が同じ研究施設にあることが必須と言っていました。彼のモットーは「私の幸せ。それは妻が幸せであること。」だそうです。上司たちも1ヶ月の夏季休暇の半分は平素働く夫人の為に家のペンキ塗り等家事をこなしたそうです。5月の家内来伯の折りに主任教授が「奥さんは歯科医でポスドクだったね？歯学部に紹介しようか。」と言っていたのも頷けます。女性の社会進出に何より大切なのは社会の理解はもちろん夫の理解が一番大切なかもしれません。先生いかが思われますか？

さて、全種制覇をもくろむ400種類のベルギービールと生ムール貝。第2の祖国ベルギー2年目の厳しい冬を快適にしてくれるには充分です。是非ブリュッセルにお立ち寄り下さい。家内と2人、この手紙が着く頃には家族が1人増えて3人ですが、楽しみにお待ち申し上げております。くれぐれもお身体には御自愛下さい。またお便りします。

敬具

カリフォルニア大学サンディエゴ校との交換協定について

かとう よしろう
加藤 好郎

(三田メディアセンター事務次長)

先日、医学部の学生が退学になった。医学生は「なぜ医師になろうとしているのか」を自分自身に深く問いかける必要がありそうだ。米国では、医師になるためには4年制の大学を卒業して医学部へ進む。そしてこの間、適正を見るために、長期にわたる面接も行なわれる。

米国では、ライブラリースクールも修士レベルで始まる。「なぜ図書館員になるのか」と云うはっきりとした意志のもとで専門職としてのライブラリアンが輩出される。

専門職としてのライブラリアンの知識・技能・感性を学ぶためにスタッフを米国に派遣し、同時にプロフェッショナルな図書館員を受け入れ、そのコンセプトを学ぶことで意識改革ができないか以前より模索していた。

1997年6月22日から米国のカリフォルニア大学サンディエゴ校（以下UCSD）で環太平洋電子図書館会議が開かれた。会議には、米国、カナダ、中国、台湾、日本、韓国、メキシコ、オーストラリアの8カ国、14機関が参加し、日本からは、慶應義塾大学と国文学研究資料館が参加した。会議の結果、環太平洋の図書館の相互貸借、人的連携、電子図書館戦略計画等を取りまとめる事で終了した。因みにこの会議の2回目は今年の4月に開催された。

第1回目の会議に参加する際、慶應としては「図書館員の交換協定について」UCSDと話し合いの場を持つつもりでいた。このことについて、当図書館長であったLOWELL氏と国際関係のチーフであるLO氏が対応してくれた。それから2年たった今年の3月に「交換協定」は締結された。

図書館員の交換について「協定」を結びたかったのは次の理由による。慶應からは、シカゴ大学、カリフォルニア大学バークレー校、ロスアンジェルス校、サンディエゴ校、ラットガース大学等の図書館に職員を派遣した実績、および米国から1名の受け入れをした実績が過去にあった。しかしながら、協

定がないために、受け入れ側の都合で研修先が決められてしまったり、派遣のための人選方法が明確でなかったり、また、慶應側としては出す一方で、相互交流の効果が図書館としてはあまりみられなかつた等の問題があった。

これらの事を鑑みて、協定は次の内容になっていく。

[慶應からの派遣]

研修期間：6ヶ月。

半年でも充分に派遣効果が上がること、および、現場から1年抜けることは居残り組みに負担が残る。

研修場所：UCSDのメインライブラリーである Geisel Library。東アジア関係の図書館では、場所こそ違えど日本と同じような環境のために海外で研修をする意味があまりなく、語学やプロフェッショナルイズムを習得することができにくい。このため、メインライブラリーの一員として業務を遂行しながら、専門職の意識を学んでもらう。

研修内容：レンタル業務とドキュメントデリバリーサービスを中心に研修する。ただし、本人、各地区メディアセンターの希望は尊重する。

旅 費：往復旅費の実費を慶應義塾が負担する。

宿 舎：UCSDの学生寮あるいは近辺の宿舎とする。

生 活 費：義塾の給与

研修人数：年間2名

健康保険：加入のまま

保 險：一種の海外出張に準じる傷害保険料は義塾負担

支 度 金：5万円

[UCSDからの派遣]

研修期間：3ヶ月。米国の雇用形態により3ヶ月が限度とされている。

研修場所：UCSDの希望によって決定するが受け入れ窓口はメディアセンター本部。

研修内容：UCSDの希望を優先するが直接サービス部門が望ましい。

宿 舎：慶應が提供する。

生 活 費：UCSDが負担。

給 与：慶應からは支給せず。

研修人数：1名から2名。

そ の 他：必要経費は（出張交通費等）所属長の判断により認める事もある。

この協定は2001年までとしている。その理由は、順調にいけば4名がこの協定によって研修をうけることになるが、同じ大学ということで、新鮮さ（緊張感）を保つことができない点、また、UCSDから継続的に派遣することが難しい点にある。

今後は、米国東海岸、ヨーロッパ等広く交換協定の可能性を追求しながら、実績と成果を踏まえたうえで、研修内容の充実、拡大、見直しを計っていかたい。

五十住さんを迎えて

おおはし ふみこ
大橋 史子

(三田メディアセンター係主任)

UCSDとの交換協定締結後の今年4月、初めての交換派遣職員として、五十住早苗（いそずみ さんえ）さんが三田メディアセンターに着任した。

受入の期間は6月末までの3ヶ月間で、その間、見学等に関する手続き上の補助をする目的で、情報メディアサービス（当時）の藤井康子と筆者がホスト役を引き受けることとなった。

五十住さんは日本に生まれ、国内の大学を卒業後、アメリカへ渡った方である。

UCSDでのキャリアは、日本語資料の整理を担当するLibrary Assistantとして始まり、途中UCLAで学位を取得し、98年からはUCSD内のInternational Relations/Pacific Studies Libraryで、Japanese Studies Librarianとして勤務している。

「非常に温厚な方」というのが五十住さんの初対面の印象である。しかし来日にあたっての目的、訪問先などは既に自ら検討済みで事前準備もほぼ整つており、こちらとしては殆ど出る幕などない状況だった。

相互貸借業務に特に興味がある、ということだったので、三田メディアセンターのILL担当内に席を設け、スタッフと話をし易いようにした。（当初は、アメリカの図書館員を受け入れることにより、スタッフが英会話に親しむことも目的のひとつと考えていたが、今回は日本人同士、敢えて英語で話すのも不自然、ということで、結局は日本語ばかりでの会話となった。）

3ヶ月間のメニューとしては、慶應の各メディアセンターや近隣の大学図書館・関連研究機関の見学が主となった。UCSDのLibraryでは、明治期以降を中心に日本学資料を収集しているため、資料の入手と休暇を兼ねて、おひとりで京都へも足をのばした。

ご本人の希望で、カウンター業務などの実務にはあたらなかったが、三田メディアセンターの活動を知っていただくという意味で、ライブラリー・オリエンテーションやスタッフが担当する学部の授業への参加などを企画した。また5月の早慶図書館ソフトボール大会にも、応援に来ていただき、同月行わ

れた神宮での早慶戦も観戦された。最終月の6月にはスタッフが行っている私的研究会で、UCSDでの雇用制度、給与等についてのお話をしていただいた。

事故も無く、あっという間の3ヶ月だったが、振り返れば、今回自分がホスト役として、五十住さんに十分な手助けができたかどうかはまだ疑わしい。ご本人が言葉に不自由なく、一人でスケジューリングできる方であることに甘えて、お任せしてしまうことが多かった。

「協定」である以上は、相互にプラスがあってほしい。

研修最後の日、五十住さんの挨拶の中で、三田メディアセンターについては過分な評価をいただいたが、交換協定自体については、派遣する側と受け入れる側の双方で、実績を重ねながら、より充実したものにしていかなければならぬと思った。

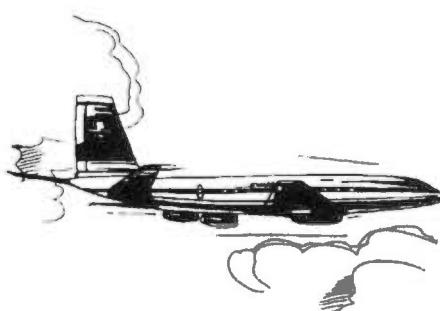
交換派遣職員（UCSD：五十住早苗）見学先一覧

- 4/3 来日
4/5 三田メディアセンター内見学
4/13 (授業参加) レファレンスサービス論
4/20 (授業参加) レファレンスサービス論
4/21 日本出版貿易、
　　一誠堂と神保町周辺の古書店
4/23 東京国際ブックフェア（お台場）
4/27 (授業参加) レファレンスサービス論
4/28-4/30 (京都) 人文研 日文研

5/10 日吉メディアセンター
　　理工学メディアセンター
5/11 国立国会図書館
5/12 学術情報センター
5/18 医学メディアセンター
5/19 湘南藤沢メディアセンター
5/20 学術情報センター
5/21 国立公文書館
5/25 (授業参加) レファレンスサービス論
5/26 来日中のUCSD facultyと面談

- 5/27 國際文化会館図書室
5/30 早慶戦観戦
5/31 国文学研究資料館

6/1 (授業参加) レファレンスサービス論
6/7 東京大学経済学部図書館
　　社会科学研究所図書館
6/8 (授業参加) レファレンスサービス論
6/9 東京大学付属図書館
　　社会情報研究所図書館
6/10 日本労働研究機構資料センター
6/11 早稲田大学中央図書館
　　演劇博物館図書室
　　高田早苗図書館
6/14 早稲田大学 (UCSD Faculty の案内役として訪問)
6/16 國際交流基金図書館
　　米国議会図書館日本情報資料センター
　　Art Catalog Library, Japan
6/17-21 (奈良) 天理大学図書館、
　　(名古屋) 名古屋大学図書館
6/22 (授業参加) レファレンスサービス論
　　送別会
6/23 湘南藤沢メディアセンター
6/24 國際交流基金日本語国際センター
6/28 帰国



英国電子図書館事情

まつもと かずこ
松本 和子

(三田メディアセンター係主任)

1999年7月10日から7日間、人事部主催の職員英国研修に参加する機会を得て、British Library(以下BL), University of Loughborogh(以下ラフボロ大学)のPilkington Library(以下PL), Cambridge UniversityのUniversity Library(以下CUL)に電子図書館プロジェクトの視察に行くこととなった。今回の研修は人事部の研修のためテーマは図書館向けであったが、参加者はメディアセンターのスタッフだけではなく他の部署からの参加者が半数近くを占めることとなった。そのため電子図書館について図書館員以外の視点から視察すること(金色の情報コンセントとか、図書館の防火扉の数とか)もでき、興味深かった。

1. 電子図書館プロジェクト

初めに英国大学図書館の電子図書館プロジェクトの概要をまとめておく。1993年「大学生数の増加と図書館資源の有効利用の解決にIT(Information Technology)を駆使することが不可欠である」としたFollett Reportの勧告を受け、JISC(Joint Information System Committee)が、1995年から開始したプロジェクトがeLib(Electronic Libraries Programme)である。eLibの特徴は新たな「電子図書館」の構築を目指すのではなく、図書館が提供する電子情報と既存の図書館蔵書へのアクセスと、学習支援やトレーニング等のサービスにITを応用し、そこにどんな可能性があるかを探り出すことを目的とし、全国から応募された多数の機関に研究を分散させたことがある。これまでに60以上のプロジェクトで研究が行われている。'95年から第3段階に入り、これまでの研究成果を集大成するプロジェクトが進行中である。伝統的な図書館と電子図書館を融合化するHybrid Libraries, z39.50による広域的OPACの統合を行うClumps, デジタル情報源の保存方法の確立を模索するDigital Preservationの3分野の研究がなされている。

BLはこのプロジェクトにスポンサーあるいはパートナーとなって関与しているがBL自身も独自の電子図書館プロジェクトを持っている。

2. 英国図書館

BLのSt.Pancras新館は計画から30年以上の歳月をかけ、1997年秋にオープンしたばかりである。チャールズ皇太子には“a dim collection of brick sheds groping for significance.”(煉瓦の寄せ集めで作ったやたら大きな建物)と気に入れられなかつたようだ。

自動図書出納システムや、東洋コレクションの閲覧室の見学、IT担当者のプレゼンテーションの後、BLの電子図書館の取組みについてNeil Smith氏のプレゼンテーションがあった。BLの考えている電子図書館とは「現存する電子媒体の収集・提供・保存」と「ITを活用してBLが所蔵する全ての資料に最大限のアクセスを提供」が目的であり、既存の紙媒体資料を電子化して保存・提供することは考えていないという話があった。電子媒体にする技術はあっても長期保存する技術が確立されていなくては意味がないからだそうだ。

プロジェクトは現在この目的を達成する電子図書館システムを構築する段階に入っている。システム開発は民間と共同開発するため、BLのホームページ(<http://www.bl.uk/>)にシステムの詳細仕様要求が書かれている。主なポイントは電子情報の蓄積と長期保存のための技術(NASAを中心に進めているOAIS: Open Archival Information Systemというデータをオブジェクト化し、メタデータを付与するシステムが例に挙げられている)に対応できること、WebOPACで紙と電子情報について意識することなく検索ができること、電子的な著作権処理(ECMS: Electronic Copyright Management System)や課金等に対応できるよう、トランザクションの保存・検索機能を持つことが必要とされて

いる。ちょうど我々が訪問した数日前に応募が締め切られたところで、約50機関からの申込みがあったそうである。これらの中から8月中に7~8機関に絞りこみ、更に12月1日に最終入札を行い2000年4月にシステムが稼動する予定である。この他国内外の既存の電子図書館プロジェクトとの連携、国内の電子情報をくまなく収集するために法律の整備(電子媒体情報納本制の確立)、また電子情報を提供するため出版者等と交渉してBL向けの著作権料支払やライセンスの設定を行っていく予定だそうだ。ただ法的な問題をクリアするのは簡単ではないのでシステムは完全な形でのスタートはできないであろうとのこと。目に見える変化としては、WebOPACからも図書の出納のリクエストが出せるようになるそうである。

3. ラフボロ大学図書館

ラフボロ大学は英国の中ではNew Universitiesと分類される新設大学のひとつで、1963年大学の進学率の上昇と科学技術教育の必要性から出されたRobbins Reportにより、上級技術教育機関(CAT: College of Advanced Technology.)から大学に昇格した機関である。優秀なスポーツ選手を輩出し、英国内の数々の大会で優勝していることで有名である。PLはeLib第1段階でElectronic Short Loan projectsの一つAcorn(Access to Reading via Networks)の実験が行われた図書館である。プロジェクトの内容はWeb上に公開(<http://www.acorn.lboro.ac.uk/>)されているが、簡単に紹介すると、指定図書のうち雑誌論文の全文を電子化しWebページに載せ、授業受講者のみが画面で見たり、印刷することができるシステムである。大学のホームページから教授名、授業名、参考図書一覧とたどっていくと、各資料はOPACとリンクし請求記号と貸出状況がわかる他、雑誌論文を見る場合はID・パスワードを入力するようになっている。

電子化作業は勿論のこと、Webで提供するための著作権処理については、ほぼ1件毎に出版社と交渉したということが報告されているので、今回の視察ではその辺の実状、苦労話を聞けるかと期待していたが、先方がアレンジしてくれた図書館の訪問時

間が1時間弱と短く、またこのプロジェクトに関わったスタッフはPLの図書館員ではなく、このプロジェクトのためだけに採用され既にPLにはいないということで残念ながら話しを聞くことはできなかつた。

館長のMary Morleyさんは、Acornは学生には非常に好評であったが、電子化、著作権の許諾を得る作業が時間的にも金額的にも大変だったので、プロジェクト予算がなくなった現在は、一切このサービスを導入する予定はないと断言していた。なおラフボロ大学はeLibの他のプロジェクト、FIDDO(Focused Investigation of Document Delivery Option:電子媒体のドキュメントデリバリーの方法と管理)、CLIC(Consortium Electronic Journal Project:英國王立化学協会誌、Chemical Communicationの電子出版開発)にも参加したことが知られているが、実際は情報科学学科が参加していて、図書館は一切関係していないということだった。

4. ケンブリッジ大学図書館

CULは6つある英国内の納本図書館の一つで、蔵書数は600万を超えており、書架の狭隘化はいすこも同じで、見学案内してくださった方も「倉庫のようでしょう」と恐縮していた。CULはeLIBプロジェクトのCEDAR(CURL Exemplars in Digital Archive:電子媒体資料の保存に関する研究)に参加している。これは現在流通している電子情報の長期保存のため、政策・技術の両面を探るプロジェクトである。CEADERでも電子情報保存のため技術的にはOAISモデルについて研究をしているようである。CULの担当者から残念ながらプロジェクトは未だ結論・成果が出ていないので殆どお話しすることはないとと言われた。技術的問題だけではなく、デジタル化には法律・政策上の問題が大きく立ちふさがっているようだ。

CULの見学の後、Downing Collegeの古典学科図書館のJudith Waringさんから、現場の図書館員の立場から電子情報への対応と評価についてプレゼンテーションがあった。OPACにURL付の書誌情報を入れることに対する不安、電子化された資料と紙媒体とでフォントによる見た目、引用・リンクの混在による著作物の同一性確保の難しさ、OSによる不

具合、利用者および図書館員へのIT技術の研修をどうするか等々電子図書館を実現するにはまだ多くの問題があることが挙げられた。

5. まとめ

今回の視察の中で訪問先の図書館の人たちから必ず出てくる言葉は「私たちは電子図書館を目指していない。Hybrid Libraryを目指している。」であった。そして短期的には図書館が所有する全情報への「アクセス」を最大限にするためにITが必要なのはよく分かっているが、それでも電子情報やITの行方についてはかなり慎重に見守る姿勢であることが伺えた。慶應でもここ数年でかなりの量の電子媒体資

料を受入れるようになってきたし、インターネットでアクセス可能なデータベースや電子ジャーナルの導入も本格化してきている。これらの資料を従来の紙の資料とともにどのように利用者に提供し、保存していくかはまだその方向性を探っている状況である。日米で行われている電子図書館プロジェクトはまだまだ実験の段階で、電子図書館がいったい何者なのか、電子出版がどうなっていくか、図書館の将来はどうなるのかは当分結論は出てこないだろう。今回の視察を通して日本も英国も現状はあまり変わらないのだということ、Hybrid Libraryという言葉は大学図書館の現状をうまく表現している言葉だなと感じられたことが収穫だったと言えるだろう。

小展示ニュース

〈三田メディアセンター〉

- 平成10年11月26日～
土方巽アーカイブ
- 平成11年7月16日～8月23日
高校教科書に見る古典
- 平成11年9月9日～
明治時代の鉄道錦絵

〈医学メディアセンター〉

- 1. 常設展示**
 - [医学メディアセンター展示ケース]
 - 1.1 日本医学史に登場する古医書
 - (平成10年9月9日～11月30日)
 - 第4部 専門医家の登場
 - 第5部 実証的医学の先駆者 永田徳本
 - 1.2 食養研究所跡地記念碑完成記念展示
 - (平成11年3月24日～3月31日)
 - 1.3 蘆原信之氏医学ノート（明治20年頃）
 - (平成11年5月21日～6月30日)

2. 特別展示

- 2.1 新年祝賀展示 [新棟11階ロビー]
 - (平成11年1月5日～1月31日)
 - ・「慶應義塾大学医学部ペナント」
 - ・「第二次国際微小重力実験室計画参加記念額」
 - (第一回 向井千秋氏宇宙飛行)
 - ・「同上記念写真一組」

スタッフルーム

小さな美術書との出会い

やま だ ま や
山田 摩耶

(日吉メディアセンター)

仲のいい友達と美味しいものを食べながらお喋りする、部屋で大好きな音楽をかけながら雑誌を見る、展覧会を観に行ったり、歌舞伎のお芝居を観たり,,, と私の息抜きを挙げようと思えばきりがない。

その中でも、学生の頃から続いている息抜きの一つとして、気に入った洋書店を度々覗くというのである。元々、展覧会カタログだとか絵本など視覚的に楽しめる本をよく購入する方で、私の本棚にはメディアセンターで大型図書に分類されるような本が多い。そのため、洋書店の中でも美術書や料理、インテリア分野などの本を充実させている店が気に入っていて、仕事の帰りに渋谷のBunkamuraや青山にある洋書店を一人で覗いては、様々なデザインの表紙の洋書を気ままにめくって時間を忘れて楽しむことがある。

気に入った本があまりにも重い場合は自宅に送ってしまうが、大抵は重いのを我慢して、日頃閲覧業務で培われて不必要についてしまった腕の筋肉を使って自宅まで持ち帰る。

自分の楽しみのつもりで本を購入する場合がほとんどだが、友人へのちょっとしたプレゼントに、写真や絵の綺麗な洋書を買い、カード添えて贈ることもある。最近、海外へ旅立つ友人に簡単に作れる軽食類の料理本を贈ったら、早速本を見ながら作ったという嬉しい返事が届いた。

ただ、先ほど述べた洋書店は場所の関係もあるのか、割と狭い店内の中で同じ年ごろの人気がひしめき合っていて、一人のんびりと時間を過ごせなかったりする。そこで本当に息抜きしたい時には、国立にあるお気に入りの洋書店を覗く。

春は桜、秋は銀杏で美しく彩られる大学通りに面した、小さな小さなその書店には、近くに大学があるためか、経済学や法学分野の図書が店内の壁いっぱいに並べられていて先生や学生が熱心に本を探している。文学部美術史学出身の私は学生に混じってそんな難しい分野の本を

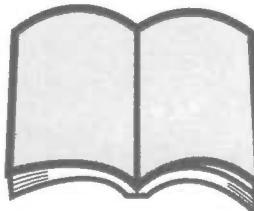
探すことは勿論ないが、大学の古い図書館のような雰囲気のあるその店内には美術書、絵本類なども置かれているので、よく覗かせてもらっている。奥にはいつも着物姿の店主であるおばあさんが座っていて、しっかりとした口調で、店内の本についての先生や学生の質問に答えている。

去年の冬、いつものように店を覗くと片隅に古書コーナーが設けられ、何冊かの古本、絵本などの初版本やリトグラフも並べられていて、ついそこに足が向いてしまった。

初版本などは挿絵がとても綺麗だが、価格を見ると大抵は手が出せない。しかし、その中で手頃な価格で表紙の綺麗な薄い本が見え隠れし

ていたので、それを取り出し中を開いてみた。数ページ分しかない、手のひらサイズのその本は、表紙に「Bible Gem Series」と書かれ、聖書の「Charity」の部分のみを抜粋したものらしかった。読み物というより常に携帯しておくようなものなのだろう。中をみると挿絵が綺麗に描かれていたのだが、文章も一文字ずつコバルトブルーや赤、金などのカラーの飾り文字で、非常に美しかった。

小さな美術書を見つけた喜びでこれを手にし、早速レジへ向かうと、店主のおばあさんに様子を見られていたらしく、この本の挿絵が当時有名な挿絵画家のものだと教えてくれた。その画家の挿絵が載った他の本も紹介してもらい、しばしの間歓談していたが、表紙の内側に手書きのメッセージがあるので見つけた。今から約1世紀も前の1905年のクリスマスに、ある女性から男性に贈られたものだった。綺麗な本を見つけただけでも嬉しかったのに、さらに店主と語らい、この本に刻まれた1世紀前の歴史を垣間見ることができたのは、今までの自分と本との出会いの中でも思い出に残る貴重なものだ。メディアセンターのスタッフとして働く今、その店主のような存在になり、利用者と一緒にそんな本との出会いをいつかしてみたい。



メディアネット・メディアセンターに関する書誌

1998.8～1999.7

- “(イブニングマガジン) 慶應義塾(1) ゲーテンベルグ聖書 デジタル画像で再現” 産経新聞・夕刊 1998.10.5
- “高宮利行さん ゲーテンベルグ聖書をデジタル画像にする(ひと)” 朝日新聞・朝刊 1999.1.23
- “[四十二行聖書]のデジタル化 印刷の「原点」保存(单眼複眼)” 朝日新聞・夕刊 1999.3.9
- “慶應義塾大学 — ゲーテンベルグ聖書を活用し ‘世界の慶應’へ飛躍を図る(特集 役に立つ大学 1999年版人事部長が選ぶ新大学ランギング — 追跡 話題になったあの大学の変身と転身)” 週刊ダイヤmond. No.87. 1999.4.10

- “故・井筒俊彦氏の「文庫」開設 – 慶應大学、イスラム関係など1万冊” 每日新聞・夕刊 1999.6.1
- 牧野和夫, “慶應義塾 三田メディアセンター蔵『聖徳太子伝絵』中・下2冊解題・翻刻” 絵解き研究. No.14. 1998.12. p.35-75.
- “SOHO 渡邊朗子(コメンタリー・21世紀を読む) 出会いの機会が限られる受、発注者 地域に情報環境を備えた公的施設を” アエラ 1998.9.14. p.65
- 渡邊朗子, “大学のメディアセンターにおける利用者の電子情報活動と物理的環境に関する考察”, 日本建築学会計画系論文集. No. 510. 1998.8. p.147-154.

スタッフによる論文発表・研究発表

1998.8～1999.7

[論文発表]

[三田]

- 平野真紀, “ケンブリッジでの語学研修を終えて”, **塾監局紀要**. 25号, 1998.9. p.52.
- 市古健次, “ジョン・ニューホフ『オランダ東インド会社派遣使節中国紀行』(ミュージアム)”, **三田評論**. No.1006, 1998.10, p.94-95.
- 市古健次, “RBMS大会とニューベリー図書館”, **ピヌス**. 46号, 1998.10, p.24-29.
- 榎澤康子, “図書館情報学における情報概念：一般語としての英語のinformationとの比較に基づいた考察”, **論集・図書館情報学研究の歩み・第18集 図書館情報学のアイデンティティ**, 日本国書館情報学会研究委員会編, 東京, 日外アソシエーツ, 1998. p.72-94.
- 金子康樹, “資料レベルに年齢の制限を設けず確かな情報ソースをインターネットの核に(企画, インターネットの教育利用の実践のために)”, **School Amenity**. Vol.14, No.7. 1999.7. p.92-96.
- 金子康樹, “大学図書館の新たなサービスのためのマーケティングについて(特集:図書館のマーケ

ティング)”, **情報の科学と技術**. Vol.49, No.2, 1999.2. p.79-82.

金子康樹, “Practical digital libraries: books, bytes & bucks (書評)”, **医学図書館**. Vol.45, No.3, 1998.9. p.371-372.

加藤好郎, “Re-Engineering of Keio University Library”, **Proceedings of the International Conference on New Missions of Academic Libraries in the 21st Century**. 1998.10. p.211-215.

古賀理恵子, “資料紹介 [全文検索－技術と応用ー]”, **専門図書館**. No.173, 1999.1. p.48.

村上篤太郎, “書評「情報管理・機器論」”, **情報の科学と技術**. Vol.49, No.4, 1999.4, p.213.

村上篤太郎, 河野江津子, “統計の読み方：総論”, **情報の科学と技術**. Vol.49, No.6, 1999.6. p.309-313.

村上篤太郎, “統計の読み方：人口編”, **情報の科学と技術**. Vol.49, No.7, 1999.7. p.358-365.

中村亜日香, “データベースと利用者－その仲立ちとしてのレファレンス担当者”, **私立大学図書館協会会報**. No.112, 1999.7. p.90-96.

[日吉]

平尾行蔵, 白石幸男, 布目和美, 静谷裕美子. "大規模大学の1~2年生に対する情報リテラシー教育とメディアセンター". **大学図書館研究**. No.54, 1998.12, p.33-42.

[信濃町]

市古みどり. "Web of Science はどう使うか". **医学図書館**. Vol.46, No.1, 1999.3, p.36-41.

市古みどり. "インターネット情報源へのアプローチ". **Medical Forum CHUGAI**. Vol.3, No.4, 1999.7, p.44-52.

[研究発表]

[三田]

加藤好郎. "現在の資料組織法について". 私立大学図書館協会パブリック・サービス研究分科会合宿. 1998.9.3-4 於 東洋大学箱根セミナーハウス

加藤好郎. "Re-Engineering of Keio University Library". 北京大学創立100周年記念国際図書館会議. 1998.10.26 於 北京大学

加藤好郎. "選書業務とは:慶應義塾図書館選書基準を中心に". 私立大学図書館協会パブリック・サービス研究分科会. 1998.11.11 於 鶴見大学

加藤好郎. "Present state and future perspective of document delivery services in Japan: focused on private university libraries". 日米両国におけるドキュメントデリバリー・サービスの改善に関するラウンドテーブル. 1999.2.8 於 東京ガーデンパレス

加藤好郎. "英国における電子図書館構想". 私立大学図書館協会パブリック・サービス研究分科会. 1999.5.12 於 相模女子大学

加藤好郎. "デジタル情報の利用と蔵書構築". 私立大学図書館協会東地区部会研修会. 1999.6.17 於 獨協大学

加藤好郎. "ネットワーク時代の図書館運営". 文部省平成11年度学校図書館司書教諭講習会. 1999.7.29 於 都立晴海総合高等学校

村上篤太郎. "ナレッジ・マネジメント". 私立大学図書館協会パブリック・サービス研究分科会. 1999.7.7 於 慶應義塾大学 三田メディアセンター

中村亜日香. "データベースと利用者-その仲立ちとしてのレファレンス担当者". 私立大学図書館協会東地区部会レファレンス研究分科会. 1998.12.21 於 専修大学生田校舎

[日吉]

平尾行蔵. "慶應義塾大学日吉メディアセンターにおける情報リテラシー教育". 神奈川県内大学図書館相互協力協議会 平成10年度第2回実務担当者会. 1998.11.13 於 フェリス女学園大学緑園キャンパス

[信濃町]

市古みどり. "認定輸血検査技師のためのインターネット活用法". 第6回日本輸血学会秋季サテライトシンポジウム. 1998.11.27 於 東京国際展示場

市古みどり. "看護文献の検索". 健和会臨床看護研究所研修会. 1999.6.8 於 健和会臨床看護研究所

年次統計資料〈平成10年度〉

1. 図書費<平成10年度実績及び11年度予算>

慶應義塾大学メディアネット

内訳 各地区メディアセンター	平成10年度実績<単位:円>			平成11年度予算<単位:千円>		
	図書支出	図書資料費	計	図書支出	図書資料費	計
三田メディアセンター	656,158,857	70,507,399	726,666,256	693,910	74,983	768,893
〃	306,404,721	70,507,399	376,912,120	303,093	74,983	378,076
指定寄付金	1,835,929		1,835,929			
学部*	347,918,207		347,918,207	390,817		390,817
(私大研究設備相当額)	(27,793,622)			(27,817)		
日吉メディアセンター	173,444,401	13,558,015	187,002,416	175,131	15,373	190,504
〃	60,909,502	11,056,071	71,965,573	60,150	12,877	73,027
指定寄付金						
学部*	112,534,899	2,501,944	115,036,843	114,981	2,496	117,477
(私大研究設備相当額)	(7,481,317)			(16,095)		
医学メディアセンター	188,569,737	6,709,012	195,278,749	209,800	21,314	231,114
〃	188,569,737	6,709,012	195,278,749	209,800	21,314	231,114
理工学メディアセンター	187,290,162	26,205,612	213,495,774	200,743	30,630	231,373
〃	187,290,162	26,205,612	213,495,774	200,743	30,630	231,373
指定寄付金						
(私大研究設備相当額)						
湘南藤沢メディアセンター	156,482,943	50,145,707	206,628,650	161,000	50,032	211,032
〃	156,482,943	50,145,707	206,628,650	161,000	50,032	211,032
合計	1,361,946,100	167,125,745	1,529,071,845	1,440,584	192,332	1,632,916

注) 1. *印 特別図書費は含まない。

2. (私大研究設備相当額)は合計欄に加算しない。

2-1. 蔵書統計<年間受入及び所蔵冊数>

内訳 各地区メディアセンター		単 行 書			製 本 雜 誌			合 計
		和	洋	計	和	洋	計	
年 間 受 入 冊 数	三田メディアセンター	11,984	15,128	27,112	4,580	8,169	12,749	39,861
	図書館			0				0 0
	学 部			0				0 0
	日吉メディアセンター	11,984	5,512	17,496	2,121	1,648	3,769	21,265
	図書館			0				0 0
	学 部			0				0 0
	医学メディアセンター	961	749	1,710	1,295	5,856	7,151	8,861
	理工学メディアセンター	1,367	527	1,894	1,210	3,286	4,496	6,390
合 計		21,941	9,137	31,078	6,782	13,211	19,993	51,071
所 蔵 冊 数 累 計	三田メディアセンター	769,489	850,818	1,620,307	218,562	220,983	439,545	2,059,852
	図書館			0				0 0
	学 部			0				0 0
	日吉メディアセンター	356,723	177,394	534,117	46,664	59,411	106,075	640,192
	図書館			0				0 0
	学 部			0				0 0
	医学メディアセンター	44,622	44,736	89,358	68,446	146,219	214,665	304,023
	理工学メディアセンター	64,843	35,034	99,877	47,989	133,151	181,140	281,017
合 計		1,350,692	1,189,391	2,540,083	409,981	582,222	992,203	3,532,286

注) 1. 三田メディアセンター・学部には図書館・情報学科の製本雑誌を含む。
 2. 今年度より非図書資料は含まない。

2-2. 蔵書統計<逐次刊行物：タイトル数>

内訳 各地区メディアセンター	カ レ ン ト			ノン カ レ ン ト			カレント・ノン カレント合計
	和	洋	計	和	洋	計	
三田メディアセンター	5,959	4,745	10,704	5,935	3,752	9,687	20,391
図書館							
学部							
日吉メディアセンター	940	858	1,798	1,182	1,574	2,756	4,554
図書館							
学部							
医学メディアセンター	1,792	1,929	3,721	1,205	1,768	2,973	6,694
理工学メディアセンター	1,203	1,305	2,508	3,127	5,701	8,828	11,336
湘南藤沢メディアセンター	1,214	1,230	2,444	505	660	1,165	3,609
合 計	11,108	10,067	21,175	11,954	13,455	25,409	46,584

2-3. 蔵書統計<非図書資料>

内訳 各メディアセンター	種 別	光学・ 磁気媒体		合 計
		タ イ プル 数	A-V資料	
年 間 新 規	三田メディアセンター	タ イ プル 数	118	335
		箇 数	1,472	1,870
	日吉メディアセンター	タ イ プル 数	165	736
		箇 数	457	1,406
	医学メディアセンター	タ イ プル 数	63	142
		箇 数	63	282
	理工学メディアセンター	タ イ プル 数	96	96
		箇 数	215	217
	湘南藤沢メディアセンター	タ イ プル 数	203	335
		箇 数	504	826
合 計		タ イ プル 数	645	1,644
		箇 数	2,711	4,601
累 計	三田メディアセンター	タ イ プル 数	2,548	11,080
		箇 数	93,771	109,883
	日吉メディアセンター	タ イ プル 数	1,103	4,864
		箇 数	12,545	22,460
	医学メディアセンター	タ イ プル 数	407	2,129
		箇 数	2,347	6,700
	理工学メディアセンター	タ イ プル 数	570	748
		箇 数	1,975	2,406
	湘南藤沢メディアセンター	タ イ プル 数	956	3,213
		箇 数	12,249	16,293
総 累 計		タ イ プル 数	5,584	22,034
		箇 数	122,887	157,742

3-1. 利用統計<貸出及び閲覧冊数>

内訳 各メディアセンター	館外貸出					館内閲覧		前年度比 館外貸出
	教職員	学生	その他	塾外	計	一般図書	貴重書	
三田メディアセンター	18,575	167,255	7,638	2,157	195,625		1,338	0.99
日吉メディアセンター	11,707	134,694	4,914	0	151,315			0.96
医学メディアセンター	56,542	18,102	0	51	74,695			0.93
理工学メディアセンター	1,796	53,800	53	13	55,662			0.94
湘南藤沢メディアセンター	3,243	85,359	423	1001	90,026			1.11
合 計	91,863	459,210	13,028	3,222	567,323		1,338	平均 0.97

3-2. 利用統計<相互貸借（複写依頼を含む）>

内訳 各メディアセンター	現物（冊）	依頼を受けた（貸）			依頼した（借）			合 計
		国 内	国 外	計	国 内	国 外	計	
三田メディアセンター	現物（冊）	284	0	284	363	370	733	733
	複写（件）	4,835	13	4,848	2,373	645	3,018	
日吉メディアセンター	現物（冊）	29	0	29	15	2	17	17
	複写（件）	544	2	546	341	53	394	
医学メディアセンター	現物（冊）	50	0	50	66	1	67	67
	複写（件）	21,571	142	21,713	2,895	74	2,969	
理工学メディアセンター	現物（冊）	13	0	13	9	0	9	9
	複写（件）	20,703	0	20,703	2,296	0	2,296	
湘南藤沢メディアセンター	現物（冊）	28	0	28	164	0	164	164
	複写（件）	527	0	527	619	27	646	
合 計	現物（冊）	404	0	404	617	373	990	990
	複写（件）	48,180	157	48,337	8,524	799	9,323	

参考データ：早慶ILL（内数）

	三田MC		日吉MC		医学MC		理工学MC		湘南藤沢MC		合 計	
	現物	複写	現物	複写	現物	複写	現物	複写	現物	複写	現物	複写
貸	284	587	29	80	16	569	13	563	15	42	357	1,841
借	259	807	14	88	0	46	9	548	42	228	324	1,717

* 現物は冊数、複写は件数

3-3. 利用統計<複写サービス>

内訳 各メディアセンター	種別						
		件数	枚数	件数	枚数	件数	枚数
三田メディアセンター	電子コピー(オペレーター付)	4,058	81,358	5,343	71,488	9,401	152,846
	電子コピー(セルフ式)		4,497,530				4,497,530
	OHP・スライド作成	12	95			12	95
	マイクロ資料コピー	1,665	100,345			1,665	100,345
	簡易印刷	98	50,755			98	50,755
日吉メディアセンター	電子コピー(オペレーター付)	535	4,564	546	3,582	1081	8,146
	電子コピー(セルフ式)						
	マイクロ資料コピー(セルフ式)	82	1,899	2	36	84	1,935
医学メディアセンター	電子コピー(オペレーター付)	26,100	190,720	83,943	500,338	110,043	691,058
	電子コピー(セルフ式)		576,701				576,701
	OHP・スライド作成	26	79			26	79
	マイクロ資料コピー	16	83			16	83
理工学メディアセンター	電子コピー(オペレーター付)	735	7,002	20,341	167,743	21,076	174,745
	電子コピー(セルフ式)		915,516	344	9,259		924,775
	OHP	447	1,631			447	1,631
	マイクロ資料コピー	56	905			56	905
湘南藤沢メディアセンター	電子コピー(オペレーター付)	2085	10,250	403	3,199	2,488	13,449
	電子コピー(セルフ式)		687,073				687,073
	OHP・スライド作成	31	2,235			31	2,235
	マイクロ資料コピー		0				0
	簡易印刷	1,344	1,944,656	150	188,134	1,494	2,132,790

* 斜線は計上不能

参考データ：電子コピー枚数

	オペレーター付	セルフ式	合計
三田メディアセンター	152,846	4,497,530	4,650,376
日吉メディアセンター	8,146	1,439,305	1,447,451
医学メディアセンター	691,220	576,701	1,267,921
理工学メディアセンター	174,944	924,775	1,099,719
湘南藤沢メディアセンター	13,449	687,073	700,522
合計	1,040,605	8,125,384	9,165,989

3-4. 利用統計<レファレンス・サービス>

内訳 各メディアセンター	学 内 者		学 外 者	合 計
	教 職 員	学 生		
三田メディアセンター	3,279	29,099	4,547	36,925
日吉メディアセンター	2,894	5,278	452	8,624
医学メディアセンター	1,566	176	1,906	3,648
理工学メディアセンター	1,191	7,374	2,103	10,668
湘南藤沢メディアセンター	356	3,452	88	3,896
合 計	9,286	45,379	9,096	63,761

3-4. 利用統計<レファレンス・サービス>

業務内容別

	文 献 所 在 調 査	事 項 調 査	利 用 指 導	そ の 他	合 計
三田メディアセンター	15,237	1,326	19,733	629	36,925
日吉メディアセンター	2,468	1128	4,962	66	8,624
医学メディアセンター	1,658	1,430	560	0	3,648
理工学メディアセンター	6,986	125	3,389	168	10,668
湘南藤沢メディアセンター	413	40	3,437	6	3,896
合 計	26,762	4,049	32,081	869	63,761

編集後記

メディアネットをめぐるこの1年間(正確には1998年8月から1999年7月まで)には、図書館システムのリプレースと集中処理機構の立ち上げ、2月のITC(インフォメーションテクノロジーセンター)発足、3月の白楽サテライト・ライブラリー開設と大きな事業が続きました。また、国際協力という点では、今年3月にカリフォルニア大学サンディエゴ校との間で締結された図書館員交換協定に基き、協定第1号として五十住早苗さんをお招きました(4~6月)。

7号では全地区的メディアセンタースタッフが多少なりとも関与した、システムのリプレースについて特集を組んでみました。システム担当や関連する現場担当者の努力、それにネットワークテクノロジーセンター(仮称)開設準備室(ITCの前身)の技術的な支援によって、目標は短期間に達成されましたが、SEの過酷な実態が“スタッフルーム”(「SE残酷物語」)に紹介されているように、中核となった担当者の業務内容や実生活は恐らくこれに類似したものであったと想像されます。この誌面を借りて関係各

位の労苦に感謝したいと思います。

新しいシステムKOSMOS-IIは特集記事(入江)にあるように、安定稼動をめざして日々、改良が加えられています。ゆるぎない基盤のうえに新たな機能を付加することが今後の課題です。

西暦2000年を迎えるにあたり、今世紀の回顧や来世紀の予測がマスコミの話題ですが、図書館の世界はどう変化するのでしょうか。情報のデジタル化、グローバル化、メディア(媒体)の進化などがキーワードにあげられそうですが、人間本来の感性やメンタルな部分にも心地よさを与えるような要素も欲しいと個人的には思います。いずれにせよ、未来のあるべき姿を考える節目に来ています。

最後に余談になりますが、“ティールーム”に原稿をお寄せいただいた荻野安奈助教授は、作家というもう一つの顔もお持ちです。無理に(?)フロッピー原稿をお願いするのではなくて、手書き原稿を頂戴して別途保存すべきだったと後悔しています。

(酒井明夫)

MediaNet 第7号 1999年10月31日 発行

編 集	MediaNet 編集会議
発行者	松下 智之
発 行	慶應義塾大学メディアセンター本部 〒 108-8345 東京都港区三田 2-15-45 電話 03-3453-4511 (内線 2502)
表紙デザイン	株式会社 AXHUM (藤田明浩)
印 刷	共立コミュニケーションズ(株)

MediaNet 編集会議
編集長
編集員
森三枝子 長谷川博子 三谷三恵子 三瓶美和子
E-mail: medianet-edit@mita.lib.keio.ac.jp

「MediaNet No.7」正誤表

・目次6行目

「原 直美」は「原 直実」

・80ページの1. 図書費<平成10年度実績及び11年度予算>は次の表に差し替え(訂正箇所は、イタリックでアンダーライン)。

内訳 各地区メディアセンター	平成10年度実績<単位:円>			平成11年度予算<単位:千円>		
	図書支出	図書資料費	計	図書支出	図書資料費	計
三田メディアセンター	<u>656,158,857</u>	<u>70,507,399</u>	<u>726,666,256</u>	<u>693,910</u>	<u>74,983</u>	<u>768,893</u>
図書館	<u>306,404,721</u>	<u>70,507,399</u>	<u>376,912,120</u>	<u>303,093</u>	<u>74,983</u>	<u>378,076</u>
指定寄付金	<u>1,835,929</u>		<u>1,835,929</u>			<u>0</u>
学部*	<u>347,918,207</u>		<u>347,918,207</u>	<u>390,817</u>		<u>390,817</u>
(私大研究設備相当額)	<u>(27,793,662)</u>			<u>(27,817)</u>		
日吉メディアセンター	<u>173,444,401</u>	<u>13,558,015</u>	<u>187,002,416</u>	<u>175,131</u>	<u>15,373</u>	<u>190,504</u>
図書館	<u>60,909,502</u>	<u>11,056,071</u>	<u>71,965,573</u>	<u>60,150</u>	<u>12,877</u>	<u>73,027</u>
指定寄付金			<u>0</u>			<u>0</u>
学部*	<u>112,534,899</u>	<u>2,501,944</u>	<u>115,036,843</u>	<u>114,981</u>	<u>2,496</u>	<u>117,477</u>
(私大研究設備相当額)	<u>(7,481,317)</u>			<u>(16,095)</u>		
医学メディアセンター	<u>188,569,737</u>	<u>6,709,012</u>	<u>195,278,749</u>	<u>209,800</u>	<u>21,314</u>	<u>231,114</u>
理工学メディアセンター	<u>187,290,162</u>	<u>26,205,612</u>	<u>213,495,774</u>	<u>200,743</u>	<u>30,630</u>	<u>231,373</u>
指定寄付金			<u>0</u>			<u>0</u>
(私大研究設備相当額)						
湘南藤沢メディアセンター	<u>156,482,943</u>	<u>50,145,707</u>	<u>206,628,650</u>	<u>161,000</u>	<u>50,032</u>	<u>211,032</u>
合 計	<u>1,361,946,100</u>	<u>167,125,745</u>	<u>1,529,071,845</u>	<u>1,440,584</u>	<u>192,332</u>	<u>1,632,916</u>

・81ページの2-1. 蔽書統計<年間受入及び蔵書冊数>は次の表に差し替え(訂正箇所は、イタリックでアンダーライン)。

内訳 各地区メディアセンター	单 行 書			製 本 雜 誌			合 計
	和	洋	計	和	洋	計	
三田メディアセンター	<u>19,201</u>	<u>15,894</u>	<u>35,095</u>	<u>6,099</u>	<u>9,844</u>	<u>15,943</u>	<u>51,038</u>
図書館			<u>0</u>			<u>0</u>	<u>0</u>
学部			<u>0</u>			<u>0</u>	<u>0</u>
日吉メディアセンター	<u>12,207</u>	<u>5,611</u>	<u>17,818</u>	<u>2,204</u>	<u>3,561</u>	<u>5,765</u>	<u>23,583</u>
図書館			<u>0</u>			<u>0</u>	<u>0</u>
学部			<u>0</u>			<u>0</u>	<u>0</u>
医学メディアセンター	<u>1,258</u>	<u>812</u>	<u>2,070</u>	<u>1,935</u>	<u>6,054</u>	<u>7,989</u>	<u>10,059</u>
理工学メディアセンター	<u>1,983</u>	<u>617</u>	<u>2,600</u>	<u>1,348</u>	<u>3,388</u>	<u>4,736</u>	<u>7,336</u>
湘南藤沢メディアセンター	<u>7,937</u>	<u>2,444</u>	<u>10,381</u>	<u>2,268</u>	<u>2,557</u>	<u>4,825</u>	<u>15,206</u>
合 計	<u>42,586</u>	<u>25,378</u>	<u>67,964</u>	<u>13,854</u>	<u>25,404</u>	<u>39,258</u>	<u>107,222</u>
三田メディアセンター	<u>769,322</u>	<u>850,818</u>	<u>1,620,140</u>	<u>218,562</u>	<u>220,983</u>	<u>439,545</u>	<u>2,059,685</u>
図書館			<u>0</u>			<u>0</u>	<u>0</u>
学部			<u>0</u>			<u>0</u>	<u>0</u>
日吉メディアセンター	<u>356,723</u>	<u>177,394</u>	<u>534,117</u>	<u>46,664</u>	<u>59,411</u>	<u>106,075</u>	<u>640,192</u>
図書館			<u>0</u>			<u>0</u>	<u>0</u>
学部			<u>0</u>			<u>0</u>	<u>0</u>
医学メディアセンター	<u>44,622</u>	<u>44,736</u>	<u>89,358</u>	<u>68,446</u>	<u>146,219</u>	<u>214,665</u>	<u>304,023</u>
理工学メディアセンター	<u>64,843</u>	<u>35,034</u>	<u>99,877</u>	<u>47,989</u>	<u>133,151</u>	<u>181,140</u>	<u>281,017</u>
湘南藤沢メディアセンター	<u>115,015</u>	<u>81,409</u>	<u>196,424</u>	<u>28,320</u>	<u>22,458</u>	<u>50,778</u>	<u>247,202</u>
合 計	<u>1,350,525</u>	<u>1,189,391</u>	<u>2,539,916</u>	<u>409,981</u>	<u>582,222</u>	<u>992,203</u>	<u>3,532,119</u>

・82ページの2-3. 蔽書統計<非図書資料>の年間新規の湘南藤沢メディアセンター欄
箇数「504」を「540」に、合計「826」を「862」に訂正

・83ページの3-1. 利用統計<貸出及び閲覧冊数>の湘南藤沢メディアセンター欄
塾外「1001」を「1,001」に訂正

・84ページの3-3. 利用統計<複写サービス>の一段目内訳・種別欄の右側
「件数・枚数」の上の空欄に左から、「塾内」、「塾外」、「合計」を追加

展示会予告

『慶應義塾図書館蔵 御伽草子』

主 催：慶應義塾図書館 協賛：丸善株式会社

会 期：2000年1月24日（月）～29日（土）最終日は5時閉場

場 所：丸善・日本橋店4階ギャラリー

講演会：4階特設会場（各日とも14:30～15:30,先着80名）

24日『住吉物語の魅力』

東京大学大学院総合文化研究科教授 三角洋一

25日『御伽草子の版本について』

慶應義塾大学文学部教授 関場武

26日『『弁慶物語』と聖クリストフォルス伝 一東西中世の巨人伝説一』

学習院女子大学国際文化交流学部教授 德田和夫

27日『すけくに・サコク・ソコク 一『佐国物語』小攷一』

國學院大學文学部教授 德江元正

28日『奈良絵本・絵巻の製作』

慶應義塾大学文学部助教授 石川透

慶應義塾図書館が所蔵する御伽草子100作品100点を展示解説します。御伽草子は、室町時代から江戸時代前期にかけて作られた短編の物語群です。内容は、平安時代からの王朝物語の伝統を受け継ぐもの、庶民や武士を主人公とした新しい物語、鳥や動物たちが活躍する愛らしいお話など、さまざまあります。当時の人々はこれらの作品を絵本や絵巻物として鑑賞していました。慶應義塾図書館には、極彩色の挿し絵が入った奈良絵本と呼ばれる絵本や絵巻物、挿し絵入りの印刷本、室町時代の古写本など、多くの貴重な御伽草子が所蔵されています。今回の展示では、御伽草子として100種類の作品を選び、その作品を代表する伝本を展示いたします。内容としても、本のかたちとしても、さまざまな種類がある御伽草子をお楽しみください。



<http://www.mita.lib.keio.ac.jp/>

三田メディアセンター



<http://www.hc.lib.keio.ac.jp/>

日吉メディアセンター



<http://www.lib.med.keio.ac.jp/>

医学メディアセンター



<http://www.lib.st.keio.ac.jp/>

理工学メディアセンター



<http://www.sfc.keio.ac.jp/mchtml/>

湘南藤沢メディアセンター



Keio University
MediaNet